

354
361

樂行脚苦行脚

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特235
497

水蔭行脚全集

第五卷

樂行脚苦行脚



江
水
社
藏
版

自序

樂行脚 苦行脚

行脚に苦樂あらんや。抑も行脚の名目からして濫用である。無學なり、無智なり。然う叱らな
いで置いて下さい。既に第一巻より連續御愛讀の方ならば、之に對して充分御諒解下さる事と存
じますが、突然この第五巻のみ御覽の方に向つては、一應申開きをさせて頂きます。

老年に及び、普通文壇人と歩調を俱にし得ず。已むを得ざる自著自版。最後の努力として實感
を其儘に發表の紀行文。その爲に在來の型を固執する方々からは、著者の人格に就てお疑問をも
生じられ、又書かれて御迷惑にも感じられるでせうが、その點は能く承知してゐまして、若もそ
れを顧慮に入れません。自己の面目なんか問題にしてゐません。新生面を開拓の犠牲として、い
くらでも御擯斥を甘受します。

但し、實感本位は、暴露戰術と全然違ひます。私の云ふ實感主義は、虚偽の語れぬ者の進む唯
一の本道です。行脚して自然に人格を磨き、實感と詩想と一致するまでに、自己の修養を積みた
いのです。赤裸々に成つてから、無縫の錦衣が着たいのです。

それから、初めて私の全集の一部分だけお讀みの方から『老行脚』と名乗るのをイヤがられて

人間は氣の持方一ツだ。シツカリしろなんて、能く御忠告を頂きますが、この點も自覺し過ぎてゐます。けれども、老人の無闇に空威張りたて、若いツモリで押通しつゝも。端からの目では老衰の悲慘。そんなのが多い中に、自分で『老行脚』と名乗りながら、事實に於て若い者にも出来ぬ、捨身の荒行をしてゐる處に、私の稚氣眩氣横溢が見えませう。それも併し退々には、修正されてまゐりませう。

まア氣長に御後援を願ひます。——行脚の御紹介を——全集の御紹介を——揮毫の御紹介を——知己より知己へ——その又知己より知己へ。

昭和九年一月吉日

泣虫老行脚 水 蔭

六十六老

目次——水蔭行脚全集（第五卷）

樂行脚 苦行脚

青森中心行脚……………一

仙臺 青森 淺蟲 弘前 黒石 大鰐 鷹巢

中國往路日記……………三

名古屋 大阪 福山 鞆 吳 情島

長崎中心行脚……………四

佐世保 長崎 雲仙 小濱 端島 諫早 多良嶽 湯江 島原
大村 武雄 大牟田 久留米 佐賀 福岡

中國歸途日記……………一三

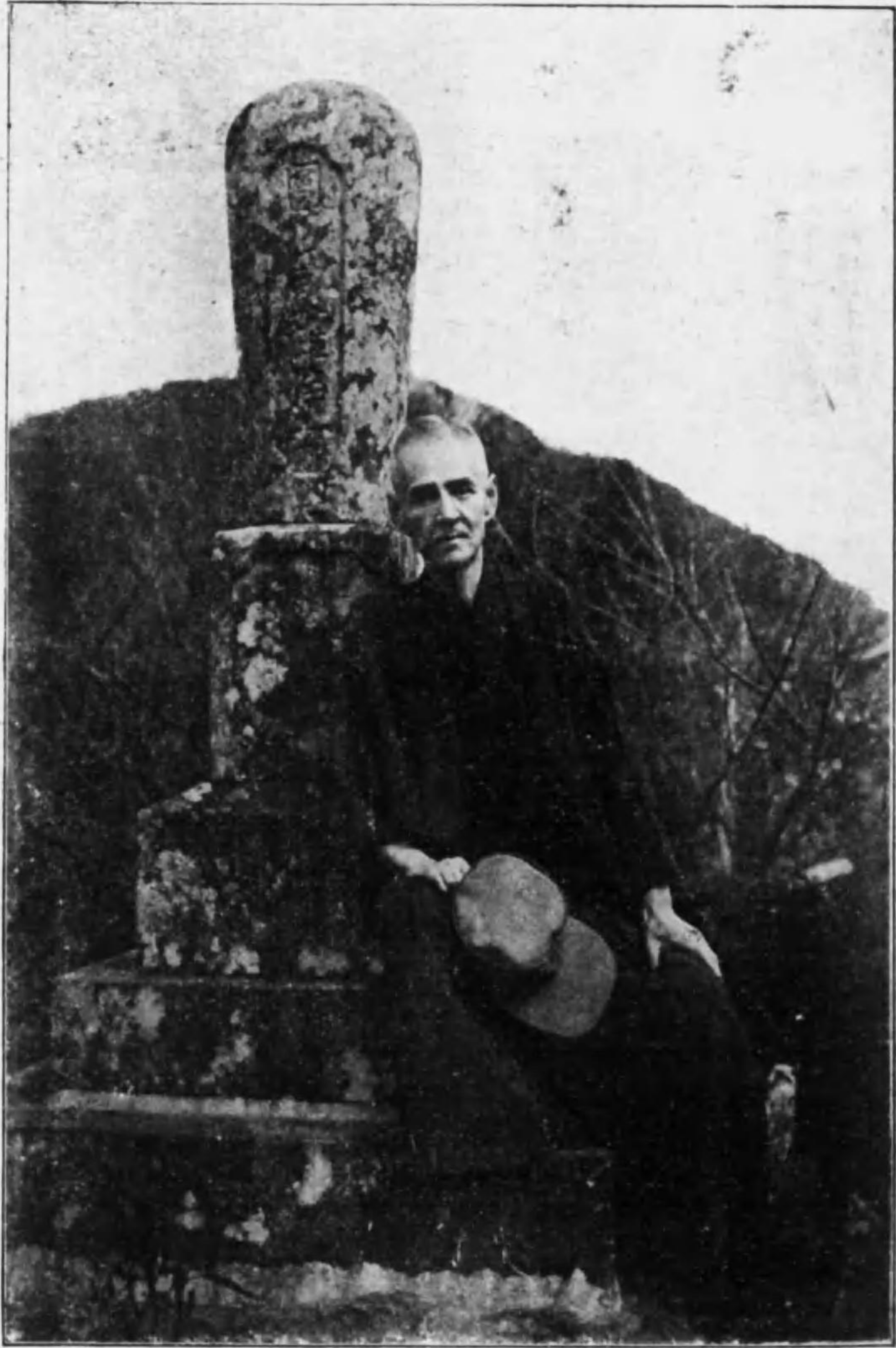
下關 尾道 瀬戸内海 松永 今津 本郷 福山 宮内 金丸
大石峽 姫路

打明けばなし……………一五

寫眞版 目次

(口 畫)

丸山權太左衛門の墓と著者	一
長崎諏訪神社々前	二
長崎松亭の岡山縣人會	三
吳の華山	三
備後一の宮の石橋	四
雲仙嶽の頂上	四
久留米の廣樂園	五
瀬戸向島海上	五
尾道濟法寺の大手洗鉢	六
長崎高等女學校講堂	六
姫路こども會	六
(挿 畫)	
情島松本氏別邸	四
幼年運動家	四
駕に乗つた著者	五
多良嶽と探勝隊	五
四ツ山講堂に立つ著者	三
ゲンコツ和尚の碁盤	三
福山驛頭の老行脚	一



山口靜夫氏撮影

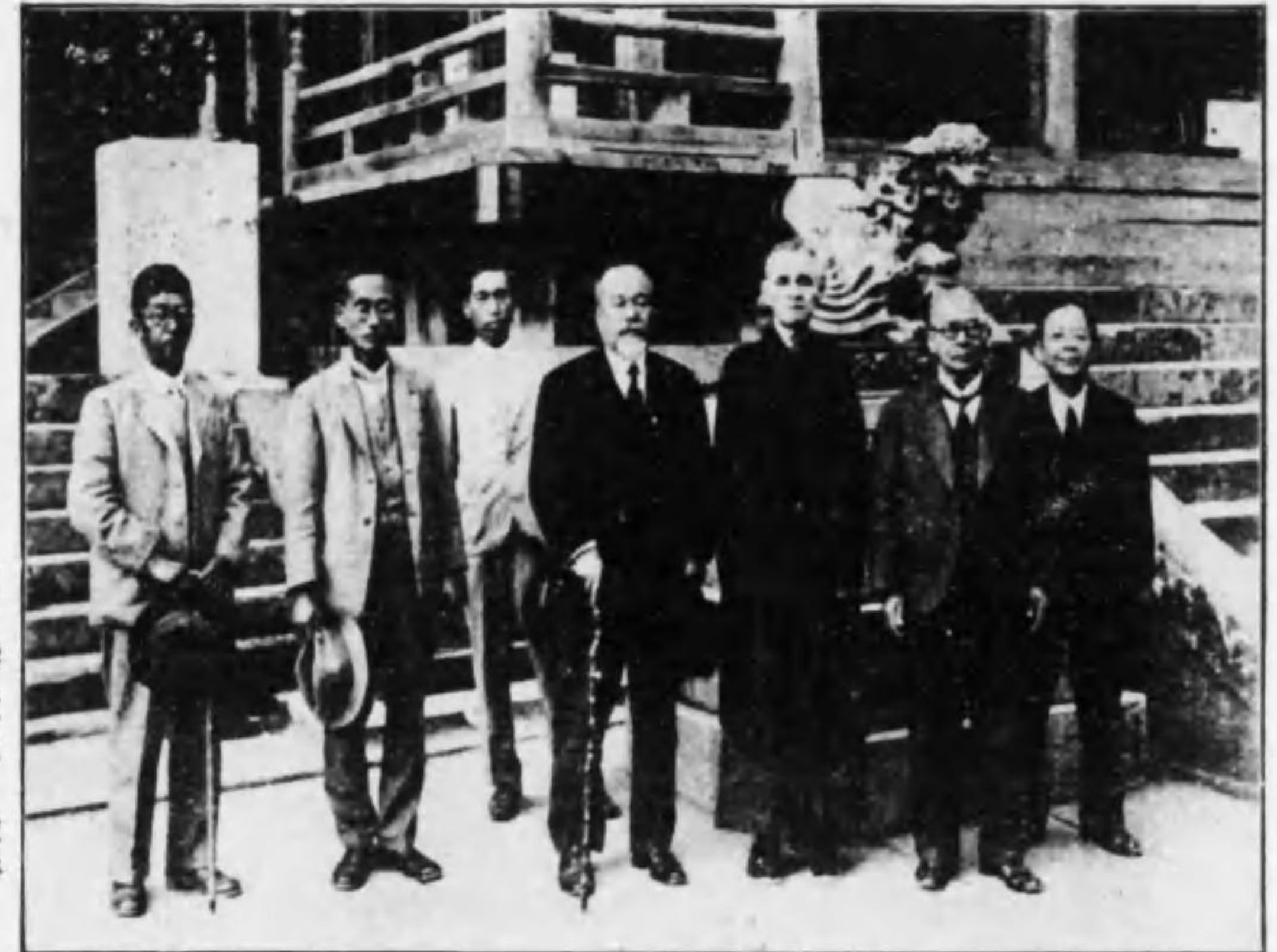
丸山權太左衛門の墓と著者



吳の華山
 柿本吉郎氏 谷大吉氏 著者 女將 上田繁氏 山見氏



備後一の宮の石橋
 桑田三氏 有永一氏 著者 濱本鶴實氏



山口静夫氏 撮影

長崎諏訪神社々前
 太田寛氏 雨森一氏 著者 中川秀氏 蒲原春夫氏 宇野武夫氏 津田繁二氏



長崎松亭の岡山縣人會

平木熊吉氏 撮影



上海島向戸瀬
人夫子壽詞 氏郎四田村 氏亭月野樋 者著



寺法濟道尼
鉢洗手大ふいとたげ上持で手片が和外物
者著 師龍金上村 史女田益 人夫上村 人夫田村 氏倉小 氏田村 氏木平
氏介可田村

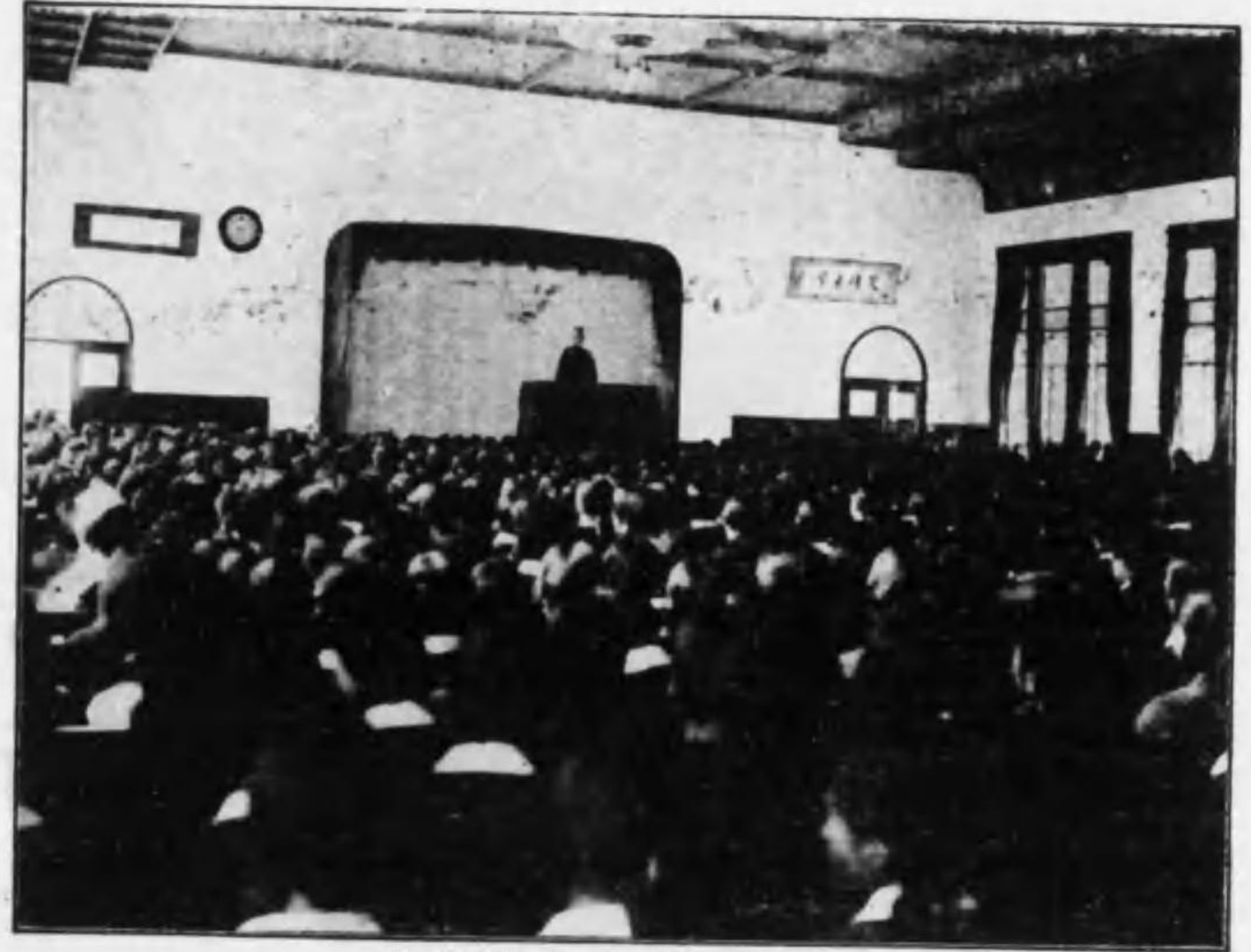
平木馨氏 撮影



上頂の嶽仙雲
氏男茂森藤 者 著 氏二危田鶴 氏寛田太 氏門衛右市田中



園樂廣の米留久
者 著 士博勝輝津重八



長崎高等女學校講堂
千餘名女學生諸嬢に國民性説く著者



姫路ここも會

高島雄二氏 中野秀次氏 沼田藤次氏 魚橋參夫氏 石野米次郎氏 伊藤脩氏
石野輝子 後藤節子 前川靜子 島兒隆氏
横尾榮子 森美春子 著者 中野とし子 岡崎愛子 藤田ひろ子 石野米子

樂行脚苦行脚

—水蔭行脚全集—(第五卷)

青森中心行脚

仙臺 青森 淺蟲 弘前 黒石 大鰐 鷹巢

江見 水蔭

故杉浦重剛先生の令嗣眞鐵氏を招待して、東北に散在する稱好塾友が青森市に集合。そこに塾友會を催したい。それに是非自分にも同行せよ。行脚の後援に就ては、既に彼地の塾友とも諒解が成立してゐる。斯ういふ勧誘を同門の鹽田彌惣八老(大日社主幹)から受けた。之は矢張同門の茶原義雄氏の劃策。自分としては、饑饉後の東北に趣味人を迎へる餘裕の無いのが豫想されて、危ぶまざるを得なかつたが、鹽田老は大呑込で、既に青森市だけでも五十餘名の揮毫希望者を獲得し、更に他町村でもそれ／＼塾友が奔走してゐる上に、青森縣廳としても力癪を入れてゐる云々。ついそれに乗る氣に成つた。

寄り道の仙臺

二

どうも馴れぬ人の肝煎なので不安。塾友の世話のみにも頼られず。各地二三の知人に依頼状を先づ發し、又行きがけに仙臺から放送、その連絡も取れて、昭和八年九月十九日、一足先に出立。家族見送り例の如し。午後十時半發車（この鹿島立からしてトンチキ。十時發と誤まつて九時過に飛出し、一時間餘も無駄）初めて三等寢臺車下段に乗った。これは鹽田老が當日速達で切符を送つてくれたのだ。意外に乗り心地よし。唯天井が低く、頭コツン／＼、何度やつたか知れず。さなきだに悪い頭が、いよ／＼悪く、時計が狂つて二時間も進んでゐるの知らず。平驛通過が眞暗なのに覺るなく、もう仙臺近しと下車の準備。斯くの如く最先からして悪るかつた。（服装、セル單衣、拾羽織、夏外套。其他に用心として、袴、道行、紋付羽織、絹羽織、眞綿等持參）
曉の窓外所見句。

山に雲畑に連らなる蕎麥の花
頭張つていつまでゐるか破れ案山子

二十日、快晴。午前七時仙臺着。いつもは針久別館ながら、局の方では指定旅館境屋に通知したので、同家から番頭。其上に放送局講演係茂木徳郎氏も、御叮嚀に出迎へられたので、初めて境屋へタクシー（芭蕉辻に近し）。二階洋室に通されて勝手悪し。直ちに入浴。そこへ塾友只野淳氏から電話。裸體でマゴ／＼。すると脱衣室に中繼機が置かれてあり、これには敬服（境屋はサアピス最善）九時には只野氏來訪。これから直ちに眞葛の墓へ案内するといふ。

今夕の趣味講演放送は「眞葛と馬琴」といふので、例の「奥州波奈志」其他の著者、仙臺の女流文人只野眞葛と、曲亭馬琴との關係を語るもので、その眞葛の末孫たる只野氏が、何くれと世話を焼かれるのである。この只野家の祖先に以風といふ俳人があり、大湊三千風と親交があつたとか。

タクシーを走らして新寺小路の松音寺に行く。五峯山といひ曹洞宗である。（元は連坊小路にあつたが、維新後廢寺。それを此地の長泉寺跡に再興）黒門前にて下車。一二町の間櫻並木。花時には賑ひが想はれた。その左側に最近改葬の眞葛の墓目立てと、參詣は後にして、先づ本坊に向ふ。山門の兩側は、白壁黒腰板、なか／＼立派。

住職金山活牛師に對面。此日、彼岸の入りにて參詣者多き中を、特に應接されて、眞葛女史の遺品遺墨等、内見を許された。これは改葬の際に、遺族たる只野氏其他立會で、保留した品で、樂焼茶碗、筭、煙管、眼鏡、懷中鏡、六道錢、棺の釘、それに遺髪等。

◆遺髪は、赤く短かし。文政八年から今日まで能く遺つたもの。赤土で凝結してゐた。◆六道錢の中には、別に珍錢も見當らず。一箇元祐通寶らしきが讀めた。◆眼鏡は舊式の鼻眼鏡◆懷中鏡は、ギヤマン製で、當時としてはモダン品。

同時に、先妻の桂月院清輪貞香大姉の遺物も見た。紅皿二箇。瑤瑁櫛。同筭。竹の筭。朱檀の箸（尖が銀冠せ）懷中鏡。柄鏡（三葵紋、鶴龜、松竹梅、浪、澤潟、藤原光長作。徑約八寸）煙管、六道錢、棺の錠等。

先妻の方が遺物豊富なのは、大藩の少老、千二百石、只野伊賀行義の全盛時代に死亡したので、

當然。眞葛は晩年孤獨に均しく、寂しく六十三歳で歿したのだから、従つて遺物も乏しいのだ。遺墨としては『あねはの松』巻紙の草稿、其他詠草あり。手蹟美しく、さすがの馬琴をして、文交をつけさせただけの魅力が見えた。

此所へ、在仙の塾友、中目尙彦氏が、自分の跡を追つて訪ねて來られた。共に墓參。稻井石といふ自然石風に丸く加工した石碑面には、中央に、定紋下「挑光院聯寶發燈大姉」左方に「文政八酉年」右方に「六月二十六日 工藤球卿女」と刻された。自分は、香花を手向けつゝ、「今夜、ラチオで、貴女の事を放送します」と奉告した。

中目氏に別れて、只野氏とタクシーで驛に立寄り、今夜の三等寢臺券を取つた序に、「都新聞」を買つて見ると『貞奴物語』の事實談の中に、自分と藤陰靜枝との、古い挿話を、寫眞入りで掲載。他の一面には先日放送した小波の追悼童話の批評が出てゐて、一紙に二箇の記事が掲げられたのは、光榮でもあり、恐縮でもあつた。

其記事といふのは、川上が『オセロ』初演の稽古を相州茅ヶ崎で行つた時に、二人の間に浮名が立つた——その頃は告白小説なんてまだ流行らなかつたが、氏と靜枝との關係を一篇の小説に書き綴つて、決して岡焼連が何のかのと騒ぎ立てるやうなものでない事を釋明した。それで皆の疑念も初めて氷解したのだ云々。

それは自分の三十三歳の時で先づ全盛期だつた。今はそれ處か、老行脚の奥州落だと思ふと、寂しかつたが、それでも今夕放送するといふ幾分の華やかさに慰められた。

新築中の齋藤報恩館に、文學士小倉博氏を訪問。氏は矢張、眞葛に由縁ある人。それに大漕三千

風に就ても調査を進めてゐられる。猶郷土史研究にも造詣深く、『名勝松島』『御國淨瑠璃』等の著述もあり。趣味を語り合へば盡きぬのだが、先を急ぎ、辭去。此所で案内役の只野氏と別れやうとしたが、自分の行先が昆布谷といふ古物店と看破して、掘出し物でもされては、土地の者の不面目でも思つたか、一緒に行かうと強て附いて來られ、其結果、自分が特に主人に鐔を見せよと註文して、一々選定中、突然横から手を出して、北斗七星透しの大鐔の珍品を、素速く抜かれた。これは趣味道から云へば問題だが、この人は又そんな事は無頓着の流儀。喧嘩にも成らず。苦笑。(斯くして此所で鬱憤を晴らすのは、全くその大鐔がほしかつたので)他の數枚を求めたら、懷中空、心細し。

獨バスにて境屋に歸り、中食に親子丼、不味。漸く汽車つかれを思出し、ベッドに入つて午睡。三時頃、女中に起された。石巻から遠藤原始時氏が來たのだ。同行、日吉町に只野氏を訪ひ、藏鐔を見せて貰ふ。五輪透しの鐵大鐔は、名物中尊寺の辨慶鐔と同型、先刻抜かれた七星大鐔も亦然り。かへすゝも残念也。

歸りて食事後、放送テスト。三十一分を要するに驚く。そこへ局より迎への自動車、已むなく車中にて草稿カット。草放送局長不在、茂木氏迎へられた。六時二十五分より放送。

郷土の事は郷土の人が一番能く知つてゐる。しかし文士の心情は文士が又一番能く知る。此意味に於て、仙臺の眞葛女史に對する馬琴の實感を語らして貰ひたい。

然ういふ意味の前置をした。然るにカット仕過ぎて、二十五分で終了。それは好いが、會計係が自分への報酬を忘れて、先へ退局。そんな譯で、報酬は後から届けるとあり。ハタと當惑。今夜山

立するのに殆ど無一物。アテにして既に某氏の鐔を買入れの約、それが果されぬ。變な顔をして歸宿。(間もなく茂木氏が届けに來られた)

驛前の小料理屋から電話。後發の鹽田老、杉浦若先生同伴、中目尙彦氏の案内にて松島遊覽。今此所に歸着して待つとあり。直ちに行きかゝる處へ、小倉、遠藤、只野三氏來訪。併し既に出掛つてゐるので、途中まで三氏と同車して、忙しく挨拶を交して、別れた。

驛待合室にて杉浦鹽田中目三氏に會つた。茂木只野二氏見送りに來られた。九時五十二分發。三等寢臺車に入つたが、杉浦鹽田二氏、自分を見ハダレ、寢臺車の位置を知らず、列車全部を貫歩して、漸く探し當て來たはよいが、ボーイに寢臺の番號を問はれて又マゴク。寢臺券をポケットのどこへ入れたか、それを探すのに大分時間を要した。旅馴れぬ者の是非なし。この夜寒し。(三等寢臺には寢具無し)道行を出して着た。

淺蟲温泉と裸島

二十一日、晴。朝六時二十分青森驛着。出迎へ無し。こんな譯ではない筈。荷を提げてホームへ出て、改札口へ向ひかける處へ、靴音バタ／＼で、塾友高橋二郎、中市謙三二氏の他に、十和田湖のぬしともいふべき小笠原松次郎氏、駈付けられて、驛外へは導かず、連絡船の待合室二階食堂入り、こゝで朝食といふ寸法。

中市高橋二氏は既に酒氣紛々。昨夜から旅館で飲みつゞけ、今朝も一パイだか二パイだかやつてゐて、それで出迎へが遅れたといふ。現代離れのした豪傑振。これは熱風に二派有りて、最も惡傾

向の方を代表した遣り口、自分は取らず。密かに鹽田老に警告を發して見ると。
「イエ、大丈夫でせう。皆引受けてくれてゐるのですから、まア委せて置いたら好い様に成るでせう」と善意の解釋。

朝飯の際にも中市氏等は一酌を怠らず。それより驛外へ出ると、ハイヤが待つてゐて、淺蟲温泉へドライブ。青森は自動車賃金が高いのに、汽車の有る處をハイヤ、之なら急行が特に淺蟲へ寄るものを、何の爲に青森まで乗り過したのか、無駄も甚だし。

約三十分を要して淺蟲の南部館着。下宿屋の様な旅館。眺望はよし。温泉熱し。何と思つてか、中市氏、海へ飛込み、泳いだり、潜つたり。杉浦若先生も之に倣はれた。

海に冷えて湯に温まる淺蟲や

雁風呂は噂に遣る湯宿かな

途上、乾し南瓜が屋根の重石と並んで置かれたのが面白く見えた。並木の松よし。淺蟲近くに轢死人があり、見物の群がるのが不快に感じられた。善知鳥と呼ぶ村を過ぎた時に、初めて北邊の旅といふ感じを受取つた。

海上、湯ノ島を眼前。左方、幽かに岩手山を遠望。右方には裸島が目立つた。酒黨は酒。能く飲む人達。こちらは請はれてイヤ／＼ながら揮毫、旅館よりの依頼。此家に限らず、旅館は人に物を書かせるのを特權の様心得て居り、殊に此家の主人の如きは、禮を知らざるも甚だしく、書かしてやると云つた態度。女中、番頭、皆同じ。これは世話人の方で巧く捌くべきを、一緒に成つて平氣で書かせられた。前途以て知るべし。(鹽田老、鍵類書類實印等を入れた紙入を紛失したとて、驛

へ電話を掛けなど、人騒せの結果、矢張自分のポケットに有つたと知れて、安心。老の旅馴れぬのはこれでも知れる)

タクシーにて、裸島の東北大學臨海実験所の水族館見物。そらふき、いしたい、うまづらはぎ、きゆうせんべら、ふさぎんほ、みつくりめばる、りうぐうはぜ等、皆自分には珍らし。

裸島は三原山式で、投身の名所？それで、警察で標柱を立て——一寸待て、困つたら警察へ——としてあつた。一寸待て、は官僚式だ。最少し優しく、一寸お待ちなさい、と何故書かぬ。東北人の頭は總て是なのだ。都會人の敏感過ぎるのもイカンが、青森人の鈍感過ぎるのは、更にイカン。

秋風や何か着せたまき裸島

歸館して自分はセルの上に袴を着た。扱て、「之から、どうするのか」と問うて見ても、少しも要領を得ず。兎に角、弘前まで行く途中で、鳴海氏が乗車する。その鳴海氏の意見で極める」と青森側の塾友(高橋氏は縣吏。中市氏は俳句の選などして、八戸の女學校にも關係があるとか、二氏とも自分よりもズツと年少。在塾の時代が隔絶。同門下でも、其所にイロくある)

弘前中三樓の雅宴

再び又ハイヤで青森驛(小笠原氏は、縣の保勝會で、佛崎及恐山觀光。その爲に別れた)汽車で弘前に向ふ途中、川部驛から、塾友鳴海直四郎氏が乗つた(縣下屈指の豪農とか)自分とは素より在塾の時代が違ひ、初対面。彼、敬意を表し過ぎて、自分の正面には決して視線を向けず。半通り

の挨拶を交した切で、他に一言も及ばず空嘯く。變な奴だと思つたが、捨て置いた。

弘前驛下車、塾友にして眼科醫院長吉安駿策翁が、わざわざ出迎へてゐた。さうして一同先づ元寺町の同氏邸に入った。

同翁とは塾在の時代を共にし、且つ小波と自分とが、別館へ隔離せられた時に、監督？或は同様に隔離せられてゐて、三人別して親密にしてゐた間。先年も既に厄介に成り、全集の後援も得てゐるので、そこへ又今度來て世話に成るのは、自分としては甚だ心苦しかつたが、行掛りで已むを得ず。

夫人、令嬢、他にも久々にて拜顔。斯う成ると、他の同行塾友をお客様にして、自分は主人側として接伴したい位の親しい間。

吉安翁は、一行を、吉野町の中三樓といふ、第一流の料亭に招待された。

舊藩時代の屋敷跡に新築。庭園泉水の模様最も好し。室も茶がよりて結構。料理献立左の如し。

(通し物)なめこ羹生へ、花松魚。(吸物)寄せ鰯、三ツ葉、烏團子、松茸、口柚子。(刺身)かづき鮓、白髪大根、碇防風、おろし山葵。(鉢代り)車蝦天ぶら、谷中生姜、柚子おろし。(汁)なめこ、三ツ葉、粉山椒。

藝妓雛子、梅千代。女中みね。これでは禁酒を破りたかつたが、我慢して、鹽湯を銚子に入れて貰ひ、盃で受けてゐた。

席上互ひに詩吟など試み、久々にて在塾気分。其雅宴半ばに、この家の女將、女中して申入れたのは『食道樂』の寫真版に出てゐる江見先生にソツタリの方が見えたので、吉安先生に問うて見る

と、矢張其人とわかり。御入來を光榮として、記念に一筆云々。斯う云はれて見ると、わるい氣持はせず。快諾して揮毫。淺蟲の旅館とはワケが違ふ。それにしても『食道樂』は能く賣り込んだもの。松崎天民、鼻を高めて可也。

他は鳴海氏に引卒されて旅館へ。自分は吉安翁に伴はれて歸邸。打くつろぎて又物語り。

同窓の昔を語る 夜長かな
此夜快眠。二夜つゞきの三等寢臺車は、實際コタエシ也。

江見に敗けた江見

二十二日、快晴。この午前中、吉安翁は、一行を岩木山の名刹に案内といふのに、鳴海氏頭として肯かず。そんな古臭い處よりも、是非自分の居住地近き黒石へ案内して、附近の工場や、新道路や、文化設備を見せると主張。古建築を觀賞する美術眼を持たぬらしい。グズグズしてゐる間に、時間が遅れて、自然黒石へ行く様に成つた。但し、同町で講演會を開き、揮毫も依頼する云々。昨夜から呑みつゞけの鳴海組、其間に鹽田老挟まつて、オロ／＼、ウロ／＼。氣の毒千萬。

吉安邸を辭して、驛。川部乗替へ黒石下車。數名出迎へてゐたが、一向連絡無く、驛前でゴチャ／＼醜態也。結局、鳴海氏は若先生高橋二氏を連れて、ハイヤを飛ばし去り、何處へ行つたか分らず。自分と鹽田老中市氏と、鳴海共立社といふ會社の二階に、鳴海義文氏が案内した。

講演は町長が縣吏の出張を應待してゐるので、手が廻らず。それに神官の江見左折といふ人が、公會堂で今日は講演。その爲に成立せぬとの事。江見といふ姓は少ない。それが一ツ町で衝突して

江見左折に江見水蔭が鱗折を食つた形。珍現象。

鳴海一家の勢力は黒石の町に於ても偉大であるといふが、世の中は醉態のまゝに左右は出來ぬのであつた。それも好いが、揮毫は好い加減書いて置いて行けと云つたとか、鹽田老が然う聞いたといふので、不安ながら揮毫。

童顔の津輕林檎 や 不老藥
秋晴に初めてお顔津輕富士

右の如き即興物も書いた。『江湖新聞』社主村上民藏氏其他二三來觀。晝餐が出て、酒。それを、どういふ了簡でか、中市氏、人間並に一寸遠慮した。それなら全く飲まぬのかと思つたら、矢張ガブ／＼。

扱て、この揮毫は一體、どういふ事に成るのですかと鹽田老に問うて見ると、それは鳴海君が、どうにかするでせうと一向平氣。素より同老は、特に好意を以て自分の後援をせられるので、決して自分のマネーじゃではないのだから、普通なら一喝する處だが、然うも出來ず。同老は曾て、外務省に在り、哈爾濱の領事等を勤めて人望の有つた人なので、老行脚の爲に俗務を執られるには、勿體なさ過ぎる、と同時に、餘りに君子的に過ぎるので、水蔭獨イラ／＼せざるを得ず。(結局、この揮毫、歸京後に、僅少の包金で蹴られた。先方の意志は好意だらうが、結果は侮辱されたのだ)

一體、若先生を、何處へ鳴海氏は連れて行つたのか、各所へ電話を掛けてもわからず。三時前に漸く姿を現はした。之から大鰐温泉へ、自動車で行くと成つた。(今夜大鰐で塾友會を開くといふ事だけは、昨夜決定されたのだ)

何の爲に黒石へ来たのだか、悪道路に砂利石の大きなのがゴロ／＼。それだけを見せに連れて来られたのか。三時發、自動車二臺、途中荷馬車や乗合馬車に出會ひ、遅々。四時に大鰐温泉加賀助旅館に着いた。

大鰐温泉の一夜

大鰐には、未見の知己、醫學博士増田義男氏がゐられる。それは、全集第一卷からの購讀者であるので、前以て鹽田老及び自分からも、今回の後援依頼状を發して置いた。それで先づ敬意を表しに二人で行つた。診察中の氏に刺を通じて、玄關で挨拶をした。今夜自分の爲に句會を催してくれられるといふ。初めて眞の行脚氣分に成つて、先づ難有し。

自分は獨で、理髮店に入り、髻剃り。其所の主人の語る中に——此所には旅館十戸の他に、温泉客舎といふ間貸しが八十餘戸、自炊客を目的とするので、遠くより布團を持つて來るとか。

加賀助旅館は此地第一流ながら、川に臨み、一寸見晴し好し、といふ程度。設備萬端、及ばぬ點多し。これは東北全體が文化に遅れてゐて、別して青森縣下が遅れ過ぎてゐるので、單に此家のみを非難するのではなく、自分如き文化を呪ふ者には、却つて昔の温泉場氣分が有つて嬉しいのだが、一般遊覽客の標準眼から見たら、大鰐も、淺蟲も、先づ落第であらう。但し温泉その物の効能は別。

夕刻、吉安翁は弘前より、澤口正道氏は秋田縣鷹巣より、竹浪集造氏は板柳より、其他二氏に此方の六人、合せて十一人、東北稱好塾友會が開催された。若先生挨拶、次ぎて自分も。

東北塾友會を催して、舊交や新交を温めるのを、大鰐温泉場に選んだのは、働きである。私も嬉しいから、久々で禁酒を破る、といふのは、實は嘘。風邪を引きかけてゐるから、それを追拂ふ爲で、同席にドクトルもゐられるが、自己療法。それに此室には、大町桂月の額があつて、醉墨淋漓、私に呑め／＼と勸めてゐる云々。

實はの實は、餘りに馬鹿々々しさが續いたので、呑んで氣焔でも吐いてやらうと思つたので。處が、これがイケなかつた。若先生、酒癖あり。東京では禁酒中。仙臺から破つて今日に至つてゐたが、自分が煙たいのでイクラか控へてゐられたらしかつた。それが先に立つて禁酒を破つたので、忽ち痛飲。自分は併し階下で増田博士主催の歓迎句會があるので、重剛先生の聲帯模寫で、詩吟を遣り、其儘鹽田老と共に退席した。

下の爐邊には土地の俳士十數名（芳名を記入し得ざるは、年末執筆を急ぎ、問合せ間に合はず）増田博士は俳號を手古奈と云ひ『東奥日報』の選者でもあり、俳句雜誌『十和田』をも同人と共に發行されてゐる。

秋の水の題で運座。自分も仲間入りしたが、漸く一點を得たのみ。

湯こぼれのほとり濁りて秋の水

増田氏への挨拶として例の老行脚吟。

秋冷を湯に恵まれつ老行脚

揮毫も増田氏の手にて纏められて難有し。（この好意なかりせば、歸路の旅費にも差支へるのであつた）

辭して、自分の一室に入つたが、既に吉安坂口二氏は去り、他は廣間でナカ／＼旺盛。眞鐵君酔興極度に達し、十二時を過ぎても「酒、持つて来い。酒々」

これを鹽田老、鎮め得ず、ウロ／＼。無能なり。自分は何んもなく情け無く成つて来た。慷慨悲憤も好いが、酒の勢を借りて、宿屋で大氣焔は、他の泊り客に對しても相濟まず。困つた事だと、眠り得ず。

其間、眞鐵先生、突然、襖を開いて、自分の室に闖入。事面倒なりと自分は眠りを粧つてゐると眞鐵先生も自分が寝てゐるので、正氣づき、怒吼を中止して、ヂツと自分の寝顔を覗いてゐられたが、ソツと蒲團の捲れを直しつゝ。

「風邪を引くとイケませんよ」と云つてスツと去られた。と思ふと又「酒、酒、酒を持つて来い」自分は、熱涙に咽ばずにはゐられなかつた。今のは眞鐵先生ではなく、重剛先生だつた。故先生ソツクリの温情が露はれてゐた。重剛先生の御聲をソツくりだつた。自分の學生時代、曾て京都で、先生の御旅館に、無遠慮にも御同宿を願つたが、その時の様な感じがされて、溜らなく悲しくなつた。

純情そのものゝ如き眞鐵先生、酒、酒、酒はイケません。私も悪るかつた。貴君もお止め下さいと、泣きながら自分は獨で詫びた。

鷹巢のたんぼ

二十三日、快晴後曇雨、朝から又酒。こちらは鹽田氏と共に大急ぎで飯。それは秋田縣鷹巢町で

眞鐵先生と自分との講演會を催す手配りがしてあるので、それに急ぐのだ。但し、世話方の鹽田老が、交渉に不徹底、漠然とした案で、前以て澤口氏に依頼狀を發したのに基き、澤口氏は之を土地の「秋北新聞」社長成田直次郎氏に依頼し、同氏は又「秋北新聞」主催として、此日開催と發表して了つたのだ。それを昨夜澤口氏が來會して報告、此方の行脚の具體案を提出に、イヤそんな細かな事は知らなかつたので、揮毫の件は全然考慮無しといふ譯。それにしても講演會だけには、是非出席して貰ひたい。それでないと新聞社が困ると云ひ遣して、昨夜去つたといふ譯で、自分としては實に迷惑。同門の好意が、此方のコツに嵌らな過ぎるのに、唯苦い顔の他無し。

眞鐵さん、もう朝から、他の連中と呑んでゐて、講演不可能は知れ切つてゐるので、鹽田老と二人で急いで驛へタクシー。八時〇一分發車。三等にしても二人で鷹巢驛へ往復の賃金、時が時なので胸勘定のあさましさも已むを得ず。九時二十分鷹巢驛着。澤口、成田二氏出迎へ、直ちに實科女學校。

上草屠が無いので上り口に待たされる事、懸値無し of 二十三分。聴衆は約四五十人。天氣が好いので皆山遊びに行つたといふ。

十時半開會、成田直次郎氏開會之辭。曾て赤の出た土地である云々に始まつて、可成り長し。自分は何れの國民性の話。十一時半に終了した。

成田邸に入つて、晝餐を頂いた。同氏の亡祖父は明治初期の代議士、東北政界の雄鎮として知られた成田直衛翁であつた。同翁が人格高く、政事上の功積の他に、公協事業に多大の盡力をされた事は、人多く知る。同邸へは、明治十四年 明治大帝、奥羽御巡幸に際し、御駐輦の光榮あり。御

行在所として記念保存されてゐる。

「たんほ」といふ珍らしき物を頂く。新米を搦子木で潰して、角の杉箸に塗り、強い遠火で焦がさずに焼いたもの。誠に珍品であつた。

當日、名刺を頂きしは、鷹巢町長岩川雄二郎氏。農林學校教諭飯村繁雄氏。小學校長武田丹藏氏。九島與治郎氏。郵便局長成喜氏等。

小揮毫の後、二時五十三分發。大館にて鹽田老下車。自分單獨、何の爲に鷹巢まで行つたのか、せめて講演の聴衆でも多ければ、未だ慰められるが、それも少なし。先づ成田直次郎氏の人格に觸れて、故直衛翁の面影を偲び得たのと、「たんほ」の御馳走に成つたのと、是皆澤口氏の好意と感謝すべきだけのものか。

けれども、自分は本統にツマラない顔をして、三等室に縮まつてゐた。どの驛でも、果物賣の婦人が大勢、角形の籠を背負つて上下して、土語で連りに語り合ふ、それに幾分か氣が紛れた。コロポツクルの活人畫として見たのだ。大鰐が四時三十六分。圖らずも此驛から、鳴海、眞鐵、中市、高橋など、眞赤な顔をして乗り込んで來た。朝から今まで未だ飲んでゐたのだ。さりとては非常時に朗か過ぎたり。

鳴海は川部下車。我々青森着六時〇一分。車軸を流すが如き豪雨。タクシーにて四人、陸奥館本店に入り、裏二階へ自分だけ、他は表二階で又呑み始めたらしかつた。こちらはどうも便所に近く今の世に臭氣留めの設備すら無し。咽ぶほどの臭さ。女中、年増なれど、能く氣がつく。但し顔に鼻が有るや無しや、それほど低く。おまけに兩眼が有りや無しや、それほど細し。正に珍品。その

女中に相談して、三階に移つた。上下足元の苦痛なんか、問題にあらず。按摩。老人にて、頭を揉むのが名人。天の配劑妙にして、連日の疝癪漸く下り、能く眠つた。

再び行かじ青森市

二十四日、晴雨定めなし。朝の内評定。眞鐵先生に、先へ歸つて頂く事にした。高橋鹽田二氏見送る。そこで青森市の揮毫を片付ける事と成り、高橋氏の云ふがまゝに、半折四十、色紙十八、短冊十五揮毫（これが全部アテ無しで有つたのが後に知れた。高橋氏に誠意は有つても、誠實を擧げ得られなかつたのは遺憾）

此日、中市氏は、どこかへ呑倒れてか、顔を出さず。同氏、元來、昨日早く青森へ歸り、今日の日程に就て奔走してくれる筈を、一行と同じく酔つばらひ、夜に入つて歸つたので、講演會や、俳句會や、その連絡全然取れて居らず。『東奥日報』が主催で、一般聴衆を女子師範の講堂に呼ぶ事に成つてゐますと云つた昨夜の言葉。それを信じて、新聞を見ても、そんな記事は見當らず。大概自分の名の出てる記事は、六號活字でも一目で知れるものだが、二三遍新聞を繰り返しても見當らず。漸く探し當てたのを読むと——午後一時から女師講堂に於て講演をなす筈——

筈は酷い。講演を成す筈。それで人の集まる筈が無いと危ぶみつゝ、定刻に行つて見ると、千人から入れられる大講堂に、一個の人影無く、受附臺もなく、立看板もなし。抑も誰が主催者なのか、中市がゐぬので、それもわからず。斯う成ると落語の筋にもある『一體おれは誰だい』に下げがつく。同行の高橋氏は、アタフタと急に電話をかけて、狩立に狂奔しても、今直ぐと誰が來るも

のか。断はられ、ば断はられるだけ、恥の上塗り、江見水蔭をメチャクチャに踏んづけて其上に小便までヒリかけるに均しい。但し、それは誠意なのだらうが。

全然、人が来ないのなら、潔く中止するが、どうやら一人か二人は見えたりやうだといふ。それは『東奥日報』の記者竹内俊吉氏が、『寫眞部の早瀬長之助氏と共に、管を善意に解して来て見ての報告』。

『貴社の主催ではないのですね』

『そんな話も有つたのです』

つまり管なのた。管が實に振つてゐる。江見水蔭、斯う成ると、寧ろ愉快に成つた。他に眞底から老行脚を歓迎して下さる土地もあるのだ。斯くの如く侮辱されるのが有つてこそ、他の土地の御好意が引立つのだと痛苦笑。

然うして評定をしてゐる處へ、四人、確實に四人の來會者を見た。

『有る筈といふので、半信半疑で来て見ましたが、誰も見えぬ。立看板もないので、歸らうかと思つてゐました』といふ一人。

兎に角、四人だけでも、自分の爲に集まられたと思ふと、感激に耐えず。記念の爲に名刺を頂いた。

成田竹次郎氏。日影館初治氏。原子充敏氏。唐牛重次郎氏。

『こんな御待遇をしては、青森市の恥だ』と云つて下さつたのもあり。『得難き機会を逸して、實に惜しい』と云つて下さつたのもあり。『新聞が悪いのだ』とまで云つて下さつた人もあつた。皆、自

分の古くからのファンなのであつた。泣蟲行脚も涙無しでゐられやうか。

千人から入れる大講堂に四人。これでは座談會に直すの他はないと相談してゐると、女子師範の生徒さん達、休日で寄宿舎に残つてゐた人々十七名、同情を寄せて、聴き手の列に加はると銘々椅子を出して集まられた。これも亦感謝に耐えぬ。

牧野ひさ子。高山つ子。櫻田つき子。能代谷ふみ子。久米田てり子。原とみえ子。鎌田り

つ子。吉田幸枝子。古川きく子。横田あさ子。中田やゑ子。菊池しゆん子。三上みつゑ子。

小路口ふさえ子。大久保てる子。鳴海りつ子。安田とみ子の十七嬢。

自分は講演ともなく座談ともなく、漫談的に語つてゐる間に、亡き娘の梅子が、幻影とまでは進まぬながら、眼前に浮び出すのを認めた。それには又左の如き逸話があるので。

數年前、青山會館の圖書館主催で講演會。自分は梅子を連れて定刻直前に行つて見ると、非常な大入。ところがそれは本館の方で藤陰靜枝の舞踊會がある、その見物なので、自分の講演會場は、地下室の圖書館の一部で、そこには一人もゐなかつた。宣傳を怠つたのだ。梅子唯一人しか入場者はなく、いつまで経過しても、梅子一人であつた。それで自分は近くを、タクシーで走らして、高木文氏一家や、林千歳君まで狩立てた。その間に三四十人は集まつたので、漸く講演した事があつた。

誰も來なかつたら、梅子一人にでも聴かせやうかとまで昂奮した。その時の光景を此所に聯想したので。神と成つてゐる梅子は、阿父さん又昂奮してゐるな。私が聴いて上げませうと、女學生の間に挟まつて聴いてゐてくれるに相違ない。然ういふ氣持から生じた幻影なのであつた。

酒の惡趣味を説き、紹介者が辭倒したのを痛罵から、知らず／＼本格的講演に入つた間に、非常な神聖さを感じて、自分は本統に眞實を人に語り得つゝある。今までにない大講演を成し得つゝあると、然ういふ眞劍身を生じて來た。

此日、北邊の天候、定めなく。降つては晴れ、晴れては又降つた。諸氏に厚く謝して講演を終つた。四氏と十七嬢とは門外まで出られ、自動車の走るまで整列して見送られたには、感激の涙を留め得なかつた。

青森市の冷遇の中に、斯くの如き温情を得たのは、却つて最大の光榮でもあつた。

もう、十和田湖行は止めだ。此上ドンナ目に遭はされるか知れぬからだ。同行を約した弘前の吉安翁夫妻に、電話で詫びた。

今日の來會者に『水蔭の娘』を進呈すべく荷造りして、自分で郵便局へ行き、更に驛へ、今夜の三等寢臺券を買ひに行つた。このタクシーが一圓七十錢とは不當利徳。

二度と青森へ來るものかと、ブリ／＼して此夜十一時發。鹽田老殘留。寒いので持合せ物残らず着たが、未だ寒し。脱いだ袴まで掛けて寝たが未だ寒く、ふるえて眠られなかつた。

二十五日、早く食堂車に入つた。雨は降り、寒くはあるので、和食の上にハムサラダ、一パイヤつた。福島で寢臺車を切放されたので、普通車の混雜中に割り込んだ。途中から重ね衣が祟つて、暑くて困つたが、脱ぐのも面倒、そのまま歸つた。

實に苦行脚の代表的なものであつた。

(昭和八年十二月十五日起稿。同十七日脱稿)

中國往路日記

名古屋 大阪 福山 鞆 吳

青森行脚慘敗に青く成つてゐる上に、品川區役所から區稅滯納處分(いろ／＼事情有りて)として、豫て差押中の家屋、いよ／＼公賣の通告。十月六日和解の日に、長崎縣代議士中川觀秀氏から、丸ノ内會館に招かれて、長崎行脚の打合せ。これは八重津野勝博士の御好意で、長崎市醫師會長雨森一郎先生の御同情を得、その御紹介で、中川代議士の又御快諾を得たので。同代議士は岡山縣出身。同縣人會長として會員諸氏と共に御後援下さるので、其他長崎市の津田繁二氏、増田廉吉氏、稱好塾友の鶴田龜二氏等、首腦部と成り、後援會を組織され、既に長崎市の有力者百十餘名、發起人及び賛助員と成られたとの御報告。此方からこそ御招待して、先づ感謝の意を表すべきを、アベコベにて汗顔。

斯く定石が配置されてゐる上に、尾道の村田四郎氏の御好意、更に小倉義一郎氏の御紹介で、吳市の上田繁氏からも御後援を得る事と成り、又別方面、即ち杉浦眞鐵先生、鹽田彌惣八老の御紹介で、鞆の桑田勝三氏(同門)の了解も得たといふ正々堂々の陣立。青森の慘敗を取戻すのは此一戦にあり、といふ意氣。

名古屋に先づ成功

小波追悼コードモ會（昭和八年十月十五日）時事新報主催に出席して歸る。各地より吉報來。首途明るけれど、旅費無し。馬場の家内心配して幾分調達。そこへ先日、府立工藝學校の講演料届き、いよ／＼愁眉開く。夜十時廿八分發鳥羽行列車。見送り定連。素より寢臺を取らず。かゝる時に使用すべく工風の放浪囊に漂泊板。別に又漫遊袋。それだけで今回は手馴の鞆を持たず。着用は袴、羽織、夏外套。半月形の下駄に洋傘持參。長廂帽勿論（村田氏はベリカン帽と命名）

放浪囊といふのは、黒縹子にて長方形の袋を縫はせ、それに漂泊板を二枚前後に挟み、其間に荷物を詰めると、自然に笈の形となる。漂泊板とは桐材にて、本箱の蓋の如き物を造り、それをクサビの木で留めると、長き一枚板と成る（葛城橋とも命名）この板を腰掛と腰掛との間に渡して、假設寢臺とする專賣特許物（處が、どうも満員で、そんな餘席なく、結局荷厄介）漫遊袋とは、頭陀袋の變形。

名古屋には、單に、近藤國手一家に敬意を表し、又岐阜縣下から出名の牧野彦太郎氏にも面會して、全集四巻後援を感謝し、令弟三尾太傳次氏の別墅に、小禽網獵の、見物をさせて頂くつもり。十六日午前六時十二分、名古屋驛着。背に放浪囊腹に漫遊袋、それがナカ／＼重量。ブリツヂを昇降するにヨロ／＼。構内、みかど簡易食堂によろけ込む。改築して少しは廣し。鮎すゞめ焼、茶の浸し物、蜆汁、香の物で、二十五錢。

三等待合室にて暫時休憩。豪雨の中をタクシー（五十錢は安し）中區南鍛冶町近藤邸に入る。同

邸には御祝儀が二ツも重つてゐた。令嬢が御出生、御令妹はお嫁に行かれてゐた。相變らず老刀自新夫人皆様御親切、こちらも吾儘千萬。直ぐ一睡さして頂く。九時には起きた。

近藤先生の御好意で、この日既に學校三ヶ所講演を約されてあつた。意外の光榮で、勇躍。國手と同乗で、瑞穂町の熱田中學校に行く。校長田代慎思郎氏、越後村松の人。理解深く、感謝。教頭栗林榮氏は、柔道家としても抽んで、角力も好き、曾て此校に自分の相撲門下、荒一雄氏も教鞭を取つてゐたといふ。生徒半數五百名に講演。終りて晝飯を頂いた。

轉じて二葉町に愛知第一中學校。マラソン大先達日比野翁の銅像に先づ敬意を表した。應接室には、各種運動競技の優勝旗林立。昔から負けぬ氣の校風、先日他校と柔道の試合に、腕が抜けても頑張つた選手ありしと。其代り、なか／＼荒ッほく、一ツ間違ふと野次り倒されるといふ内報。

校長安達貞太氏、山形の人。明治文壇にも精通してゐられて、紹介之辭も行届き、難有し。最初に生徒全部千二百人、一堂に入れて一回では、老人の聲が徹底しまい。二回に分けやうかとの配慮が、一部に生じてゐた。

聲の大きいのは自分のホコリ。それを御存じないのはチト遺憾、と云つて見得を切るでもない。「實は先日、青森で、わづかに四人といふ聴衆のレコードを造りました。それを取りかへす爲に、千二百人の記録を作らして頂きたい」と申入れて、其通りに運んで貰ひ、思ひ切つてガン／＼聲。生徒大満足。終了後も大拍手鳴り止まず。講堂を出ても未だ止まず。水蔭の得意想ふべし。實際此時の快感は記述に苦しむ。

それから又、ガラリと方面が變つて、千早町の、ゐのはな看護婦助産婦學校といふのに行き、若

い優しい娘さん達に、趣味談を試みた。中には、今日、自分の講演有りとも知らず、偶然昨日自分の著述を読んだ娘さんもあつたといふ。

紹介を述べられた大田益三國手は、明治文學に精通。其筈、國手は、明治時代に『理科仙境』を著作されて有名。それに、日本に於ける少年雜誌の開祖である『少年園』を發行されたり、其他現代の文豪諸氏の搖籃地たりし『文庫』の社主でもあり、我々の大先輩でもある。縣悌三郎先生（御健在で全集後援者）の下にゐられた事があり、紅葉、眉山、更に樋口一葉女史をも能く知つてゐられるので、自分に對しても理解深く、語れば一々縁故が繋がり。數日語つても盡きぬのであつた。（同氏は又鈴木小舟女史の事を能く知つてゐられた。——前卷参照）

此他、醫學博士市岡正吉氏、伊藤源一、有馬純一兩國手等にお目に掛つた。

これで一日三回の講演。意外の成功に喜び、近藤邸に歸つてゐると、岐阜の牧野彦太郎氏が訪問された。全集第四卷の爲にレコード破りの後授を給はつたのを深く感謝。同氏令弟三尾太傳次國手の別墅が、覺玉山奥の山間にあり。霞網で小禽を捕獲する奇觀を自分に見せたとて打合せられ。更に、互ひに養女に先立たれた悲しみなど語り合つて別れた。（小禽獵明には早過ぎたので、實現に至らなかつた）

此夜、お馴染の天仙クラブ員、中村宗一、丸山功、寄田豊之介、同濱男の四氏。その他梶原洪水堂氏等來集。持參の放送レコード「あゝ、小波のをちさん」と「海上ナンセンス」とを聴いて頂き、猶中村師の能登傳道漫談など、有益に拜聴。近藤先生餘技の撮影。發光の口火を點けて、大急ぎで自分も寫される側に入られたが、果してそれが成功？ 不成功？ 送與を得れば此頁に挿入すべき

だが、それが無かつた處から考へると……。

十七日、快晴。熟眠曉を知らずにゐると、枕頭で雷鳴。ピツクリして目を開くと、例の奇翁小鹽歸一居士が、ニコ／＼顔。今朝一番電車で、岐阜の山中から來たと、相變らずの元氣（其癖、大患後）もう毒口の連發。朝飯も一緒に御馳走に成つた。

今日はユツクリ鐺見學に費す筈。先づ堀井先生を訪問、と思つてゐる處へ、圖らず同先生より電話。奇翁「わしが聴いてやる」その結果「堀井君にコチラへ來いと云つた」同先生に對して恐縮千萬。

堀井先生來訪。同行松坂屋前よりバスに乗つて千種町で下車。小路徒歩數町。途中古井八幡（高牟神社）參拜。廣前に、塀ともつかず、垣ともつかず、鳥居でもない妙な小建物が珍らしいので、堀井先生に問うた處が、透垣、或は埒（ラチ）とも稱すると教へられた。

出口の蟹江慶次郎先生を紹介されて、同家に長時間お邪魔。その上畫飯の御饗應にまで接して恐縮。先生は多年育英の任に當つてゐられた。愛鐺家としては大先輩で、多數の御藏品。貴重ならざるはなし。

其中で、肥後鐺の意匠に、咩道三筋を上部に地透し。下部に笠蓑の三農夫を半身出してゐるのは奇抜。鐺といふのも珍らしく。堂上方乗車用の古鐺は、刀を置くのに坐りの好き様、隋圓鐺の下部一端を、一文字にして折込みであるので、一寸見ると蝶つがひの金具の如し、それに梅花の銀象嵌、京埋忠か（故和田維四郎工學博士の手に此種一枚有りしとか）其他名品多く一々擧げ難し。

蟹江先生は老人或は座職者の運動法として、紙風船使用の遊技を案出されて、其説明の『安全第一不老球技』といふ小冊子をさへ出版。篤志。

厚く謝して辭去。途中まで見送られた。バスにて洲原町に向ひ、五丁目の加子古物店を訪ひ、鐶探し。主人が箱の中に秘してゐる古鐶多數、それを堀井先生發見して、重いのに持出されて、自分の選定に委されたのは、仙臺の只野淳ドンとは雲泥の相違。併し、昨日の講演料有りとしても、懐中の加減、前途も有るので、残念ながら十數枚にして止めた。

荒畑まで徒歩。バスにて松坂屋前まで歸り、電車に乗替へて、武平町堀井邸に入り、夫人のいろ／＼御手厚きおもてなし。其間に早くも鐶拜見。實物に就て、一々教示。得る處多大。名鐶數え切れぬ中にも、信家銘の鐵大鐶、動きの取れぬ十字架透し、室埋めに聖牌を現はし、心といふ字が刻してあるのは、尾州藩石川家の傳來品にて、正に天下一品。未だその他に、南蠻平戸象嵌にて内田クルスを現はし、それをカンフラージする爲に同形で七寶模様を附したる、これも亦天下一品。堀井家に於ては天下二品を併有されるのである。(世に切支丹鐶と稱する物多けれど、大概是牽強附會、本物は稀なり)

名鐶を見せて頂いた上に、金山後期鐶と、他一品を惠與され、夕飯をさへ頂き、自動車で送られた。行脚の身の各位に恵まれて、感涙無しではゐられなかつた。(堀井先生の紹介にて、尾張中學校長尾中高明氏、同教諭速水鏝次郎氏、共に全集の後援を得てゐる)

今度こそは、井手蕉雨氏を訪問して、無沙汰を詫び、後援を感謝し、積る話と思ひながら、遂に今度も鐶に暮らして、相濟ます。

夜に入つて、中村、河津二氏來訪。小鹽奇翁が、現代超越、世俗脱却、奇々怪々の特別漫談は、抱腹絶倒。奇翁若かりし時、養子に行く事十何回。それが悉く不縁に終つた事實談を、包み隠さず快談。其一例に、伊勢度會郡某村素封家に懇望されて、婿入りの途中、乗つてゐる駕に向つて、村中の男女が泥を投付ける奇習。それをヤツと通過して、祝言が済んだが、花嫁はステキな美人。けれども、トテモ我慢の出来ぬ事あり。辛くも三ヶ月辛抱して、半病人で逃げ出したと云ふ話や。白隠和尚を逆に行つた大珍話。今は亡き禪門の大老師某、八十餘歳の高齢で、女學生と親しみ、双子を産ました爲、親元から捻込まれたといふ事件。然るに事實は決して老師に種子を下すの殘勇なく、併し或る程度までは親しんだのだから、金子は出すが、その當面者として、奇翁に名乗り出てくれと依頼されて、宜しう御座ると引受けた。老師は酷く奇翁を徳とした。が、豈に圖らんや、その實彈發射の名手は、身代りに立つた奇翁其人で、身代り實は本人といふ、曾我家五郎の材料に成りさうな奇劇。

斯ういふ事を平然として語り得るほど、人間が枯れて來なければ面白くない。實感直寫主義の自分分は、イヤに氣取つて世間體を繕つてゐる奴の道德論よりは、どの位奇翁の告白が貴重に聽かれたか知れなかつた。

梶原氏から、餞別として、櫻桃の核子で饞饈。杏ので魚箸。梅ので木魚。桃ので鈴の彫刻を、胡桃の核子の中に納めた小根付の珍品を贈られた。難有し。

五色の核子の小根付はなむけと

枯木にめぐむ心うれしや

大阪童話家の會

二八

十八日、快晴。早朝、御佛間に伺候して、故松園先生の靈位を拜し、御家族に御暇乞して出立。近藤、小鹽二氏に見送られ、ハイヤで驛。八時〇六分發車。大阪驛正午着。東區内久寶寺町故織田東馬（明）畫伯の遺邸までタクシー一回は高し。變な笈を背負つてゐるので、運轉手に背められたのだ。未亡人菊子さん、遺女時子さん、待兼ねてゐられた。時子さんは今朝から驛へ出迎へてゐたといふ。時間を知らせぬのは、出迎へを遠慮したのに、却つて手数をかけて相濟まず。先づ東馬さんの御位牌に禮拜、語るも聴くも涙と涙。同畫伯とは心から打解けて語り合つた仲。喧嘩をしては仲直り、又喧嘩。それだけ親密の度が濃かつたのだ。震災當時に、自分は同邸で盲腸炎。二月餘りも二階に厄介。危篤で老妻が駈付けて來たほどで、其間親身も及ばず盡された上に、病臥のまゝ、冒險的に自分が俳畫を畫いたのを、主として世話されて大成功、そんな恩も受けてゐながら、臨終にも駈付け得ず。併し、この忘恩の事情は、故人も許容してゐる事と、勝手な考へ。遺族に詫びたのは勿論であつた。

荷物を預けておき、徒歩同町内の今城古物店を訪ひ（後援者）九州古地圖と京都力士の部屋分け番附とを求め、電車にて日本橋通公立社書店に藤井卓氏を訪問。生憎不在。（同氏亡夫人は、主人と共に自分の古き／＼ファンにて、『檜木笠』及び『葛城山』を『奥の細道』に比するとまで激賞されてゐたといふ、詩人時代の眞の知己として感激。本年病歿されたので、せめては御線香でも上げさせて頂きたくて訪うたのであつた）通りの理髮店にて髻そり。道頓堀へ徒歩。丸萬食堂、水ッほい

和食。東馬さんの好きだつた鮎を土産にして、織田家に歸つた。雨が降り出した。

二階へ上つて午睡をさして貰つた。十年前と少しも變らぬ室内。自分は未だあの時から病臥してゐる様な氣がした。あの時死ぬべかりし者助かり、それを看護した主人が先に死んだ。萬感交々。なか／＼に眠られず。あの時の小猫今は老猫が、のそり／＼、主人の造りのこした菊の鉢植の傍を、物うげに歩くのも哀れ。

五時半、放送局より迎への自動車。久々に子供主任足立勤氏に迎へられた。

「今夜は、あなたを主賓として、我々同人で小波先生の思出を聴く會を催しますから」と云はれた。それは光榮でもあり感多でもある。先日自分がAKから放送した『小波のをちさん』を、特にBKでも中繼されたほどで、小波の死を悼む由縁の人々は、此方にも非常に多いのであつた。

六時から「これは明珍鐵兜」を放送。古い塾友の加藤泰次郎翁の次男が局に勤めてゐるのに遇つた。

大軌驛三階食堂で（次第不同）足立勤、高尾亮雄、奥野泰弘、吉井悦三、石橋達三、藤野福雄、長尾次郎吉、久保タケ次、井上義孝、白名民憲の諸氏、及び朝倉石子刀自、支那料理を味はひながら、故人の徳を語り合つた。

「あなたの今夜の放送を聴いて、どうも巖谷先生に似た處があるのが耳立ちました」と云つた方があつた。

そんな譯はないので。巖谷君の童話と僕の武勇談とは行方も違ひ、聲量も違ひ、話術も違ふのだが、併し昔から硯友社共通の談話の調子はある。それは紅葉でもなく思案でもなく小波でもなく自

分のでもなく、皆のが合して親しみ合ひ融け合ひ馴れ合ひ移り合ひ、彼の癖、我の癖、合流して一つの型が出来てゐるので、それを小波の方を主として聴いた人には、それが小波の創立だと思はれ。水蔭のだけ聴いてゐた人からは、小波が水蔭の模倣とも思はれよう。此誤謬は東京では有繋に無いが、關西では現に有つた。外國人の話は誰の聲も同じに聴えるのと同じ事だ（小波が童話の元祖であるのは勿論だが、其ズツと前から文士講演。それは同時に始めたのだ）然ういふ意味で答へて置いた。

諸氏の好意を感謝して、織田邸に歸つた。實は今夜十二時四十分大阪發だと、翌朝六時五十分福山着。その前だと曉早く都合が悪いのだが、それまで此所にゐても氣の毒。驛へ行つて待たうと辭去する事にした。時子嬢は、大阪女子藥學校を卒業。婦人藥劑士の免狀を持つてゐるので、自分の爲に、種々の藥を調合して、饒別にされた。温情嬉し。タクシーを備つて、それに乗ると、時子嬢も驛まで送るといふ。雨中、夜間、婦人一人で歸るのは不用心ゆえと斷つても肯かず。扱て驛まで送られたからには、發車までゐるに及ばずと、幾度斷つても去られぬので、こんな事をして夜更十二時過ぎまでゐられては、餘りに氣の毒と、それなら私は今來たので出發と、十時五十分發のに乗つた。

これが實に小悲劇で、福山着が曉四時二十分。下車して見ると、天井底抜けの土砂降り大雨。驛前に夜明しの旅館が見えてゐても、向側まで行く事が出来ず（半月下駄は大阪まで止して、草履）己むなく驛内の板張りの腰掛に、荷物を枕として横に成つた。背骨が痛いも、肌身が寒いもない。樹下石上の修行は、是だと觀念して、それでもトロ／＼と眠つた。正に老ルンペンだ。昨夜は最も

文化的のラヂオを放送して、關西屈指の童話研究家から優遇された身が、その夜の明けぬ間に驛のベンチに寝てゐるのた。變化の甚だしいので、夢の様。同時に行脚氣分は滿喫されたが、さるにても、時子嬢の好意が度を過ぎたので、難有迷惑に祟られた。

陸の鞍名勝

十九日、雨。ボツ／＼驛へ人が来て、賣店が開かれ、赤帽が掃除など始めた。鞍行のガソリンカーに乗つた（汽車混用）六時五十三分發。他に乗客無し。運轉手のみにて、車掌なし。（途中から二三乗客あり）八時前に鞍驛着。雨降り歇まず。放浪囊と漫遊袋とに身を堅めて、出かゝると、乗り合せの若い人を見兼ねて、一ツ持つてくれた。

手製笈や異装行脚に初時雨

初時雨など、實はそんな風流な降り方でなく、荒れ氣味であつた。塾友桑田勝三氏は、金尾親太氏（在郷軍人にて自動車運轉手組合長）を伴ひ、出迎はれた他に、意外にも尾道の村田四郎氏が、壽子夫人同伴にて待つてゐられた。昨日から來着してゐられたのだ。（桑田氏は福山まで出迎へると通信されたのを、堅く書面でお断りしたのであつた）いづれにも御好意を感謝。同じ塾友でも、青森の連中とは斯うも違ふ。第一印象からして明るかつた。自動車で桑田邸に向ふ途中、安國寺に立寄つた。毛利輝元と秀吉との和睦を取持つて以來賣出した惠瓊法師の在住した處「大日本人名辭書」には、藝州安國寺とあるが、備後の鞍だ。同書の杜撰は名物？ 自分は草履なので、近所から金尾氏が下駄を借りてくれた。

釋迦堂は特別保護建築物と成り（慶長四年毛利輝元再建）修繕の最中で、足場が組まれてゐた。約六百年前の建築だといふ。住職、本堂に招じられて、佛像、佛畫、寶物など種々示された。開山勅諭法燈回明圖師で、惠瓊は十八代目。但し住職ではなかつたとか。

時間の都合で先を急ぎ、巻物類遺憾ながら精覽を得ず。辭去する處を村田氏携帯の小映畫攝影機で撮影。結果不良と後に知れた。

再び下車。石段を登つて、沼名前神社に參拜。全國的に信者を有し、讃岐の金刀比羅神社にも劣らぬ程の參拜者があるといふ。延喜式内の古社で、國幣小社。祭神は綿津見尊、相殿は素盞鳴尊、一般には祇園宮と唱へる様だ。社務所に刺を通じたが、宮司金原利道氏は不在であつた。境内から眺望佳なれど、雨強く、急ぎ下向。更に小松寺を訪ひ、重盛手植の松を（逆さ松ともいふ）見る。實に名木で、關東方面では見られぬ物。惜しむべきは老齡、衰色あり。此所から又靜觀寺の前を自動車で過ぎたが、昔は此邊まで入江で、長き橋ありき。遊女が附近に多く、客を送迎の私語喃々。それで「さゝやき橋」と呼ばれたが、今は名のみ。寺前に山中鹿之助幸盛の首塚あり。但し位置は昔から變つたとか。尼子十勇士助の第一人者、古英雄の末路何んぞ悲惨なる。

村田氏夫妻は一先づ旅館に、自分は桑田邸に入つた。古式の大家屋で、自分の趣味には嬉しかつた。輦で桑田の本家と云へば、有名なる舊家。勝三氏は華胄界から入婿に来て、一時町長を勤めてもゐられた。今は俳道の他に製陶の研究、餘技ながら素人離れがして、同好者中の重鎮といふ噂。初めて夫人にお目に掛り、御挨拶。お子さん無き由。境涯均しく、同じ淋しさを偲ばれた。奥座敷にて朝飯を頂いた。

御親戚の石井九郎氏他數氏來訪された。村田氏も來られた。同行、山上の小學校。町長高橋嘉一氏、其他數氏、安國寺住職も來會された。金原宮司にも初對面。警察署長山田谷清市氏。「中國新聞」記者後藤証留氏等にも會ひ得た。

校長桑田徳夫氏、紹介並びに閉會辭、聲好く徹して、正面の黑板に弾けるのが目に見える様。未だ曾て聴くなき明快な若も熱烈な挨拶であつた。同校長は金原宮司と共に、この非常時に際し、町青年の緊張を促すべく率先して、頭髮を五分刈にしてゐられた。若い者の兎角髮を長くして、お辭儀の度にバツサリ前へ下る惡風、見るに忍びず、斯くして先づ範を示し、他にも亦及ぶといふ。誠に難有き事である。以て宮司及び校長の眞劍身が能く知れる。學校から常磐館へ自動車。

海の輦名勝

輦の浦の風光明媚といふ事は、夙に聞いてゐた。久しく憧憬の地。寫真に、繪畫に、辨天島、仙醉島、阿伏兎岬、印象は深い。その辨天仙醉二島を、手の觸れるばかり近く望まれる二階に通された。戀人に初めて會つたのだ。けれども憎や雨雲のベール深く冠つて、ハツキリとは顔を見せぬ。却つて又風情あり。

輦の歴史は古る過ぎる程だ。素盞鳴尊や神功皇后は申すまでもなし。瀬戸航海に此港へ繋らぬのは殆ど稀れで、誰の紀行を讀んでも輦が出て来る。自分としては、今、此地に來つて、其故人を想ふ切。最も近き時代の成島柳北翁をまで偲ばれた。

「晴れてゐると辨天島と仙醉島と合して一ツに見えますが、この雨雲の濃淡で、自然區別の出来る

のも妙です』と桑田氏は説明された。全島岩石、青松之を飾る間に、辨天の朱廟、模糊、天彩の配
合妙絶。

地つゝきと見る島々や片時雨

紅葉よりも古廟目立つや島の色

中食後、雨中を強行的舟遊。桑田石井金尾三氏、村田氏御夫妻及び余。それに常磐館の監理人森
田友十郎氏、女中二人。天井有る發動機艇。茶菓の要行届いた。鞆港口を右舷に見て、玉津島、
津輕島を左舷。右手、陸地に皿山といふ處、徳利を焼きし跡とか。景色變化多く、ノートに取り難
し。雨や、浪や、舟行に従ひて、兩舷交々迫る中を、瞬きすら惜しむ老行脚。絶壁下の岩ヶ根を猛
撃して俺まさる怒濤。併し、それは皆無駄の仕事で有りながらも、絶えずそれを繰返してゐる。そ
れは自然が捨身の荒行をしてゐるのだ。體當りを試みてゐるのだ。即ち俺の現状なのだ。そんな風
雅から離れた感想も發生した。

狐崎といふのは郡の一番突鼻に成つてゐるといふ。海岸に、大黒、夷などの奇巖があり。此邊か
ら阿伏兔の方まで、岩山屹立。老松繁茂。その間から幾條も雨の爲に生じる臨時の瀧が見える中に、
不斷有る姫瀧といふのが、今日は姫御前のあられもない大量。男性的だと評する人もあつた。

この岩山の松間を横に縫ひ、棧道が附けられかけて絶えてゐるのが望まれた。營林所の好意で、
陸上から観音詣の爲に開穿しかけたが、途中私有林があり。一人異議を唱へて應ぜざる爲に中止。
斯くの如き奉公心を缺くの徒、猶存す。長嘆。

やがて寫眞でのお馴染、阿伏兔の観音の大悲閣が、潮煙と雨烟との間に、朦朧として現はれて來

た。海中に突出せる巖上に、猶石垣を築き立て、その上に特異の建築物。その背後の巖頭に廻廊の
つゞくのも望まれた。唯その朱塗の色の、餘りに俗悪なのに、興覚めぬでもなかつた。のみならず
海軍側で岩面の所々に○や□の記號を白ペンキで塗りつけてゐるのが、名勝破壊のみならず、口
無し瀬戸の入口を、観音裏山の頂上から、對岸の姥ヶ懐の頂上へと、電力の鐵條線を張り渡してあ
るなど、一體國立公園に成つたとしたら、どう捌かれるのか。

観音所在岬角は、一名、馬耳崎ともいふ。馬耳(バベ)の木、今も巖上にあり。艇は岸に近寄つ
たが、自分の足下不自由なのに、此豪雨中石段登り、逆も不可能。降参して瀬戸内を廻覽。正面に
見える陸地を、能登原といふ。弓掛け松あり。平能登守教經が弓を掛けたといふ傳説。それに向つ
て海を隔て矢ノ島といふのがある。此邊平家に關する傳説多く。八日谷といふは、平家方が八日滯
在した爲とか。

横時雨船矢ノ島を過ぎる時

これから先へ行けば、松永、尾ノ道への海路。引返して仙醉島行。鼠島、走り島など見ゆ。皇后
島には、輛最初の奉行、萩濃新右衛門重昌の妻の墓があるとか。仙醉島は周圍一里十六町。七浦七
夷の他に名勝多く、島めぐりをする筈が、此シケ模様では棄權の他なく。田の浦から上陸。この邊
倭松の緑の間に、草紅葉目立つ。探せば松茸も有りといふ。磯の砂清く、黄色珊瑚屑かと疑はれ
て、踏むに心地よし。村田夫人は既遊。この雨を侵すに當らずとて、船に留まられた。少し坂を登
れば料亭あり。離れ座敷處々、落ちつきて遊ぶに適しても、此方は急ぎ、雨傘を借りて、御野立所
の高臺を目ざしつゝ、翠松と草紅葉との間を縫ひ、稻妻形に登つた。

山陽、旭莊、鐵兜、その他多數、漢詩で賞賛してゐる。仙酔の名、既に大和式にあらず。其詩、蓬萊山に比するの多いのは、柄の浦が鶴に似たのに縁もあらう。内務省が名勝史蹟に編入、今公園と成つてゐるのは當然で、この島有りて柄の港は光り。柄無くては仙酔の島は輝くまい。蓋し好夫婦。柄から見た島。島から見た柄。佳景絶景。寢像少し亂れた女房の片腕伸したる如き柄の港口。こちらの仙酔島を其良人とすれば、間に挟まつて寝てゐる愛兒、それが辨天島であらねば成らぬ。然ういふ見立をした。

此方から見る柄の中には、福善寺の對潮樓、圓福寺の夾明樓、共に繪だ。前者は韓使李邦彦が「日東第一形勝」と題書。後者は頼杏坪の命名。旅館常磐の附近に、元、山陽命名の「對仙酔樓」が有つて、竹田山陽の初對面は其所とか。昔から文人墨客の賞め盡した處だけに、自分如きには手がつけられず。これで春の鯛網の頃に、行脚でなく遊覽に來たら、どんなに面白からうと考へた。

歸館すれば、桑田氏の肝煎にて、町の俳人及趣味人の潮風會員。大廣間に集まつてゐられた。その前にて座談の後、揮毫。終つて別室にて、桑田氏の招待宴。金原宮司、石井、桑、後藤四氏の他に、此方は村田氏御夫妻と自分とで快談。宴後入浴、就寢、秋雨の夜の港、浪の音枕に近く、それが次第に暴威を逞しくして、眠り得ず。其苦、各地大被害のありし颱風襲來の當日で、神戸沖で汽船の沈没さへあつたと後に知れた。桑田氏より萬事御配慮を得て、難有し。

活氣に富む吳市

二十日、暴風雨。曉起して準備。桑田氏も強雨を衝きて、早くから來られ、恐縮の他無し。次い

で金尾氏も見え、森田氏より土産に、名産保命酒二罇まで贈られて、難有くはあれど、行脚の身のチト閉口。歸途まで村田氏へお預けした(後日、今津の矢野氏に願ひ汽車便)

村田氏御夫妻と自動車にて、福山まで走らした途中、道路に荒浪を打ち上げたるもあり冒険。自分はやけれど、御二人にはお氣の毒。老行脚を眞底から案じて、わざ／＼柄まで出迎へられたのを思へば、何と御禮の申様もなし。六時五十分乗車。尾道にて村田氏御夫妻と、歸途の御厄介を約してお別れした。村田辰五郎氏、自分への電報を持つて、驛に出てゐられた。感謝。海田市驛乗替へ吳市には午前十一時五十二分着。尾道の小倉氏の紹介で、後援快諾を得てゐる吳商工會議所の上田繁氏が「大毎」吳特派員柿本吉良氏、吳市觀光協會主事山口晃氏と共に出迎はれた。自分の異装を見て驚かれたやうだ。先づ驛長室に入つて休憩(驛長毛利夏藏氏、助役熊野好則氏共に後援)

上田氏は若手の好紳士で、早大出身、文學思想に富まれたる上に、運動鼓吹の先達、吳のベースボール界を牛耳つてゐられるので、相撲黨の自分としては、聊か恐縮。柿本山口二氏は、共に國士型の好紳士で、誠意を以て老行脚を後援。感激。

それよりハイヤにて堺川四丁目の華山といふ吳第一流の料亭に入つた(後の「備後時事新報」を見ると、自分が、日本一の折紙を附けたと大々活字で發表。これには恐縮)主人谷口大吉氏、女將と共に家業熱心。家屋も新築にて、萬事行届き、自分を晝餐に歓迎とある。難有し。女中達も皆能く氣が利き、先づ明るさと朗かさとを感得せしめた。新聞社の寫眞版に數回引出された。各社氣を揃へて紹介記事を掲載されたのに感謝。文化隆盛なる土地は又新聞が發達してゐて、記者が腕揃ひ、文士への同情が深い。文化に遅れた地は之に反す。自分が今日まで新聞で冷遇されたのでは、宮崎

市と青森市とで、青森市殊に甚だし。

美味滋味満點の料理の數々。その中で、此家のパテントといふ鯛の骨蒸しを、特に自分に饗された。箸の持方の下手な自分の指先の覺束なさを見兼ねた女將が、代つて捲つてくれた。老行脚も、斯うなると子供に返つて嬉し。兎に角、吳では第一流の家。恐らく中國筋でも第二位には下るまいが、日本一と折紙をつけて了ふと、他土地のに對して申譯なし。乞はるゝまゝに、即興。

酒の海女のほらに華の山

女中達も、皆世帯持。通ひが多し。家寶にと乞はれて、それ〱。來合せた藝妓某にも亦。

好意を謝して此所を出で、本通一丁目、吉川旅館に入る。大旅館の賞祿は備つてゐるが、舊式たるを兎れず。併し、軍人を相手とする土地としては、これが好いのだらう。奥まりたる閑靜な部屋を、三間まで宛て待遇されて、行脚には勿體なし。番頭君、早稻田出身、上田氏から自分の目的に就て説明があつたので、充分に諒解してゐられて、萬事好都合。

株式會社松本組常務取締役盛井秀雄氏、山口銀行吳支店藤井省一氏、其他來訪（名刺頂かず、記載を得ぬのが二三あり、失禮）その中で、曾て學生相撲の選手で有つた花坂吉兵衛氏、今は吳海兵團の相撲部の教官たり。同氏から、海軍々醫大尉榊岡智氏の、今夕あたり大連より歸着と報じられて、明日の奇遇が喜ばれた。（同氏は學生時代、江見部屋の一人。米國へ學生相撲が進出した時の總監督。その紹介は自分がしたので、縁故は最も深い）早速揮毫に取り掛つた。加入者な〱多し。

夜七時過ぎ、吳商工會議所樓上にて講演。入口の立看板に「紅葉を中心とした硯友社の回顧」と有

つたのは、大衆向きでなかつた。「モミキを中心」と讀む人も多からう。「硯友社」とは何んの社だか、知らぬ人が更に多からう。そんな具合で、漸く二百人弱。それでも智識階級の人が多かつたのは、却つてシンミリと語るのに適した。中には感激して、わざ〱控室に名刺を通じて、明治文壇の盛事を偲べられたのもあつた。其中に、可部高女教諭の前田倭文雄氏もあつた。

吳には軍人軍族を除いて、海軍工廠の職工だけでも、三萬何千人。其二十八日の賃金支拂が約二百萬圓。それだけが又毎月市に落ちるので、これだけでも景氣は好し。それに艦隊入港水兵上陸、と成ると、益々賑はう。斯ういふ空氣の中で、老文士が過去を語る、それを聴いてやらうと集まられた趣味人。二百を算し得た事は、寧ろ望外で、光榮であつた。

二十一日、快晴。上田氏に伴はれて、午前十一時から吳第一中學校に行き「明治文學を語る」校長は鈴木卓苗氏。人格高く、自分に對しても理解が深かつた。教諭服部松太郎氏は舊知。江見部屋の土依も踏まれた人。

（前略）承はれば、諸君は目下試験中で、緊張。特に非常時で國民擧つて緊張してゐる時、重ね〱で肩を凝らされてゐる處を、老人の講演で笑つて貰つて、ホゴッて置いて、最後にキユツと締める、餘り國民全體がイラ〱すると、却つて能率はあがらない。一方に於て趣味で氣を抜く。それが必要。吳市は今、水道が涸れてゐるといふが、水道もツマリ趣味。石炭の煤煙が盛んなれば盛んなるだけ、趣味の水が廻らなければ、市民の本統の生活は出來ないので（『吳新聞』筆記より抄録）

幸にして喝采を博し得た。

情島の七奇蹟

榊岡軍醫大尉に、久々で會つたのは愉快。相對して語少なく、然も欣喜の情互ひに顔面に溢る。長く大連に出動。歸來、家族と碌々語る間も無いのに、今日は一日自分に附いて廻ると去らず。午後は、貴族院議員松本勝太郎氏一個人で所有してゐる瀬戸内海の一孤島、情島へ案内するとて、親戚の盛井秀雄氏が自動車で迎へられた。それには柿本吉良氏も同行。廣町との境にある二級橋まで行くと、そこには老船員が一人待受けてゐた。堤下の發動汽艇には、女中さん、寫真部員等乗つて待つてゐた。一時半に出發。自分は此航海中を假睡さして貰つた。榊岡大尉、自分の外套を脱ぎ、折つて枕として與えられた温情、息子から孝行されるのは、こんなものかと想像。

二時二十五分に着。昨日の暴風雨で棧橋が無惨な被害。船員に負はれて砂濱に上陸。

情島とは、伊都岐姫が宮島に流され玉へる時、難航。この島人に助けられてから、情島と呼ばれたとの傳説。廣町海岸から四マイル半の距離。元は加茂郡に屬してゐたが、今は阿賀町情島と成つて吳市に編入。周回一里半。それを約三十年前に、松本氏が木材伐り出しを目的に、二十五萬圓で買取つたので、以前の島内には楠が多かつたが、今は、杉、馬耳等繁茂。それに果樹栽培。就中蜜柑は上質。年額少からず。それに掛り切の幾家族が生活。松本氏の別邸には、各宮家も度々御來臨。又海水浴場としても、開放されてゐるといふ。正に一個の理想境。

情島最初の印象としては、砂路に小さな子供の靴跡が點々、何んといふ可愛らしさぞ。その辭出



情島著者 松本智氏 別邸 氏良吉 氏本 氏智 氏智 氏智 氏智 氏智

迎へには浦辻竹松といふ老人、これは明治三十二年から此島にゐる、云はゞ島のぬし。砂路を少しく行く。花崗岩の石垣、石段、それが別邸の入口。黒門厳しく、それを入ると、意外に質素な建築。華麗の氣を避けて、風雅の心を失はれぬのが先づゆかし。廊下幾曲り、幾間も越して、奥の廣間に通された。居ながら伊都岐灘の展望佳きは云ふまでもなし。右手に遠く相ノ島。其後の南方遙かに、伊豫の山々が見え。黒島、蒲刈島、或は長濱など左方に望まれるが、委しく記す事は、要塞地帯なので罷り成らぬ。(實は、それで助かつたので、この好風景を描寫差支無しと成つても、なか／＼形容に苦しむ處。但し自分としては、既に軀や尾道で洗禮された後なので、此方の如き無技巧の繪畫には、俗眼受けが薄い)

流れ木も情けの島に寄せられつ

先づ裏山に蜜柑畑を見る。段々畑の幾重ね、悉く蜜柑樹にして、果實は未だ青けれど、美し。處處ネーブルの部あり。水分の加減で果實落下、赤く裂けてゐるのが又美しくも見た。虫の音が晝も鳴いてゐた。島の静かさと暖かさとを同時に語るもの。

それから、海岸へ出て、岩壁下にセメントで造られた生巢の池を見物。もう人の足音に、魚族は浮上つて待つほど馴れてゐた。絶體安全を保證されてゐるからで、泉水の錦魚鯉も同然。此所のは見る爲に飼はれてゐて、食う爲には捕られぬといふも、情島の本意か。大鯛、小鯛、鱒鯛、べら、アジ等、無数。背鰭を水面に出し、尻尾をも逆立たせ、浦辻老が餌を待つのに歡喜。老が手を洗ふと、その指にまで迫るほど、人可慕しがつて見えた。

それから難行（足わるの自分として）絶壁の細路を岩ヶ根松ヶ根に縋りて、島の辨天宮に参詣、今上陛下御手植の松を拜した。社前に多く團扇が奉納。それに一々記入あるが面白かつた。自分もと團扇を乞うたが、得なかつた。

晝食を今まで遅れて、二階の方にて頂く。空腹に鮮魚、舌鼓。記念撮影をして辭去。風強く難航。左方に小情島、右方には、大入、冠崎等の陸地。それからの出鼻と倉橋島とで、前面の海路は遮閉されてゐるかに見えてゐる、其間を辛うじて通過、それが有名な音頭の（穩渡）瀬戸で、清盛の傳説は數え切れぬ。そこまで行く間に見送りの浦辻老から、情島の七奇蹟を（老は七名所と云つたが）説明された。

- 一——栗八斗島の鯛の巢（栗を八斗貯くだけの岩礁があり。そこに鯛が多く集まる）
- 二——夫婦岩の馬殺し（——山上に岩が二ツ並んで立ち、其間が三尺ばかり離れてゐるが、大晦

日の夜には密着する。曾て馬がそれに挟まつて死んだといふ傳説）

- 三——火の釜の窟（——窟が二ツあり。八疊敷位。平家の落武者が隠れたとも、海賊の一黨が籠つたとも）
- 四——潜り岩。
- 五——狗賓松。
- 六——水有り。（——早にも此所には涸れず）
- 七——水場。（——昔は池なりし山。今は木が繁茂。）

茂。）

船頭可愛やの音頭の瀬戸にいよ／＼掛つたが、入口に清盛塚、音頭の町は棟を聯ねて古き港の情調が有るらしく見えた。右手は警固屋。折しも

向から小汽艇。すれ違ひの爲に浪は益々高く、辛々瀬戸を越したが、逆も軍港の方へは、荒浪にて向ひ難く、上陸。（五時二十五分）幸にタクシーを得た。既に此邊吳市の一部。山上人家の間から、軍港に碇泊の諸軍艦を下瞰し、壯觀に驚きもすれば、意を強くもしつゝ、歸宿。



幼年運動家
（歳五）君球五田上 （歳三）嬢子豊田上

夕食前を残りの揮毫。上田氏の尊父は古稀の賀にして又金婚式にも當り、一族それ／＼清榮。それに新築の家成り。御子息五球君（五歳）劍道は幼年組六級の免状を講武館より得られ、令嬢豊子さん（三歳）又極めて健康、運動好きとあり。それを祝して二枚の俳畫として揮毫といふ難注文。この數々の條件を、十七文字宛二ツに纏め得らるべきにもあらねど、他ならぬ同君の需めに、いろいろ苦心の結果。

稀といふ金の鶴龜御代の春

スポーツの家の榮や五月晴

一方には帚と熊手、一方には竹刀とラケット、いづれも俳畫。

柿本氏、俳號、紅嶺といふに。

夕映に柿紅のや嶺の本

山口氏、覺骨の俳名ありと聞き。

覺めて見れば骨が誠よ冬の月

寫眞班の方に。

どの島も皆寫りけり秋の海

更に吳市々民諸君に敬意を表して。

秋晴に吳々も謝す老行脚

一榮一落是春秋といふ心をと、或人に乞はれければ。

觀ずれば櫻紅葉も一木なる

即興俳句も大分馴れて来た。

斯くして吳市行脚は大成功。上田氏より總て清算を得た。同氏及び諸氏の芳情を深く膽に銘して出立。見送り、上田、柿本、山口三氏の他に、榊岡、花坂二氏。更に華山の主人は藝妓某女と共に駈付けて来た。九時四十分發車。

吳後援各位の芳名既記の他に、次第不同、敬稱を略さして頂き、左に記念として掲載。

阪田齊次郎。梅田醫學博士。小島榮。稻田寅三。川瀬祐臣。山崎幾松。猪脇要介。田阪規矩。富島陶三。本川若松。吉川信行。早川欽介。野村彌三松。村木伊三吉。戸野眞喜雄。上田近松。岡田眞一。寺崎定造。榎田八七八。青盛薫。河野順一。田畑常次郎。向井寛。石井三郎。若林馨。森尾雄次郎。渡邊醫院。三宅清兵衛。藤井省一。林利平。布施謙次。黒上百藏。淡輪敏雄。田口定男。渡邊隆登。秦野楠雄の諸氏。

同乗に海軍々醫少將服部清一氏御夫妻、佐世保に行かれるのに、榊岡氏から紹介された。

猶服部少將から同車の福島軍醫少將及夫人に紹介された。廣島に着いたのが十時二十九分、驛樓上で休憩。十一時三十分發車を、五十分と誤見してゐて、發車近くまで悠々としてゐたのを、服部少將より注意を受け、アタフタと笈を背負つて駈付けの醜態。（實感記録を破りたくなき爲、ソツと白狀に及ぶ。吳成功に獨で祝盃を擧げてゐたので、イカン〜）

乗客多くて眠られず。漂泊板何の役にも立たず。下關、五時十五分着。直ちに連絡船にて門司。腹背の荷物重く、船中の階子の上下に、つらし。何んといふ意久地無しか。

（昭和八年十二月十八日起稿同二十二日脱稿）

長崎中心行脚

佐世保 長崎 雲仙 小濱 端島 諫早 島原
 湯江 大村 武雄 大牟田 久留米 佐賀 福岡

いよく前衛戦を終つて、長崎の本戦に入る、その又前に、中川代議士から佐世保の岡山縣人會々長福山武翁に紹介、同市縣人各位の贊助を得て、こちらへ轉戦と成つてゐるが、豫め打合せて置いた時間の都合で、門司で暫時待避を要し、二等待合室にて休憩。それ／＼各地へ通信などして時間を過した。

鵜渡越 大觀

二十二日、快晴。午前八時四十分發、鹿兒島行列車に乗る。驛辨にて朝飯。鳥栖驛で下車。十一時三十分、此所で今回の行脚に就て總司令格の八重津博士が、久留米から來援されるのを待合せのつもりが、驛員に一喝されて、ホームから追ひ出された。この驛、乗替複雑、急行と普通との區別等で、然うするらしいが、何とか便法無きか。重い荷を擔いで、ブリツヂ上下、老體にはつらし。已むなく表の待合室。

やがて八重津博士が上り列車で見た。嬉しかつた。挨拶もソコ／＼に、博士は短時間を巧く奔

走して、佐世保へ打電。豫定より早目に行く事を通じて置き、零時一分の長崎行急行に乗つた。發車して先づ何から語るべきか。ヘトモトしてゐると、整理的頭腦といふか、物の運びに順序正しい訓練の行届いた博士は、「先づ食堂へ行き、食事しながら話させよう」と誘はれた。そこで定食を喫しながら、前回のお禮、今回のお禮、無沙汰のお詫、睡眠不足の頭のゴチャ／＼、自分ながら成つて居らず。

食堂車中、八重津博士の知友で早岐の醫家村上眞一郎氏に紹介された。一時三十六分、早岐驛。此所から佐世保線へ分岐。面倒臭いので赤帽を頼まず、放浪囊、漫遊袋、よろ／＼と乗り替へる異装。人々着目（後で村上氏が八重津博士に、江見さんにあんな風をさせない様にしたらよからうと、忠告があつたとか）

發車間もなく一老人が、室内を物色してゐたが、漸く自分の處へ來て、「江見さんですか」と問ふ『然うです』と答へた。『私は岡山の者で、あなたのお迎へに佐世保から來ましたんぢやが、あなたが變な風をしてゐられるんで、遠やアせんか思つて、一寸考へとりましたんで、わしやア出石の産れで、子供の時あなたに、能う泣かさりようりましたがな』石川倫次郎といふ名刺を出された。

然う云はれると、自分より二三歳も下の石川の倫公。鼻垂らしで、惡戯者で、能く自分はこの倫公をイチ／＼泣かしてゐた。その子供がこの老人。五十三四年目の邂逅ながら、稚な顔は段々皺の間から復元して來て、何とも云へぬ可慕しさを覺えた。

『あなたの事を、江見のダンダア様（旦那様）と云うて、お屋敷へ能う遊びいきようりました。あなたアいつも餓鬼大將で』

出石町といふのは、自分の出生地一番町と接近。自分は屋敷町の子でありながら、町人の子と能く遊んだ。(昔は町家と武家と決して對等ではなく、無闇に侍の子は威張り散らしたもので。然るに平常は威張つても、お祭には頭が上らなかつた。何故といふに、屋敷町には車樂の太鼓や獅子がなく、商人町には有る。それでお祭の時には、出石の仲間に入ると、あなたは町内が違ふと排斥されたもの。倫公なんか斯ういふ時だと、眞先に意地悪をしたものだ)

佐世保には岡山縣人會々長福山武翁(今は海軍御用達商であるが、少時は備中山田方谷先生の塾に在り。三島中洲先生とは同門の、年長者と年少者との兩極端。然ういふ關係で、二松學舎設立にも參與したり、新聞記者と成つて犬養や原とも机を並べたといふ文壇の大長老。號方堂。漢詩最も得意)市收入役足立正人氏。商業銀行高橋剛男氏。松山龍雄氏等の縣人が、ホームに迎へられてゐたが、行脚の異装を見て、ちと御迷惑の様で。これでは縣人の體面を毀けるとでも思はれたか。『まア此方へおいでんさい』と福山翁が先に、驛長室へ引張り込まれた。

『荷物は宿屋の番頭が來とりますから、それへ渡して、先づ鶴渡越へ御案内して、高い處から佐世保の大體を見て、能う頭へ入れて置いて頂き、それからにして』

實に要を得た御案内振。初踏の地は先づ高所から一覽に限る。この人數にて、市役所から廻されたハイヤで、直ちに鶴渡越行。目貫の市街を通過して、新道の坂をグン／＼と登つてゆく。其幾曲りなるを知らず。佐世保の市街は段々沈下するかの觀。それだけ此方が自動車每羽化登仙の心地。既にして港内の碇泊軍艦など見え出したので。

『これは壯觀ですな』と思はず口走ると『イヤ未だ、こんな處で賞められちやア困る。頂上の大觀

を一目してからにしてつかアさい』と岡山辯。假裝江戸ツ子も生地を出して、久々で岡山辯で答へるのも郷土愛か。

鶴渡越は軍港背後の山頂で、言ふまでもなく要塞地帯だから、其地理的説明は避けねば成らぬが、此所の開けたのは最近で、曾て財部海軍大將が、鎮守府司令長官時代に、この大觀を是非母堂にお目に掛けたいといふので、未だ道路も開けてゐないのに、自から母堂を背負うて登攀されたといふ、有名な孝子美談の現地。九十九島を眼下の一方には、軍港内をも亦眼下。餘りに能く見えるので、國防上困るといふ物議もあるとか。

佐世保は元來寂寥たる一漁村。それが明治に至つて軍港と成つたので、名所古跡といふ點に於て缺けてゐる。それでせめては此鶴渡越の大觀を誇りとして、遊覽客を満足さしたいといふ市民の希望。

自分は明治三十三年の初秋、故肝付海軍中將に附隨して、海上から佐世保に入り、上陸せずして去つて平戸に向つた。其時に、九十九島の風景は、松島に勝るといふ説を聽かされた。

其他、誰でもが能く唱へてゐる。それを之から見せられに行くのである。(約一里)

自動車は、他にバスも通つてゐる。徒歩で行くにも極めて樂。カーブが多くても危険は少しもなす。いつしかに頂上。四十三號潜水艦殉難者記念碑の下で車を捨てた。

右顧すれば九十九島。左眄すれば九十九艦。外海から見やうか。内灣から眺めやうか。誰が迷はずにゐられやうぞ。それを其儘取置にして、先づ南面して見れば、佐世保灣口に伸びる半島の山々皆跪座して、此方を王座視してゐる。それも其筈、今上、東宮の御頃の御野立所有ればこそだ。

實にや城山の頭も、手を伸ばせば撫でられさう。舊鵜渡越の道路には、杖を下せば達しるかとはかり以て此所の高さが計られる。この正面ヨソソから、徐々として首を取梶にすれば、軍港への海水はどこから入り来るのやら分らず。宛然湖水の觀。艤島嶼の如く動き無し。更に首を面梶にすれば、外海の九十九島が、却つて大艦小艇の碇泊かと疑はれ、號令一下すれば艦形を變交される如く、島影も指呼の間に羅列を轉換するに似たり。

殊に夕陽の射光雲を破つて、海面の一部分に落ちたる、其所のみ潮色を金化させて、海圖の彩色を異にしたる如き奇觀。八重津博士、國風一首速吟。

雲とくろく、裂けて夕陽の射照らせる

松浦の海をこゝに見放けつ

誠に寫し得て妙。自分としては句を作し難し。福山方堂翁の舊作に。

羊腸一路度崔嵬 攀到山嶺眼界開

夕照猶留松浦水 白帆無數去還回

峰頭西望海天開 萬里洪濤眼豁哉

淡靄如烟日將暮 斜光猶照故宮來

誰の視る處も均しい。鵜渡越の夕陽こそ大觀中の大觀。それに來合せた自分は幸福だ。

鷹一ツ添えて百なり島の數

併し月明の夜もさぞや。昔、曾良は、松島に芭蕉翁の供して——松島や鶴に身をかれほと、きす——と吟じてゐるが、自分は此九十九島に對して。

鶴に乗らず鵜渡越に立ちて月見たし

殊に向ふ遙かに黒島の見えるのは、歴史的にも憧憬の一ツ。切支丹研究家には見のがせぬ史蹟であらうが、眼下の島々にも、それ／＼傳説もありといふ。

鷹島はあれよ。禿島はそれよ。矢壺島、弦島、三年島、それ／＼に方堂翁は、其島に就いて面白い由來を説かれたが、ウツカリ筆記してゐて、憲兵隊にでも捕まつては迷惑なので、單に記憶に留めんとすれば、頭腦が混亂。それに光線と潮流と、それ等の加減で、見てゐる間に島影が變化するので、眼底までが混亂して、結局、唯只大觀々々とのみ、漠然たる印象の雲隠れ、千切れ／＼に島の影々。眼を閉ぢても島の影々。此所を去つても島の影々。

數日後の『大毎』西部毎日版に、自分の寫真版まで入れて、二號三號大活字を取混ぜての記事に——江見水蔭氏は松島より數等美しいと折紙をつけた——と掲載されて恐縮。それは確かに鵜渡越から九十九島を展望する處は、松島に於けるいづれの高所よりも優れ、島も海も松島のそれよりも綺麗なのは事實だらうが、人が松島に失望する程自分は失望してゐない。松島には又松島の特徴がある。それは單なる大觀でなく、寂を含んだ大觀だ。寂の中には歴史が含まれてゐる。歴史中の人物を追懐して、それを松島の背景下に活かして見る。そこに一木一石なつかしみが滲み出る。斯ういふ點は遺憾ながら、鵜渡越には未だ缺けてゐる。但し此後には、續々歴史は附けられるのだ。(たとへば水蔭手帳落しの岩なんて——失禮)

下山、迂回して相の浦に向ひ、夷島に渡つて、附近の島々、松か、鳥か、岩か、鳥か。中に鞠子島の急潮を見た。夷島には岩や松や、其間に、隠士の草庵に似たる茶亭があり、柴門を入つて休憩。一日の清遊に適する別天地。方堂翁は能く此所で詩會を催すとか。之で第一日程を終り、小畑町の池月旅館に入つた。長崎から中川代議士が先着されてゐた。八重津博士は宿へ上らず、再會を約して久留米へ歸られた。御心づかひ難有き事也。

今夜縣人有志の歡迎會が（足立氏の収入役昇進祝賀を兼ね）旅館の別室で開かれ、明日よりは講演。その日程は示されたが、揮毫は、どうも駄目だといふ話。

前記六氏の他に、高田石三氏、海軍主計中佐白神君太郎氏、以上縣人八名。それに飛入りとして佐世保教育會長海軍少將菅沼周次郎氏（個人として西海中學校を創立、現に校長として精神教育に努力せられてゐる。平戸の國士、故菅沼貞風氏の令弟である）佐世保商業銀行頭

取北村徳太郎氏——酌の爲に藝妓繁龍金之助の二人。

菅沼氏が慨世の餘憤、單刀直入的の質問——今の時代をどう御覽ですか——に對して——大變良く成つて來たやうです——と答へたのに、不審不服の様子。自分は更に——今よりもモツト墮落した時代も有つたのですが、最近大分覺め掛つてゐるやうですよ——と附け加へた。

宴終つて自室に退くと、老妓繁龍が附いて來て、何彼と身の廻りの世話、親切にしてくれて、さて、と來た——何か記念に一筆とあり。羽織の裏に何やら即興句を書いた。この老妓、才物。一時退いてゐたのが再勤とか。翌朝、見番へ行つて、其羽織を自慢にしてゐたのを、石川氏が認めて報告。恐縮）

佐世保舌戰記

池月旅館は、佐世保第一流。古くから聞えた家で、建築もガツチリしてゐるが、何分にも舊式で併し軍人相手だから之で好からう。曾て小波も此所に泊つて、訪問客引きも切らず、揮毫も多數であつたと宿の者は云つてゐた。こちらは揮毫絶無なのだ。トテモ巖谷ほどの徳望はないが、併しそれは時世も違ふ。としても、實際自分には、主として後援に立働いてくれる眞の世話人がなく、縣人は唯縣人としてのが突き合としか見えず。勿論それ／＼職務に多忙でもあられるのだが、一體にヒントを脱れてゐるらしいので……。イヤ餘りに實感を吐き過ぎて失禮。但し福山翁は苦勞人だけに、揮毫の旗色の非なるを早くも見て取つて、中川代議士とも相談。それでは、市の諒解を得て、佐世保觀光協會の事業として「鶴渡越大觀」といふ紀行文體の案内記の執筆を依頼し、その稿料を以て補つて貰ひたい。然ういふ風に話を進めると云はれた。御好意感謝。

それには歸途に最一度出直して、船で九十九島遊覽。平戸まで行つて貰ひたいとあり。それを約した。

二十三日、晴。午前中、市内小學十三校の生徒五年以上五千三百人、彌生座といふので二回に分つて講演。中川代議士は歸長。高橋剛男氏案内。市教育課長岸川正氏、八幡小學校長楠本雄一郎氏、市の自動車で迎へに來られた。

「巖谷先生の時は、お聲がどうも徹りませんで、後の方が騒ぎまして」と貴君も然うだらうと、戒告ともつかず、注意ともつかず、某氏から云はれたが、何かにつけて巖谷の話が出る度に、今更な

つかしく、彼晩年は元氣を失ひ、自然聲量が出過ぎたのを思へば、涙。

十時半より二千六百人。岸川教育課長、紹介之辭を述べるや、忽ち消え失せた。市務多端だといふ。市内五千三百の兒童に講演する外來の老講師が、どんな風に講演するか、それを聴いて置くのも市學務課長の責任だとも考へられるが、それ以上の重大なる用件でも有つて、それで退座か。

最初一步、劇場に入った時に、これがどう成るものか。小波の聲が徹らなかつた譯だと思はせる程、その喧騒さは形容に苦しむ。二千六百人が、一人として黙つては居らぬので、中には口論する喧嘩する。野天なら好いが、建物の内に二千六百人の聲が籠つて、耳も聾するばかり。けれども訓練は行届いてゐて、警笛一聲、ピタリと鎮まつた。

これでは萬一失敗すると、どんなに又騒ぎ出されるか知れぬと、袴の紐を締め直して立つた。聲はガン／＼と響き渡つた。これも入齒のお蔭。(宮澤泰造氏、相撲門下の齒科醫學士に感謝した。實際、聲はイクラでも出るのだ)

入替へて十一時より又二千七百人。花道から舞臺までギツシリ詰つた。ガン／＼やつて唯の一人にも欠仲を出させなかつた。二席とも得意の「土泥」劇場の舞臺で獨芝居を演じたに均しかつた。座方の人々は皆ビツクリしてゐた。

玉屋デパートの五階食堂、辨當で中食。それから佐世保高等女學校へ行つた。校長は藤陵繁雄氏同氏令兄は品川に耳鼻咽喉科醫院を設立されてゐて、自分は本年二月、北海道で咽喉を痛めたので御厄介に成つた關係、それで講演の枕に。

私は不思議な御縁で、藤陵校長の兄様を知つてゐます。それ故その弟さんの校長である當校

で、どんな蠻聲を出して咽喉を痛めても、歸つてから兄様に治して頂きますから、今日は思ひ切つて大きな聲で云々。

此所から市役所を(新築中公會堂を代用)訪問。市長御厨規三氏に敬意を表し、社會勸業課長松本二三氏にも面會。平戸行には同氏が案内せられるといふ話。皆福山翁及び足立收入役の斡旋である。市方面委員及び市吏全部に、自分の講演を聴いて頂けたのも亦然り。

懇篤なる御厨市長の紹介之辭で、自分は「同情」題下に長講。終つて歸宿。佐世保養老院主事川添諦信氏代理の訪問を受けた。

入浴、夕食後、早く就眠。按摩を呼ぶ。男にて無類の下手。餘計くたびれた。其半途に、足立石川二氏の訪問を受けて失禮した。この日講演四回。

二十四日、晴。足立高橋二氏案内役に立たれ、市のハイヤで佐世保商業學校。校長石田藤吉氏、教諭池田一郎氏。八時半より講演。轉じて成徳高等女學校、校長寺田健一氏、教諭清水輝二氏。この校風、浮華輕佻のモダン氣分を排し、健實にして優雅なる眞の日本婦人を養成する極めて地味な教育方針。それに自分の講演が合致したので、寺田校長は非常に喜んでくれられて「揮毫を」といふ話にまで進んだのに、同行の高橋氏氣が乗らず。「いづれそれは後で」とその儘退出。勿論先を急ぐので、今度は殆ど市の端れともいふべき地點の西海中學校。

菅沼校長は、杉浦先生の塾にも來訪されてゐたといふ關係から、講武道場で「杉浦先生の家塾」一席。ヘマを語ると校長から一本参りさうでもあつたが。

忠君愛國を眞正面から説く、そのみに委せて置けぬ。猶其上に、裡面、側面、所謂大手翳

手から敵を攻め落すのが兵家の常だ。自分は其側面から説く一人である。人間を赤裸々にして、身を個人主義の極端な輩と假に成下つて見て、それで眞の幸福が、自分自身だけでも得られるかどうか。研究の結果はトテモそれは得られるものでない。本音を吹けば、自分の事を自分が一番能く知つて居り、又自分自身が一番可愛いのだが、それが眞に可愛いならば、矢張日本の國風に従ひ、皇室中心で、犠牲的精神で、それで進んで行くに限るのである。その例としては。

斯ういふ逆手が自分の講演の手法、否、口傳なのだ。幸に生徒は謹聴してくれた。校長から叱られもしなかつた。

それから直ぐ海軍工廠へ飛んだ。(三回に切つて職工といふので、緊張して乗込んだが、一回切りに成つた) 正門から堂々と乗込んだ。早速、食堂で晝餐の饗應。名刺は頂かなかつたが、工廠長山本道之助、造船部長河東宅四郎、造船部長大野利彦の三氏。いづれも閣下級の方々であらう。會計部長主計大佐時森良穂氏、總務部員海軍中佐近藤憲治氏等、食卓を共にせられた。海軍式で洋食の分量の多さに、一皿で降参する位。

構内が廣大なので、自動車で大講堂(昭和臺といふ高所に洋式新築。職工の寄贈といふ) 千餘名職工外に將校連も聴く。適所を得てガン／＼ビュ／＼と大馬力で國技談。大喝采。

元の應接室へ歸ると、紙墨が用意されてゐて、紀念に揮毫と乞はれた。無論行脚の規定書は前以て示してある事と思へば、初めて愁眉が開けて、懇望に委せて、半折十五枚、畫帖一冊。然るにそんな意志が通じてゐなかつたので、結局紀念は紀念に過ぎなかつた。一體同行の高橋氏に全然行脚

後援の意志が無いので、まアそれも好い。相手が帝國海軍の軍人達だ。老文士が敬意を表するのに講演後の疲勞をも厭はず、相當の揮毫をしたといふ、その誠意さへ汲んで頂ければ結構。

併し自分は何等官廳の保護を得ず、個人として講演報國。捨身の荒行をしてゐるのだから、行先先で後援を得なければ、行旅病者の死に終るの他はないのだ。それを酌分けて下さる各地の有志に、今更感激せざるを得なかつた。

此所へ、工廠醫務部長で海軍共済組合病院長を兼ねられる軍醫大佐豊田實氏が見えて。

『私は服部の弟です』と先づ名乗られた。呉から同乗した服部少將の令弟なのだ。

『今夜、病院で講演を願ひたい』と云はれて、喜んで受けた。高橋氏は急用で長崎に行くとして姿を消した。

御厨市長が留守中に訪問されし由。恐縮。給では寒く、眞綿を出して襦袢に着けた。

夕食後、迎への自動車に乗り、共済病院。豊田大佐の他に、軍醫中佐後藤願三郎氏にお目に掛つた。共に温情で老行脚を優遇された。主として看護婦百餘名、其他夫人令嬢達。それに職員男子連、これでは相撲談では間に合はず。『小波を中心として明治文壇を語る』小波も最近此所で講演したといふので、特に小波と題を置いたのだ。休憩後、今度は男子向に『谷風』

此所でも揮毫。それに服部閣下からも註文があつた。それ／＼芳志を得て難有し。工廠とは違つてゐた。これで此日講演、實に六回。(數年前に七回のレコードを有したが、此分なら當分大丈夫) 併し歸つて入浴、不圖鏡面を見て、亡者の如き衰相に、我ながらゾツとして。

『貴様、可哀さうに、大分ツカレたなア』

鏡面の亡者はハラ／＼涙を零してゐた。その爲でもないが、到頭禁酒破り。忽ち好い心持に急轉して快眠。

二十五日、快晴。歸途の再遊を約して出發。見送り福山足立石川三氏の他に、池月番頭能く氣の利く人にて萬事世話。午前八時三十三分長崎直通列車。殆ど満員。

長崎の第一日

早岐驛で八重津博士と合した。長崎への紹介者として、わざ／＼久留米から出張同行されるのであつた。重ね／＼の御親切である。途中、大村灣の古墳所在地、同氏の貝塚發見地、それ／＼に指教された。大村灣は今猶太古の如き感じさへ受取られた。風景も佳し。最少世間に紹介されてゐても好い様に思はれた。併し、それを鑑賞してゐる時間に乏しかつた。何故といふに、長崎で放送する稿本が未完了。彼地に着いてからは、寸暇もないのが豫期せられてゐる。今この汽車中を活用して置くの他はないので、博士に失禮してベンを走らした。併し長崎近く成つてからは、然うもしてゐられなかつた。沿道、切支丹關係の遺跡が多く、エルサレムの山形に似てゐる浦上天主堂附近の丘陵、十字架の墓標など、博士から指示された。

十一時零三分、長崎驛着。多數のお出迎へに先づ晴々しさを覺えた。

秋晴の殊に光るや瓊の浦

中川代議士、雨森一郎先生（長崎縣醫師會顧問。長崎縣學校醫會長其他）江浪時雄氏（三菱造船所會計課長）道田間平氏（長崎市學務課長）鶴田龜二氏（元滿鐵撫順炭坑所長にして稱好塾同門）

津田繁二氏（長崎縣史談會常務幹事）太田寛氏（長崎駐在伯刺西爾國名譽領事）藤森茂男氏（ジャパン・ツーリスト・ビュロー主任）武富正次氏（長崎市新町小學校長）鳥越愛次郎氏。岡崎正氏。其他。それに驛長椎野貫一郎氏、更に福島屋の主人公及び番頭氏等まで出迎へられた。犬養木堂筆の、立派な岡山縣人會旗を、鳥越氏が旗手として押立て、驛外へ出た。（新聞寫眞班は遅れて宿へ）凱旋兵の如き感じがした。先づ自動車で大村町の福島屋旅館に入った。

この宿に定めて頂いたには、大いに事情がある。長崎では先づ上野屋といふさうだ。自分も昔泊つた事もあるのだが、全集第三卷の「別府中心行脚」の時、序でに長崎へ廻つてくれぬかと、前以て團長の天民老が自分に説いた。それは宮崎行の邪魔に成るから、僕だけは御免だと斷つた處が、そんな事を云はずに、平山蘆江に突き合つて行つて下さい。土地の諏訪祭紹介旁々、有志が歓迎云々。それではと承諾。すると又天民老から手紙で、どうも大勢で出掛けては、先方も旅費其他の支出に都合がわるいらしく、加之この歳のお祭は本格でないから、中止して貰ひたい——それまでは好かつたが、別に蘆江宛の某氏の手紙を同封してあつて（それには、平山君と長谷川君だけは來て貰ひたい。上野屋で歓迎する。同店では、他の人はどうでもいいから、その二君だけには、是非來て貰ひたいと云つてゐる云々）こんな譯だから、わしやアいきませんと天民老も怒つて來た。これは天民老怒るのが當然で、いくら特別の親友でも、蘆江さんもノンビリしてゐる。何も、その友人の手紙を、天民老に見せる事は無いのである。天民老も亦その手紙を、自分にまで見せる事は無いのである。其結果天民老も中止かと思つたら、細君まで連れて、酒蛙々々と上野屋へ泊つて、その提燈を「食

道樂』で持つてゐる。愉快な男さね。併し自分はチツとも愉快ではない。

そんな紛糾のある上野屋へ、ノンビリとして泊りに行けるだけの結構な雅懐なんか絶體に持合せぬ拙者である。この事を、小波が赤十字社入院の前日に話した處が、酷く同情して、それは上野屋もわるいが、平山もわるい。更に松崎がイカンね。好しく、それなら福島屋へ行き給へ。僕の泊つた家で、主人も主婦も共に親切だ。二人共教養が有つて、行脚に理解を持つてくれるよと云つてくれ。又永見徳太郎氏は、主人と親友だから、紹介状を遣つて置くとまで云つてくれた。その福島屋に入つて、諸氏と共に晝食。

今日の第一日程は講演三ヶ所であるが、それまでに先づ御挨拶廻りをして、猶第一に長崎市の總氏神様、諏訪神社に参拜。それから明日放送する丸山權太左衛門の展墓といふ事にして、中川代議士が津田繁二氏と共に、御案内下さる他に、八重津博士も同行。更に山口靜夫氏が、好意を以て寫真機携帯、記念撮影をして下さる事と成つた(同氏は有名な丸山の花月樓の、元の若主人)。

先づ近くの『長崎日々新聞』に立寄つて敬意を表し、長崎縣廳に(奉行所跡)知事鈴木信太郎氏を訪問。折柄多用中とあり、名刺のみ提出して退く。學務課長道田氏不在。先刻出迎はれた御禮を述べ得ず。廊下にて『長崎新聞』編輯局長近藤南山氏に刺を通ずるの機會を得たので、同社訪問を免して頂く。それより市役所に向ひ、市長草間秀雄氏に面會。之にて主なる挨拶廻りを終り、諏訪神社参拜。併し、山上まで石段可成り高く、それに時間も乏しく、いづれ改めて本殿に額く事にして、諸氏と共に下車、石段下にて参拜、今度はいよいよ丸山の墓参。

自分が得意の相撲講演には、必らず丸山權太左衛門を引張り出す。丸山の名は、頭に瘤があ

るからで、その丸山は長崎で死んで、丸山の皓臺寺に墓がある。その墓石の頭の上にも瘤が刻まれてあると語つて、喝采を博してゐる(『耽奇漫録』中に肖像と墓石の寫生が出てゐる)然るに此方で聴くと、皓臺寺で葬儀はしたが、丸山とは隔離してゐる本河内にあるとの事。國道を自動車は走つた。今に町幅は擴げられるさうである。途中名所古跡多し。否、長崎の町は何處へ行つても、皆それ／＼歴史を持つてゐるのだが、一々見物するには、餘りに慌だしい講演行脚。二足の草鞋どころか三足も穿いてゐるので、遺憾ながらカツ飛ばして、唯疾走中に、津田氏から、注意を受けるだけに留めた。

芭蕉、去來二人の、渡り鳥の句を、文化の頃建碑。それが舊國道にあるのだが、其儘にした。下車、徒歩。

渡り鳥の塚も訪ひ得ず渡り鳥

亂雑な細い石段を登る。此邊墓地。可成り高き處に、丸山其他力士の墓。近年に改修とか。栃木山が昭和三年に建立した「故名力士之碑」といふのが先づ目に着いた。

雲早山森之助(年號不明)峯松李之助(天明六年)丸山權太左衛門(寛延二年十一月十四日)玉井茂三次(安永五年)一二三孫兵衛(明治元年)といふ順に並んでゐた。故力士の塚も並ぶや秋の唐錦。

丸山の墓の前で、同行三氏と並び、山口氏撮影。更に自分一人墓に凭つて撮影(口畫参照)『耽奇漫録』山崎美成の記事に——長崎にて死す。皓臺寺に葬る。頭上に瘤有りし故石塔にも、その形をうつしたるなるべし——然うして石塔の寫生圖が出てゐる。それに比べると、岡山良雄信士と刻し

た圓柱形の石の下は、蓮華座の臺石であるのに、今は然らず。改修の際に間違へられたのか。其以下には變りが見えぬ。それから大事な要件、碑の頭に瘤が無いので、疑問を生じ、登つて石頭を調べると、圓形の窪みを發見。これは瘤形の石を嵌め込んであつたのを、改修の時に氣が着かず、放棄されたものか。

野分すれば力士の塚も動くかな

歸途、長崎商工會議所にも敬意を表しに立寄つた。歸宿しても息を吐く間無し。午後三時から勝山町瓊浦同志會館で、小學校職員會諸氏に講演。長崎市教育會理事志賀親久氏が迎へに來られて、雨森、八重津氏其他と同行。道田學務課長が、相變らず明快な辯舌で（第二卷篠ノ井の記事参照）懇切な御紹介。それに次いで『明治文學に就て』これが長崎市に於ける第一聲。先づ長崎出身の明治文士に就て略説。福地櫻癡居士は勿論、西芳菲先生に就て比較的多く説き、石橋忍月から石橋思案に及んで、出来るだけ精講。

長崎大通辭石橋家の正統、有名な助左衛門の嫡孫。父は政方と云ひ、侍從職を拜命。三條内大臣の祕書官をも勤めた人。その子助三郎が何故思案と號したか。それは今回八重津博士の考證に従ひ、成程と遅蔭に自分も點頭したのであるが、市の名所の一ツに思案橋といふのがある。築造は石の橋だ。それで石橋思案。その硯友社創立の文勳から、君が都々逸文學の淨化に努力した結果が、今日の僱謔全盛に及ぼした、隠れたる功勞をも述べた。又、足立半顔居士に就ても一寸及んで、いよ／＼本題。

二時間近くも辯じたが、未だ盡きず。併し次場所の講演時間に迫られて終了。大急ぎで自動車。

江浪時雄氏の御案内を得て、中川代議士と共に飽ノ浦町三菱職工學校に飛んだ。此邊は殆ど造船所王國の觀。校長中山友次郎氏。この他に三菱造船所職工課長石島傳氏、同會社岡野正司等。

講堂洋式。音響の調節好く、聲を出すに樂。多數の生徒にも樂に一席。直ちに歸宿。この夜座談會が有るので、早く夕食。少しでも假睡して、休養さして貰はうと思つたのに、附近から出火。大騒動。黒煙がつい側に見えてゐるが、風は幸に無し。その爲に夕食どころか。併し受持女中お雪さん、能く行届き、取亂さぬは感心。漸く鎮火。江浪さん、晩酌を缺かしては氣持がわるいとてビール。福島屋の食事、トテモ美味。長崎は全體に食物の美味い處と聽くも、他は知らず。此家確かに優等。

遅れて八時過に櫻町の商工會議所に行く。樓上廣間にて座談會。出席者四十六名（入場記名順）

松本源次郎。都野川二重。小田文平。黒正太助。宇野武男。鳥越愛次郎。大島正晴。岩永十郎。田森茂一。佐藤求。竹内晨。西崎鐵雄。丹羽漢吉。藤井義三郎。今井峯次。浦原春夫。河野福一。熊井ハツ子。久田禎子。坂田菊代。金井クニ子。中里延榮。平石肇。森壽雄。渡邊庫輔。太田寛。前田光磨。川村喜久磨。大久保龍男。廣江助雄。安部汎愛。平亨爾。大原利文。林郁彦。篠崎義雄。山口靜夫。鶴田龜二。中川觀秀。生島宏一。桂吉之。津田繁二。藤森茂男。岡崎正。小川立男。八重津輝勝。雨森一郎諸氏。

黒正太助氏は、長崎地方裁判所檢事正にして同縣人。大原利文氏は、同裁判所長で又同縣人。曾て自分が朝鮮京城で、一方ならぬ御厄介に成つた大原利武海軍大佐の令弟。其他博士、學校長、然らういふ長崎第一流の智識階級が揃はれて、たとへ無位無官の人でも、それ／＼一方の旗頭（光榮此上もなし）。

中川代議士の場馴れた口調、總てに親しみの深い紹介辭に次ぎ、自分は先づ開口。

昔は長崎へ來るといふ事が容易でなく、今の洋行よりも困難。その例を擧げて見ますと、享和二年に、尾張の吉田重房が(『筑紫紀行』の著者)三月十六日に立つて、五月二日に入り、四十六七日を要して居り。明和四年、水戸の長久保赤水が(『長崎行役日記』の著者)江戸を九月五日に立つて、十月十日に入り、三十五日間を要してゐます。昭和の御代の難有さですが、私は十五日に發して、寄り道の結果、今日で十日目。

先年一寸當地へ來た。その時の同行者が肝付海軍中將。甌島を共に一周した時の海上ナンセンスを一席。それで一笑ひして頂いてから、座談に轉じると、イキナリ巨彈が飛來して來た。それは日本文學の將來に就て承はりたいと、眞正面から冠せられて、タヂくたらざるを得ず。この發射の名手は、詩人蒲原春夫氏であつた。

『文壇を退いて行脚の身。それに旅づかれで、頭が、益々悪いのですから、然ういふ大きな問題は御勘辨願ひたい』と軽く身を交した。

と第二の巨彈『それでは長崎にお着きに成つてからの御感想を』

『それを今語つては、私の全集が賣れなく成る』は我ながら巧く逃げた。

『それでは早速、全集に加入しませう』は敵? ながらも天晴々々。

『一體、丸山權太左衛門といふ力士は、どんな經歷のあつた男で』と、鶴田氏から側面砲を一發。

『それは明晩のラヂオでお聴き下さい』と逃げるのが巧い事、これも天晴?

黒正檢事正も、大原裁判長も、こんな奴が犯人だと、油斷が成らぬと思はれたかどうか。それか

ら相撲談など出て、無事に閉會。四十六氏の矢面に一人で立つた。但し、巨彈にせよ、小彈にせよ、皆行脚への好意の表現なので、誠になごやか。以上が長崎の第一日で、疲勞はその極度。歸宿、入浴、直ぐ就寢。(この日講演三回)

長崎の第二日

二十六日、快晴。三十年來珍らしき寒さといふ。幸、宅より綿入着。袷と重ねて着る。朝食前に同宿の客人より刺を通じられた。鹿兒島縣々會議員、串木野村長、肝付篤志翁であつた。早速招じて久々の對面。東京で放送までした昨夜漫談の、海上ナンセンスの出發點、串木野で御厄介に成つたので、それは明治三十四年の夏。三十二年目の奇遇。新聞で知つて訪はれたので、之から出立との事。昔語をする暇のなかつたのは、遣り惜しかつた。

既に早朝より、縣人側發起者の藤森、太田、大久保、岡崎諸氏詰めかけられた。朝飯を咬みくち出て、九時より恵比須町の長島簿記學校。大久保氏紹介辭。修養講演一席。直ぐ自動車で、竹久保町瓊浦中學校。校長船引眞造氏。教諭篠崎義雄氏(昨夜座談會出席)十一時より講演。直ちに下西山町の長崎高等女學校。中川、太田、岡崎諸氏同行。先着には雨森先生、津田、蒲原、山口の三氏。

校長宇野武男氏は、縣人で、後援發起者の一人。昨夜の座談會にも見えてゐた。二時より大講堂で、千餘の女學生諸嬢に、趣味教育談。雨森、中川、鶴田諸氏令嬢の母校といふ。終つて諸氏と正式に諏訪神社參拜と成り、裏坂にて下車。圖書館前の方から廻つて、境内名勝の説明を聴き、横手

から拜殿前に出て、初めて近く神前に類くを得た。記念撮影（口繪参照）

長崎のお諏訪様と云へば、全國的に鳴り響いてゐる。今更説明を要しないが。大略を記せば、諏訪大神、森崎大明神、住吉大神の三柱の合祀で、國幣神社。切支丹宗徒の不敬な行動に、一時荒廢を免れなかつたとか。今の建築は如何にも森嚴なる空氣に充たされて、何人の膽にも神々しさが深く銘せられる。

社殿の背後は、鬱蒼たる茂樹林。境内の公園から、灣口市街一目に見渡される。向ふ近くに彦山の一脈。蜀山の狂歌の、月のづるといふは是。

柏手を返へず山彦散る紅葉

今度は正面から下降すべく神門から長坂七十三段（下まで全部で百九十餘段）其間に鳥居が五。東京出發前に、ラヂオ放送でお祭の景況を聞いた。その場面が此所だと思ふと、その時の盛事が偲ばれたが、あの時、聲のみ聴いて、長崎の光景を想像したのを、今度は眼に判然見てゐながら、反對に東京の留守宅の、ラヂオ器の前を思ひ浮べた。

蒲原春夫氏著『長崎の横顔』に従ふと、此所の石壘に、陽石と陰石とを發見し得る。男女反對に異性の石を踏むと、幸があると古來の傳説云々。それを著者が同行して居りながら、説明を得なかつたのは遺憾であつた。呵々。

歸宿して、未完了の放送原稿を見る寸暇すら無きまでに訪問客。（實は日記を附ける間もなかつたので、此記事にも前後轉倒があらう）その中に『日本數學史』研究者の荒木豊三郎氏が見えて、訪問の目的は——如何にすれば日本數學の歴史を世人に洽く知らしめ得るか、御高説拜聴といふ事。

その熱誠なるには敬意を表するが、それに多年研究をつゞけてゐられる當人でさへ、名案が未だ無いといふ位なのに、今聴いて今直ぐ名案を提出致し様もなし。

辛々に放送稿本出來。既に放送局より迎への自動車來つて待つ。稿本を綴ぢるのをお雪さんに托して、急いで準備。太田、藤森、岡崎の三氏同行。西坂町の放送局に向つた。（本年九月十六日開局）

西坂の臺地こそは、切支丹教徒に關する遺跡に富む處。千人塚と稱する島原亂の賊徒、三千三百餘の首を埋めた場所とか。それに二十六教徒を、國法に従ひ嚴刑に處した遺跡。その他が有るのだが、行く時間無し。

放送局の爲に坂路が舗装されて、自動車が登れる。と又一部に反對。それは寺參りの老人達が、今までに踏み馴れた坂路、どの石段まで行つて一休みするといふ、その見當が狂つて困るといふ。文化と信仰、新舊衝突の例として、面白く聞いた。

局へは増田氏が紹介されたのであつた。局長松尾重太郎氏。津田、蒲原、山口三氏先着されてゐた。六時のコードモ放送に『丸山權太左衛門』約二十分。

丸山は、横綱の元祖といふ説を非認。併し寛保延享の頃、三ヶ津その外にても大關。その墓が長崎とは誰も知るが、その死因不分明。然るに今度、仁尾環氏著の『長崎の史蹟と名勝』を見て、寛延二年十月、長崎小島で興行、疫病に罹つて、十一月十四日客死と分つた。

放送したのは子供本位で、日本初渡來の大象と相撲を取つたといふ與太まで入れたが『その身長六尺五寸、これをメートルに直しますと一メートル九十七センチ』といふのを『九十七インチ』と脱線。（元來自分はメートル法に絶體反對。死ぬまで自分は用ゐぬつもりだが、子供の爲に初めて

直して見た。けれども本統にメートル法が頭に入つてゐるので、此失敗)

その他は幸に好評で「あなたの時に限つて、機械の具合が非常に良好。開局以来の成功であつたさうです」と同行者の一人、局側から聴いての報告。それに廻り合せたのは僥倖。けれども、いくら機械が良好でも、随分セカ／＼譯のわからぬ講演をする人がある。それは放送を甘く見て、何等研究を積みぬからだ。單なる朗讀、單なる講演、それでは全然失敗だ。練習を積まずして成功する譯がないのだ。その練習を積む間もなく、此夕はマイクロホンに向つた。それが好評なので安心。(歸宿すると既に留守宅から、ヨクキコエタ、といふ入電)報酬東京並。支局としては大ファンパツの部。イヤ東京がファンパツしな過ぎるのだ。

歸宿。急いで夕食。直ぐと又今町の三菱俱樂部、江浪氏の御紹介であつた。早速「角力漫談」聴衆は俱樂部員諸氏、同家族の方々の他に縣人諸氏(中里延榮女史も他の一女史を伴つて來聴。その一女史は「水蔭の娘」を讀んで、私が身代りに成つて上げてよかつたとまで感激されたとか)それに中川代議士夫人令嬢と共に出席。後に知つた。失禮した。

津田、蒲原、山口の三氏と共に歸宿。趣味、考古、文藝、ピツタリ話が合つて、少しも疲勞を覺えず。いつまでも語つてゐたかつた。(この日講演放送共五回)

寢てから、丸山の墓と、諏訪神社、彦山、追加吟。

墓石の頭寒氣や本河内

拍手を山彦に聴く秋靜か

彦山の肩かりかねの渡るらし

長崎の第三日

二十七日、晴。今日も激戦日程。午前九時から磨屋小學校(長崎市には講堂を有するのが殆ど無く、主に教室代用)校長市川庄次郎氏。十時半より興善小學校、校長早田隆次氏。此校は體操場にて露天、日光に顔を射られてゐる子供さんの、眩し氣なる顔を見ては、長講は氣の毒。それに風が強く、聲を吹き散らされるので、難講。全市少しも早く講堂を設けられたし。それは可憐な子供さんの爲に。

此校より宿へ近し。徒歩の歸途を理用して理髮店行。技術も設備も行届いてゐるが、餘りに親切過ぎて、時間を要し、急ぐ者には困る。但し、長崎の人には、それ位丁寧な仕事をせぬと、氣に入らぬ由。

中食後、少し餘暇を得た、と云つて外出せず済むだけで、此時間に大變な仕事があるので、それは午後四時から、長崎醫科大學で講演。その未だ準備が全然無い。まさか土子泥之助も話されない。それに八重津博士の注意で、石器時代の話でもしたら好からうとあり。それが又旅先なので、急に参考書を渉る譯にも行かず。一寸頭を悩ました。

定刻前に、中川、津田、太田、山口四氏と同乗、大學に入った。醫科大學長小室要博士、事務官須田機策氏等にお目に掛つた。いづれも後援會賛助員。同教授古屋野宏平博士にも初めて拜顔。同縣人で後援會の一人。

斯ういふ博士達、その他の教授連、學生諸氏、婦人事務員諸嬢等、百餘名、大教室でいよ／＼講演。いくら鐵面皮の男も、勝手が違ひ、少々テレル。

八重津博士其他の御紹介で、當大學で講演、甚だ光榮で、諸先生達の前で、大膽にも漫談を試み得る機會を御與え下さつた御寛大さを深く感謝。と同時に、東京へ歸るのに好い土産でそれは大學で講演したといふと、大層私に箔が付きますので（笑聲）

併し學術的にはトテモ諸君に及ばぬが、石器時代遺跡調査の實地に就ては、聊か自信があります。その體驗談を試み、關東方面の貝塚と、九州方面の貝塚との相違の點を語りまして、幾分の御參考を呈し得れば欣快で。

九州方面貝塚の學術的調査、長崎醫科大學で初めて御着手に成つたのは、大正十三年、八重津さんが雪の浦の貝塚を御發掘に成つたのが最初だと承りました。私は又こちらの角尾晋博士とは（洋行中）先生が未だ學生時代に、能く御一緒に關東方面の貝塚へ行きましたので、旁々當大學には御縁も御座いますが。

それから簡單に貝塚發掘の歴史に次ぎ、日本人種論に觸れ、アイヌ論は獨斷に過ぎると難じ、後には碎けて發掘奇談に及び、人骨發掘に及び、その測定に及んで、古代人の身長と近代人のそれとの比較から、力士の身長重量に引張りつけて。

扱て此所まで来ればモウ私の御手の物で、醫科大學の先生達を前に廻してもヒケを取らぬ。しかも飽くまで學術的に、標本を参考に供して、昔の力士の如何に偉大なりしかを證明しませう。

例の力士の手形を一々示して、相撲が體育上最も優良であるといふ結論まで、拍手と喝采と哄笑とを浴びながら演じ来り。

『これだけ立派な學説を發表しましたから、必らず博士號が頂けるだらうと思ひます』と結んで爆笑を冠せられた。（無論同大學の博士賣買問題が起らぬ前であつたので、そんな冗談も云へたのだ）津田氏の紹介で衛生科教室主任勝矢俊一博士を其教室に訪ひ、御愛藏の金工鐺多數拜見。（同博士の令兄は刀劍趣味家）實に名品揃ひに驚く。鐵鐺は別に自邸に有りといふ。既に暮色が迫つたので充分に鑑賞するを得ず、辭去。

更に忙しい。この夜石灰町（シツクイマチ）松亭といふので、岡山縣人會。それに自分を招待された。お土産に短冊、それには一様に。

岡山の言葉盛んに東風は榮

コチャエイ／＼といふのが、岡山の郷土歌なので、洒落たのだ。出席者は（次第不同）

黒正太助。大久保龍男。岡崎正。江浪時雄。中川觀秀。藤森茂男。大原利文。安延三樹太。秋山武雄。秋山靜太郎。藤原重人。廣井新太郎。宇野武男。八木常四郎。三宅忠平。今井峯次。井本加三郎。古武彌輔。和仁勇。吉岡鐵市。久一易四一。首藤三則。古屋野宏平。原要。太田寛。鳥越愛次郎。猪平原太郎。萩原小四郎。岡増藏。吉岡菊夫。畠中雪夫。松原清美。遠藤實夫の三十三氏。

自分の行くまでに餘興として、蓄音器で自分の放送レコードを掛けて、罐詰の聲を聴かせ、其直後生肉の聲で、御挨拶やら、餘興漫談やら（主として石橋思案の逸話を語り、紅葉との戀愛論に及

んで、聊か猥談に變じかけた處で打切つた。その前に、中川會頭の開會辭は至れり盡せり。

運ばれた長崎料理に「おひれ」即ちヒレ椀といふのが出て、それには餅が入つてゐる。これは挨拶無しで直ぐ頂くのが禮で、それから改めて料理が出る順序。それから珍らしかつた。

東檢の藝妓、六助、君勇、千代次、桃蝶、桃丸、力奴、桃鶴、いづれも美しと敬意を表して置く。その風俗、京阪或は東京、又或はモダン味が、多少侵略してゐるのかどうか。昔を知らねば評は出来ぬが、自分の目には如何にも長崎藝妓らしい感じが見えた。雛妓の花かんざし、銀のビラ／＼が目につき、中妓に未だ裾を引摺つたのも有り、兎に角長崎らしい情調には接し得た。(飽くまで保存を望む)

座つきに、濱節。それからブラ／＼節。次いで雲仙小唄、これは困る。ブラ／＼節、最も結構。これは異人さん散歩の面影を見せて、ローカルカラー満點。

秋の夜をブラ／＼ぶしの踊よか

宴酣なるに及び、こちらは明日があり、失敬して、太田氏に送られて歸宿。(その後へ、脱走相撲の一行が、明日より長崎興行、常昇は縣人なので、呼ばれて來た。自分は常に脱走組を罵倒してゐるので、會はなくてよかつた)

雲仙嶽の冒險

二十八日、翌日の日曜へ掛けて、氣を抜きに雲仙探勝といふ日程。鶴田、太田、藤森三氏同行。長崎縣廳から、特に老行脚に、自動車を提供されたのは、難有し。八時四十分發。然るに、紙入を

宿に忘れたのに心附いて、取りに戻る。これが前後數回に及んだ。文士で金錢に恬淡、それで紙入を粗末にされるのであらうが、チト御注意ありたいと、雨森先生から御親切に一本。どう仕りまして、皆様の御好意で、大分膨脹してゐる紙入、決して粗末に見てゐるわけに非ず。これは實際頭腦が極度に參つてゐるので、小人の氣も上り、寸暇もないので、留守宅から電報が來て、讀みかけてゐると客來、又電話、又客來、電報を懐へ捻込んだまゝで、讀む間もなく、それをさへ忘れるといふ始末。紙入どころか、實は生命をさへ忘れてゐるポケ老爺也)

天氣晴朗、今日は仕事は無し。心の置きぬ人々とのドライブ、好い心持に納まつて、日見峠に掛つた。これは昔の江戸街道、今では雲仙へのドライブ道。舗装しつゝあり、された處もあり。大正十五年に開通したトンネルを抜けると、やがて矢上といふ。鐔の名工光廣の住所なりし。なつかしい。支考の——君が手もまじるなるべし花芒——その句碑が左の山手にあるも、疾走中見えす。これからは右手、千々岩灘を越して、既に島原半島が見えられて、一寸沼津から伊豆三津濱方面に向ふ途中を聯想された。間もなく海岸を離れて、立派な新道路を快速力。左方には千々岩灘も見えろといふ。實ふと、間もなく諫早町、そこを通過すると、左方が筑紫海。右方には千々岩灘も見えろといふ。實に此所は怪奇的な地形。地峽の最も狭い處を開通さして、その満潮時に最も高き筑紫海の方から、それよりズツと低い千々岩灘の方へ、海水を落せば、電力が得られるといふ程の場所。

途中道路工夫、一々老行脚に敬禮。實は我等にあらず。車が縣廳なので、お役人とも思つてゝあらう。恐縮。

千々岩を過ぎて富津、迎も風景佳し。辨天島が出張つて、自然の防波堤、灣内の海の色美しく、

相州油壺に比すべきか。此邊から小濱の町が見えて、温泉の煙が處々。

秋晴を別に小濱は湯の煙

十時二十分に小濱通過。これから山道をグン／＼登つてゆく。天氣曇、十一時に雲仙新温泉宮崎館着。この邊雲仙公園と稱して、大分モダン臭あり。其苦、外人目的の旅館多し。例の國際的といふヤツ也。

雲仙は國立公園に指定。山の歴史は人に知られ過ぎ、又餘りに複雑過ぎて、之を紹介には全集一冊を要すべし。故に略さして頂く。

宮崎館の樓上から温泉地獄の一部が直ぐ見える。真正面に矢岳。右側面に帯山。松の緑に、楓の紅、その麓から館庭近くまで、泥火の名残で雪の如く眞白である。處々の噴烟雲に連なつて、將に雨と化せんとす。それが邪見地獄とか、大叫喚地獄とか、名に恐しくて目には美しい。近いので行つて見たかつたが、中食の用意も出来、先を急ぐので棄權。

燒灰に映る紅葉や火の地獄

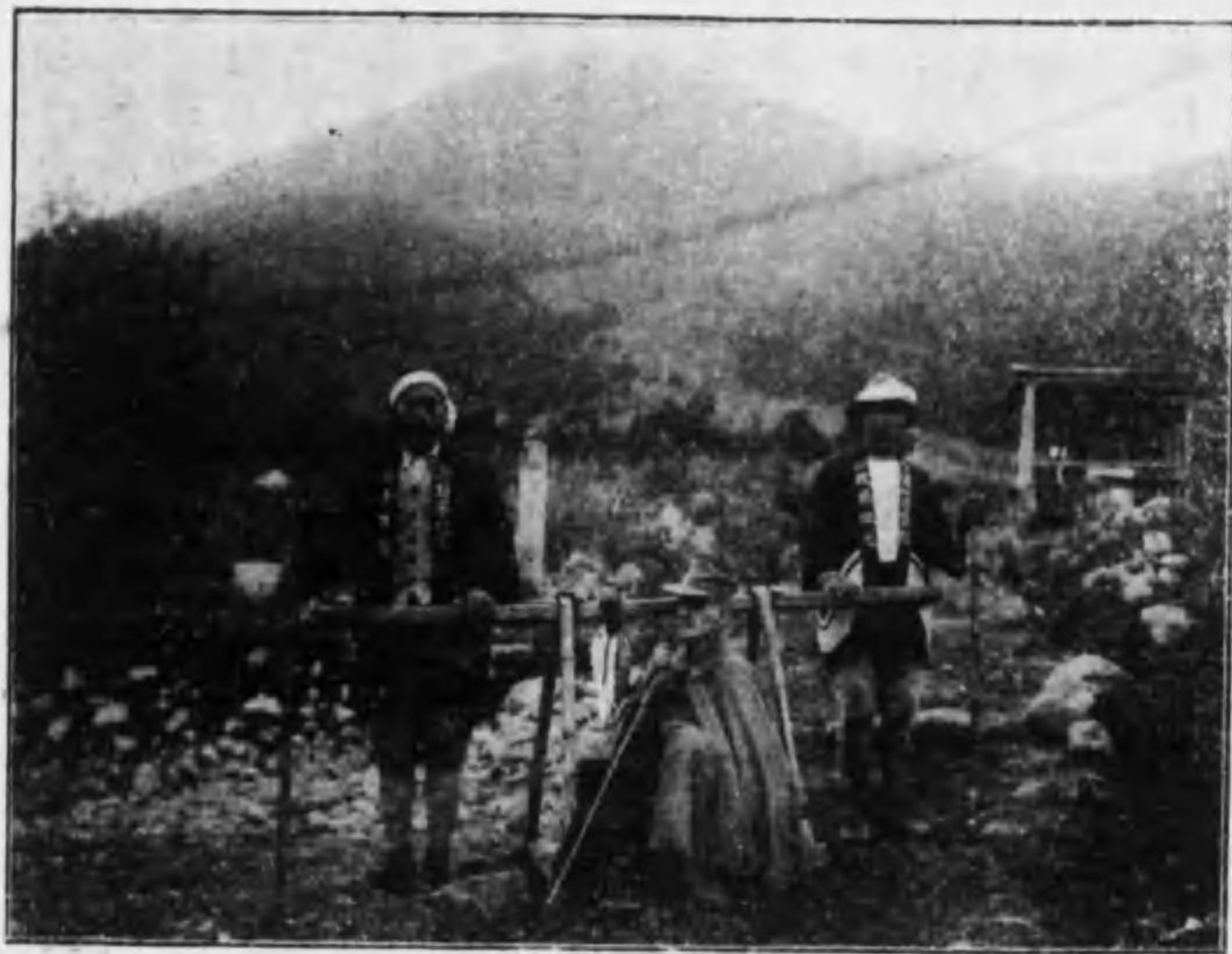
小濱町長鴨川清十郎氏が登山してゐて、挨拶に見えた。(湯煎餅を土産に頂いた)

何しろ寒し。袷と縮入との間に、眞綿を入れ、道行の上に夏外套、それでも寒し。公園係の長崎縣書記中田市右衛門氏が案内役で、自動車にて出發。近きお糸地獄、清七地獄、八萬地獄などの間を過ぎて、普賢館。そこまでしか自動車は行かず。自分は駕。鶴田藤森二氏は馬。太田中田二氏は徒歩。

屋根無し of 鶴の登山や秋高し

登山者多し。中に娘さん一人、遅れて、結へつけ草履、竹杖を力、後つき何となく梅子に見えて、又しても涙。追越して顔を見れば、似ても似つかぬながら、矢張梅子に思はれて、涙留め難し。南部恐山の地獄めぐりをする、必らず死んだ子にめぐり合ふとて、迷信家が鉦を叩きつゝ、終日山を行く。其哀音を聴くに忍びぬと、つい先月、青森で聴いたが、雲仙地獄にも其奇蹟が有るか。彼の女が健在で同行登山すればその後姿は斯うでもあらうかと又涙。駕擔きの人に極りがわるし。

仁田峠に到達して一休(標高一〇八〇米)既に大觀である。こゝで返る人も多いか。それより少し降りと成る。前を行く馬の、岩一ツ踏み損すれば、谷底に陥ちる危険さ。乗つてゐる人よりも、駕で見る方がハラハラした。



駕に乗つた著者
(普賢館附近にて——真正面雲仙地獄)

併し、此邊から、樹々の奇態、岩々の怪狀。樹々には葛、岩々には苔、樹の葛、岩の苔に連なり、樹か岩か見分け難く、その樹林を漏れて國見嶽の紅葉の佳さ。朝鮮の金剛山を聯想させられた。

それまでは好かつたが、又登りとなり、アザミ澤といふ處に至つて、馬も駕も行かなく成つた。已むを得ず人だけで行かねばならなく成つた。駕で絶頂まで擔ぎ上げると云はれたのは、自然ベテんに成つたのだ。駕でさへ行けぬ險阻、それを、大腸に盲腸が癒着して多年悩んでゐる老人に、徒歩で行けと云はれるのだ。宿屋も二階は上下に困る。どんな室でも下で我慢してゐる自分に、胸突き八町を登れと云はれるのだ。これをツリスト・ビューローの主任が計畫。公園係が案内されて然ういふ結果に成つたのだから、イクラも距離は無いのだらう。國立公園紹介の誠意から、斯うされてゐるのだと、其意志を尊重して登りかけて見ると、トモモそれは問題にあらず。戸隠山探檢當時の若さならばイザ知らず。老年に及んで戸隠山以上の難所に出會したのだ。何等の準備もなく、宿屋から借りた杖一本。それに雪駄で行く。一步だつて登れるものか。忽ち參つた。

太田氏が見兼ねて、ハンケチを破つて、雪駄を足首に結びつけてくれた。他の諸氏も何んとかされやうとしても、自分自身が怪しいのだ。それを喘ぎ／＼登つて行くと、途中の岩間に、既に倒れに成つてゐる人さへあつた。(但し飲酒の結果、餘計參つたらしかつた)

茶店で一二度休んだが、中田氏の所謂もう直きですが、決して直きとは思へなかつた。途中で腦貧血を起して、眼が眩んで來た。これは此所で卒倒するかと思つた。急いで寶丹を服んだ。

此所で死んでは、自分の眞の後援者に濟まない。身を粗末にして到頭雲仙で死んだ。我々が常に健康を祈つてゐる。その誠意を何故考慮してくれなかつたか。然う叱られる時には既に現世の者で

はなく成つてゐるのだ。

但し、自分達と前後して、奥さんや、お嬢さんや、子供さんまで登つてゐられる。自分よりも老人が登つてゐられるのは事實だが、皆この邊では呼吸せわしい。健康な方はそれだけで済むのだが、自分は此所で絶命せぬとしても、其無理が持病に祟つて、患部を刺戟して、發熱せぬと誰が保證する。今度盲腸炎に罹つたら、もう助からぬと警告されてゐる。その爲に自重して、小心過ぎるとまで笑はれてゐる自分なのだ。

そんな憤慨も普現嶽の絶頂に達したら、忽ち解消。聞きしに勝る大觀に突如開眼されたのだ。(三時十分)

雲仙と一口に云つても、實は、普賢、國見、妙見の三山其他を合せて、此内普賢最も高く、標高一三六〇米。其頂上に江見水蔭が今立つたのだ。(頂點は甚だ狭かつた。殆ど満員。いづれも大觀に氣を遠くしてゐた)

折しも曇。今にも雨ならんとして天は躊躇してゐる。再び登り得ぬ老行脚を憐れみての情らし。この大觀たるや、技巧に富んだ大觀。複雑に過ぎた大觀。怪奇に満ちた大觀。それを何處から先づ見初めたらよいか、迷はずにはゐられなかつた。立つてゐる岩頭で、兎に角踵ニジリに一廻轉。それで島原半島を、眼の球だけで一周したのだ。

漸く精神が統一された。けれども天候の方が焦燥の態度を示し出した。既に南方天草灘の邊は、雲か、山か、島か、海か。徐々時雨に包まれ始めた。それでも濃氣の中を、鉾の先で探れば、島々の當りは有るらしくも思はれた。之を右手にして東方の正面、有明灣(筑紫灘)を見るべく急がな

ければ、雲間漏る微光が今にも消えさう。その直下に宇土半島が、思ひ切つて全身を横に伸し、その頭部が三角港、枕を脱した如きは灣口の中神島とか。この宇土半島の根元を成す方面、熊本はそちらと教へられた。緑川の海に注ぐ處目立つ。肥後の山々の遠く近く、墨色成すにも自から濃淡あり。阿蘇山高し。筑後平野は左方に展開して、大牟田はあちら。久留米は猶又左方の筈。

猶又視線を轉向、天草方面を見直せば、島原半島の一角、口ノ津方面が、その天草に握手を迫る如く突き出てゐる。その口ノ津よりも離れて、左方に、一部の突出が、切支丹邪宗徒の立籠つた有名なる原城址。それと向ふの宇土半島の間に挟まつてゐるのが、これも名代の談合島(湯島)

今度は振返つて後方を見る。有明灣と反対の大村灣に、今まで背を向けてゐたのが相濟まなかつた。千々岩灘にも其通り。(最近橋灣と改名とか。軍神橋中佐を記念する爲としても、少しく考へさせて貰ひたい)その灣と灣との間に長崎半島の望まれるのは勿論である。

以上の如く地理書に味を付けた様な記録なら、老文士がわざわざ命賭けで登山の必要は無いわけである。今度国立公園と成りつゝあるのだ。大々の文章をと力味かへつてゐる間に、彼方も隠れ、此方も隠れ、次第々々に大観は隠れて来た。帽の蔭から半だけ見え出した。山時雨なのだ。

天氣晴朗、その山光水色を記すよりも、この雨中が俳諧だ。そんな敗け惜しみも出て来るのだ。元來この島原半島なる物が、怪奇的存在だ。それを圍む海や島や、いづれも怪奇性満點だ。その中心點たる雲仙嶽が怪奇の結晶。怪奇の語が暗いといふなら、複雑な技巧に過ぎたる山塊だ。その最高峯に普賢の名が有るからには、この絶頂は大象の頭部と見立て然るべしだ。周圍の海は雲界で、島々は散蓮華だ。誰か三昧に入りて、六根を絶たざらんや。

『今年の紅葉は先日の颱風に祟られました、例年の三分の一です』と恐る／＼中田氏が辨解。そんな事はどうでも好き也。

雲に乗りて仙化山々錦化かな

雲仙や昔は噴火今紅葉

大観の少し隠れて片時雨

寫眞師數名、網を張つてゐる。確かに登つたといふ記念の爲、一行撮影。(口畫参照)

片時雨ではなく成りかけたので、大観に割愛。諸氏に引上げられたのを感謝して下降。別途を取る。普賢神社近くにて登山の一團に摺れ違つた。その中に西海中學校長菅沼氏がゐて奇遇。この一行、縣下中等校の校長連と後に知つた。

待たせた駕に乗つて、普賢館まで歸着。後からの同行待合せ中に、駕のまゝ撮影(前頁参照)自動車にて宮崎館に歸つた時は、既に日没。入浴。濁り湯にて熱し。火鉢を圍む。

極樂の宿に地獄の紅葉かな

公園主事園孝治郎氏、(世界の公園研究家。苗字の園も自適)雲仙ホテル伊藤永藏氏、新湯ホテル豊田淨次氏、宮崎館宮崎龜千代氏、小濱自動車會社専務山口西一氏等にて、歓迎晚餐會。寒いので飲みたかつたが、禁酒。鶴田君、塾氣分を出して詩吟。

雲仙はいづれ国立公園としての新設備が出来るであらうが、今のまゝで普通遊覽の老人婦人には難場過ぎる。天然の風景を破壊するとしても、矢張ケーブルカーは必要かも知れぬ。兎

も角、山頂の大観は、周圍の海の複雑さに依つて、恐らく日本一。世界的名勝は當然であらう。最後に一言感謝して置くのは、今日江見水蔭が殺されずに無事下山を得た事で、もし私が普賢で倒れたら、榮光の靈山を潰して、相濟まぬ處で。

これを皮肉の挨拶と取られては困る。誠意からの忠告。八時から雲仙青年團主催、公園事務所で講演會。土地有志は、翌日が日曜、今夜が書き入れて、拜聴どころに非ず。それでも青年諸氏は遠く、一二里先よりも來會。

最初自分は、太田鶴田二氏に向ひ、軽い意味で——山でくたびれてもゐますし、夜も遅くなるのですから、どなたか前座をやつてくれませんか——

純情の太田氏は之を眞正面から取入れて、少しでも自分に樂をさせやうと、前講一時間を過ぎても未だ已まず。これには恐縮。未だく／＼續きさうなのを、藤森氏を通じて降壇を乞ひ、自分が登壇既に九時半に近かつた。

病餘の老人でも登岳し得るレコードは作りましたが、可成り私はつかれてゐます。登山の折にも太田先生から、手を取り、腰を押すの御援助を得たが、先生は更に老を憐み、この演壇でも可成り長く手を取り腰を押されました。その爲に、私の申上げる帳場が、甚だ少くなりまして。

簡単に雲仙を禮讃して、旅客に對する親切第一主義を、國體論と併せ説いて、終了。

それが又餘りに短かつた。二里も遠くから何を目的に我々は集まつたのだ。たとへ太田先生の長講が名論卓説で有つたとしても、それは我々の目的ではなかつた。江見水蔭、何か我々に對して氣

に入らぬのか。それが承はりたいといふので、青年團長某氏、顔色を變へて宿へ來られた。

恐縮千萬。謝罪の他なく、何事も老の身と、頭は下げたが。

『併し、辯じた時間は短かくても、云はんと欲する主旨は盡したつもり。分量が少くても野母のカラスミの味は格別。然ういふ味を咬み分けるのも、一ツの修養と思はれたい』

實際未だ安心出來ず。患部強化。發熱の恐れも有つたのだ。

小濱温泉の明るさ

二十九日、雨、朝揮毫。縣下圖書館長會議の一行と共に、増田廉吉氏登山してあり、來訪された。園、中田二氏も見えた。十時五十分發、十一時三十分小濱着。小濱一角樓の三階に入った。千岩灘を越して、長崎半島を望み、雨中ながら明るい感じ。入浴。透明。感じ好し。

渡り鳥も先づ湯治にと小濱かな

鳴川町長を初めとして、町有志來會。中に珍らしくも本多親宗氏あり。三十年目で相會す。氏は小濱に於ける山緒正しき舊家、現に雲仙小濱自動車、小濱鐵道、二會社の社長であるが、自分とは相撲友達で、自分が「二六」在社中、神田錦町の秋山定輔氏の土依へ行つた、その時の仲間であつた。こゝで揮毫。

湯の花や湖の花や濱千鳥

秋雨を貫きて見ゆ湯の煙

晴れて好く時雨にも宜き小濱かな

小學校長、河豚の美味を説くに。

湯の宿に河豚も薬の噂かな

自分が禁酒といふので、酒無しで正銘の歓迎宴会。こんな事は空前で絶後だらうと鴨川町長。(同氏は酒豪を以て鳴る。それが此案は、よくの御好意と感謝)實は時々禁酒を破つてゐる身の恐縮。(二氏の他に有志芳名、次第不同)

山口鶴太郎。松平英。本多東作。齋藤齊。伊藤喜八。木村澤治。伊藤宮吉。草野三郎八諸氏。長崎より小濱へは、先づ茂木港までバス二十分。それより直航汽船約二時間。鐵道にすれば、諫早で乗替へ、愛野で又乗替へ、千々岩から小濱鐵道で(この間直通列車もある)雲仙登りは、小濱が最も好いといふ。海岸の温泉郷、景色はよし、魚類はよし、此所に悠遊を欲したが、然うも成らず、諸氏に感謝して午後二時十分發。

磯つたひ遠去りつゝも振向けば

小濱の里の湯けぶりぞ濃き

疾走、快走、道路の小砂利飛散して、霞の如く車臺を打つ。四時過ぎ歸着。既に中川、雨森、江浪、津田の四氏、揮毫處理に就て御集合。(大部分は東京より揮毫先送)追加の必要ありて早速取掛つた。後援會幹部諸氏の御手数は如何ばかりぞ。並大抵の事にあらず。感激々々。斯う成ると自分には、疲勞も何も無い。勇んで揮毫を進めた。此夜塾友としての鶴田氏を鳴瀧町に訪問して、恩師の追憶を語り合ふ筈。同氏邸、長崎代官の屋敷跡にて、其庭は長崎に珍らしき名園と聞いたが、惜しいかな日暮れて月無し。室内よりの電燈に透して、淡夢の如く見しのみ。

知嘉子夫人、長男義祐君、長女貞子嬢、次男剛彦君、三男雄三君、それ／＼お目に掛つた。恩師の遺墨、美ましままでに多數。思出話盡くる事無し。御鄭重な晚餐を頂く。令息令嬢の詩吟、主人公に次いで自分も先生の聲帯模寫吟。それで辭去した。歸宿、入浴、按摩、盲人にて上手。

長崎の返り初日

三十日、曇。午前九時、新町小學校(校長武富正次氏)片側露天の場所にて講演。それより上長崎小學校、この校長は平山蘆江氏の義弟同姓國三郎氏、十一時より講演。それより、中川代議士と興福寺參詣、當日三百年忌の行はれるに會した。津田山口二氏此所で待合された。圖書館長永山時英氏、同館員増田氏にもお目に掛つた。(興福寺は、俗に南京寺又は赤寺とも云ひ、南京人の建立で、隠元禪師に因縁深し)

朱塗の山門は自分の初めて見る珍らしさ。如何にも支那寺院の感じがした。石段を登つての本堂も、今まで見ぬ建築で、昔からの長崎情調を、此所にも味はひ得た。信者には日本人が多かつた。讀經途中で、中川氏と共に退き、徒歩、繁華な市中に出て、簡単に中食をと、名代の吉宗といふに入つた。輕便に大衆的食事が出来る家。茶碗蒸しに蒸し壽司が定食式。

突然一紳士が「や、これは奇遇で」と名刺を出された。それは舊姓下川今は角田末一氏。陸軍將校で、曾て戸山學校の教官たりし時、學生相撲に戸山の選手を引率して参加された。それは既に二十餘年前。

「新聞で此方へお出でを知り、是非瀬戸町へ来て頂きたいと、お迎へに船で来て、今着いて取りあ

へず中食。それからお宿へ伺ふ處』とあり。誠に奇遇。併し、日程上如何とも仕難く、後遊の期に願ふの他なく、甚だ遺憾。

午後一時より小島小學校（校長永田貞美氏）この校の講演を終つて、津田山口二氏と合し、唐八景の遊園地へドライブ。長崎灣外の展望絶佳。遠く五島列島。近くは高島、それに續いて大軍艦一隻、と見たのは端島炭坑。翌日は彼島に渡る筈。（その他記すべき事もあれど、矢張要塞地とて、ノートに取れず）それに雲仙大觀の直後では、感じが鈍し。引返して、市内今籠町の崇福寺を訪うた。支那寺中の最も代表的なのは此所だとか。唐風の樓門は確かに美觀。子供の時に見た國性爺の芝居に、錦祥女の昇つてゐる舞臺面が思ひ出された。特別保護の指定は當然。（この他の建物にも）左手の石段を登ると又唐門がある。赤門とも呼ぶ。右に行くと、支那から切組んで來た特異建物、八間四方の大雄寶殿がある。この他天王殿、媽祖堂、開山堂、鐘鼓樓等、いづれも自分の眼には珍らしい建築様式。異國情調として感得された。殊に珍らしいのは大釜で、口径六尺一寸一分、深さ五尺七寸、重量千九百六十五斤。一度に米四石二斗を炊き得られる。天和の飢饉に、千杲和尚が、私財を抛つて鑄造。行脚して米穀を集め、施粥をしたといふ。貴とし。今は日支の關係面白からず、支那人多く去り、寺の經濟振はずと聞く。

此所より、新地、出島方面を廻つて、歸宿（出島を埋立地で型無しにした賢明さを、遠慮なく罵倒さして頂きたい）これで飛々ながら長崎見物を終つたわけだ（出發前に永見君が、忙しいと云つて、或る事件で拙者を手紙で吐りつけた後から、それを忘れた様に長崎めぐりの案内書を、細細と送られた好意は感謝するが、いろ／＼の都合で其通りにも行き難ねた。又叱られるか）

店舗の飾りや、その店頭の器物や（大きな甕の如き）それ等が關東人の眼には皆異様に感じられる。更に道路の敷石は舗装道路の元祖とも思はれ、それが又凸凹少なく、巧く敷かれてゐるのにも敬服されたが、これ等がいつまで保存されてゐるかは疑問。

四時頃から、三菱商事株式會社支店、一般には炭鑛社と呼ぶ、その有志に招かれて文藝講演。支店長時枝薫氏、次席中山吉太郎氏、日本郵船支店長奥野敏郎氏等にお目に掛つた。紹介辭を述べられた山口薫氏は、なか／＼文學通であつた。

歸宿、鶴田氏其他來訪。揮毫。夕飯に豚の角煮。先日來、後援會の注意で、宿では主として野菜物。併し、長崎に來て豚の角煮を（東坡肉）食べぬのは遺憾なので、特に注文。それから間食は絶體にせぬ主義も、長崎でカステラを食べぬのは、土地に敬意を缺ぐ様な氣もして、カステラ本舗、船大工町殿村氏のを食べた。

先遊の時、足立半顔の紹介で、藤瀬臨笑氏と知つた。健在と聞き、東濱町の吳服店に訪はんとして、得なかつた。もう大分の老齡であらう。

南蠻井戸の怪

三十一日、晴、志賀氏の案内で、午前九時から女子師範學校附屬小學校。主事田中得三氏。師範にある郷土史料の參考室を見せて頂く。珍らしい物多し。師範校長高柳竹四郎氏、同教諭森壽美衛氏、同志村二郎氏、女子師範訓導田崎辰夫氏等にお目に掛つた。

十一時よりは西坂小學校（校長川崎政太氏）生徒の爲に本蓮寺本堂にて講演。日蓮宗本山、昔は

十萬石の格式、山門は立派であるが、石段の高いのに参つた。天正の頃、切支丹の寺院サンジュアンバプチスタ（三壽庵と宛字）があつたのを、破却した跡といふ。この寺に板戸二枚、それに南蠻婦人を油繪具で、日本繪風に畫いたのがある。筆者不明。その婦人の眼を潰してあるのは、夜光るので恐しがり、小僧がやつた悪戯とは、惜しむべし。

更に當寺には、南蠻井戸といふのがある。南蠻人が掘つたとも云ひ、切支丹宗徒を投げ込んで殺したとも、同宗教具を投棄したとも傳へられる。若僧の案内で見た。方丈と庫裡との間の小庭の一部にあり。今は石で蓋ひ、密封されて、苔のみ青し。その見える四疊半の一室は、寝返りの間と呼び、此室に寝ると、いつの間にもやら、逆さにされてゐるとの傳説。

『井戸の中には、水の流れる音が聴えます。暗渠が海岸まで通じてゐるといふ説もあります。梅雨時分には音響を高めます。それから、この室にお化が出るよと云ひますが、そんな事は決して有りません。けれども、此室に寝ると、必らず病人に成るのは事實です。私を知つてからも二三人、先年も一人發病しましたので、今では誰も寝ない事にしました』と若僧は説明した。

女生徒さん達も多數、室内に充ちて、井戸を見てゐたので。

『悪い病氣の微菌が遺つてゐるかも知れませんが、早く彼方へ』と自分は注意した。

お化よりも微菌を恐れるほど、子供さんの智識は進んでゐて、我先にと走つて出られた。

『いや、消毒がしてありますから』と若僧不機嫌。

一旦歸宿。既に雨森、中川、鶴田、藤森諸氏來宿。第一回の御清算を得た。直ちに安田銀行からデンカワ。何から何まで御手敷を掛けて恐縮。(長崎で探しを樂しみにしてゐたが、迎も其隙間な

し。幸、中川氏の御紹介で、數枚を得た。掃寄せ象嵌に定紋を小さく散らしたのは一寸珍品)

浦上方面の山里小學校(校長高島貞末氏)今までに珍らしき鐵筋コンクリートのモダン建築。屋上の展望佳し。道田學務課長、來校。此所から同氏と共に三時發にて、端島行の筈が、五時に延びたので、一先づ歸宿。雨森、中川二先生の邸に、御挨拶廻り。それから髯剃りに行く時間を得た。

以上で長崎行脚を無事終了。自分が忙しかつたとか、疲勞したとか、そんな勝手な事を云つてゐられるものか。發起人賛助人其他諸氏の御好意、御多用の中を老行脚の爲に裂かれて、殊に俳畫額布の爲には、最も御迷惑を掛けて、若も其間に、御招宴やら、御案内やら、御説明やら、なか／＼一通りや二通りの御配慮にあらず。雨森先生、鶴田氏、津田氏、三菱方面御紹介の江浪氏、學校方面御紹介の道田氏、更に縣人會を代表して中川代議士が、徹頭徹尾、微細な點まで御世話下さつて唯感激の二字では迎も盡し得ない。併し是は、同縣人として自分を後援されたばかりでなく、中川氏初め岡山縣人は、又一方長崎市民として、第二の郷土愛から出發して、この老行脚に、長崎紹介を希望されたといふ、この二重の誠意を忘れては成らぬのである。

(これまでに記載諸氏の他に、御後援下さつた方の芳名を、次第不同、敬稱略にて左に)

元良信太郎。緒方大象。竹内清。影浦尙視。三村哲夫。殿村政次。殿村史郎。城島勝助。玉井喬介。鈴木信太郎。木内豊昭。吉永加次夫。奥平定夫。上野初太郎。佐藤光重。中山吉太郎。帶屋善三郎。海江田純。二枝貞次郎。品川百樹。佐藤嘉久雄。赤松貫二。岡良。椿原康道。藤木喜平。鶴田秀雄。中村強雄。嵯峨根兵治。原萬里。野口常治。陣内惣三郎。石井豊七郎。村岡文之助。小松嘉四郎。平島新。神近昌二。柳原俊太郎。猪平源太郎。穴戸千穎。長谷川規矩雄。井本加三郎。下川龍爾。織田慧一郎。大石榮三郎。辛島昌雄。神田荒太郎。

廣井新太郎。高尾克巳。田浦數男。安江好治。中村賢之助。吉村定。板坂定。渡邊繁人。林秀猛。内山經政。淺田一。高木純五郎。千住雄造。内藤達男。金子一狼。脇山勘助。和仁勇。石田久市。真方亨一。山野邊寅雄。小林秀一郎。藤川秀彦。吉田鐵市。村里常一。高木彌三郎。馬場元治。富田雅治。塚本敬三郎。屋代最房。杉本喜一。寺田昌雄。今宮武雄。荒木秀雄。藤井義一郎。岡田壽吉。横田素一郎。北條春光。原要の諸氏。

端島の十二夜

長崎港外の高島炭坑は知られ過ぎてゐる。其同じ三菱經營で、近きに端島があるのも亦有名。眞の孤島で、殆ど一木一草なく、岩石のみで海中に屹立。周圍僅かに十一町餘。然も炭坑は海庭一千餘尺の下に及んで、逆も不思議な存在。先年鹿兒島歸りに、船上から遠望。昨日唐八景からは軍艦と誤認した。それへ行つて一泊と成つた。道田學務課長が、退廳後から明朝の出勤前までの一夜を利用して、視察を兼ね、自分の案内をされるのであつた。同島からは横田登氏が迎へに來られた。炭鑛社脇の棧橋から、代船むらさめ丸（六十噸）五時二十分に解纜（平素は夕顔丸）

端島炭坑の發見は數百年前。肥前平戸領の五平太といふのが高島を採掘。それと同時代で、明治初年、佐賀藩の手から、同二十三年三菱經營に移つた。第四まで豎坑を掘鑿。昭和六年には第二豎坑を二千餘尺まで延長に着手。

岩石のみの一孤島を、更に石垣や混合土で、築き直して、その狹隘の岩島は、立體的に伸びて、鐵筋混合土の九階建其他の建築で、殆ど餘地なく、社員従業員其家族、それを目的の商

人達が、アパート式に居住。巍然として天に聳ゆる新捲機械が、遠望すると軍艦の大煙突かの如く見え。島全體が上甲板、金比羅神社のある山頂が、司令塔に當るのである。正に平和的大浮城。

長崎から端島まで海上約九哩。灣口の風景も凡ならず。高鉾島、四郎島、蔭ノ尾島、香燒島を左に、伊王、沖の二島を右に、大中瀬戸を越す頃から、そろ／＼日は落ちて、前面高島の燈光が目に着いた。それに舊曆九月十三夜、嗚呼今宵は後の月が、老行脚の前途を照らすべく、野母半島の方から昇りかけた。

佳景はその月のみにあらずして、珍らしい浮雲が、空の一部に圖案化されてゐる。俗にいふ鬨雲、それが月光で鮮明。芝居の海賊が着る衣裳、銀繡、蜻絞りの筒袖を、天の一方に擴げて見せた。その金色の大鈕一ツ、それが十三夜の月であつた——以上は強て奇抜な形容をするのではなく、自然に浮んだ瞬間の直感。

やがて、高島に寄港。舳で數名下船。二子島、今は地つゞき、夜見れば電燈つゞき。それから二哩で端島。既に龍宮城の如く々建築の電燈が輝き渡り、海上デパートかとも疑はれた。その上の方に一大電燈が、マスト高く點じられてゐる、と見たのは、宵の明星の光錠で、太白月よりも明かなる事、天草灘上だけに、山陽の詩を思はしめた。宵の明星、十三夜の月、漁火か、不知火か、それに電燈飾の調和は不自然ながら、能くも斯く揃つたものだ。嗚呼自分は實に幸福だ。讀者に早く報告したいと、詩感動搖。船體又動搖。

六時四十五分、端島着。忽ち筋骨逞しき壯漢二人、事業服も異様に、自分の手を左右から取つて、

動搖の聲から棧橋へ引揚げられた。海賊の根據地へ捕虜と成つて来たといふ、一寸然ういふグロ味を覚えて、自分の傳奇趣味を満足させた。

勿論電燈は晝の如く點いてゐた。そこに、庶務課長松見多藏氏が出迎はれてゐた。巖窟王の投じられたモン・クリストの牢獄の入口か。失禮だが第一印象。石門を入ると、番所風の事務所。そこから既に棧道と成り、爪先登り。左手に近江の三上山を七巻半巻いたといふ大百足の怪物の如き大鐵管。それは坑内への通風管だといふ。この棧道は、蠟燭堂の階段式に、幾曲りもしてゐる。上方から、突然、頭部を爛々と光らしてゐる一目入道の怪物の群が、急ぎ足で降つて来る。それは地下労働の坑夫の更迭で、携帶電燈を、額に付けてゐるのと知れた。これは魚の冠を着けた龍宮の一族と、お伽式に見立てるのが好いとも考へた。

段々高く登つて、三越白木の大デパート以上、九階もある大建築を、眼下に俯瞰するまでに至つた。映畫で見た事のある古代ギリシャの怪奇術を、いつしか彷徨の氣持もした。やがて日本建築三階の、端島クラブ樓上に安着。更に怪奇なのは、後から上げられた荷物が先に届いてゐた。(近路があるらしかつた。但し急峻なのであらう)

別室で晚餐を頂いた。高島鑛業所副長にして端島所長たる小川圓藏氏、其他諸氏にお目に掛つた。此クラブには、玉突其他文化設備行届いてゐた。大廣間でクラブ員諸氏に講演(従業員の大多數を收容するクラブや劇場は、別に有る)小川、牟田、古賀、横田の四夫人も見えた。

孤島へ来たのだといふ感じと、孤島に永住してゐられる人々に對するのだといふ感じとで、非常に落着いて、シンミリと話を聽いて頂ける。いくら長くても退屈はされまいといふ様な第六感で、

悠々と明治文壇史を語り出した。道田氏は既に聽かれたのであるから、同氏には初耳の逸話をも數加へた。終つてから夫人達に「水陰の娘」を贈呈した。

別室で揮毫及び座談。後援の方々は(次第不同)

牟田春一。勝俣英。川口繁藏。尾形辰雄。犬甘佃。小川圓藏。大平義光。森野良太郎。松見多藏。横田登。古賀文男。伊藤萬平。本田伊勢松諸氏。

座談の間に耳珍らしかつた二三。

素人考へでは、こんな孤島で、海底千餘尺も掘下げてゐると、忽ち海水が浸入しさうに思はれるが、そんな心配は絶體に無い事。◆清水を海水から取る。その蒸溜の結果、多量の鹽を複産する事。◆島内は、人心極めて穩和で、坑夫なども昔の如き荒い氣分はなく、主義者が來ても、救護救濟機關が整備してゐるので、爪も立たぬとか。◆坑夫の中には、二三代つゞきのがあり。島で産れて島で死ぬ。神社、學校、寺院、劇場、料理店まである等、正に洋上の理想境。現實の極樂島。

散會後、近き浴場に行き、快浴。クラブ一室に道田氏と枕を並べて寝た。誠に不思議な縁で、信州の山の中で初めて逢ひ、今九州の孤島で、斯うして何彼と配慮を得た。二時頃に目が覺めた。十三夜の月は高く、孤島の眞上にあり。

懸け得ずや岩の端島に後の月

翌日は曉六時に出發して、一旦長崎に上り。直ちにタクシーを飛ばして、諫早に行き、有志の案内で、多良嶽探勝。それから湯江と諫早とで講演といふ日程。島から山へ、山から村へ、村から町

へ、それを一日で強行。正に記録破りの捨身の荒行、その第一歩たる乗船に遅れては、後が混乱の一大事と、碌々眠りを成し難し。

多良嶽を紹介す

十一月一日、午前五時半に起きた。六時の食事も、気が氣でなかつたが、出船七時に延びたと知れて、それなら其つもりで一眠りしたものと悔むた。夜が明けて見ると、昨夜の怪奇気分は消えて、文化島の明るさを認め得た。出船待つ間の所見。

炭屑カクに何をあさるや岩燕

七時十五分、諸氏の見送りを謝し、端島の隆盛を祝し、竹島丸といふのに乗つた。二子島に寄り又高島に寄り、八時四十五分に長崎着。波止場には島越氏、タクシーで待ち構へてゐた。豫定より一時間餘も遅れたので、今日切詰の超特急日程、既に大狂ひ。道田氏は急ぎ出勤。自分は見送の横田氏と一先づ福島屋。此所には、中川雨森津田太田藤森諸氏待合され、第二回の清算。これで全部を頂き、難有し。福島屋よりは饒別か、茶代返しか、鼈甲細工の帯止其他を贈られた。この忙しさにも、亡き娘が存命ならと、ホロリ。

待たせた自動車で直ぐ諫早へ、と成つて、其待たせたのを横田氏が間違へて乗つて歸つたと知れて、別に又頼むなど、これで又遅れた。

諸氏に慌だしく訣別。中川藤森二氏同乗。未だ見足らぬ長崎の市街に名残を惜しみつゝ、例の雲仙道路を疾走。十時に諫早に着いて見ると、驛近き西山邸門前に、リニークサツク、ストツク等、勇

ましいい登山支度で、數十名待構へてゐられた。それは記者團其他有志、多良嶽觀楓團を組織、それをわざ／＼延期して、今日自分の歓迎を兼ねられるといふ。難有し。

多良嶽は、雲仙嶽と相對峙せる名峯。その奇勝は、雲仙よりも豊富。その展望は、普賢よりも雄大との事。標高一千二百米突（休火山）長崎佐賀二縣に跨り、西面が大村灣、東面が有明灣、其間に挟まつて聳立。『肥前風土記』には託羅之峯に作るとか。寶永三年稿の金泉密寺縁起には、太良嶽とあり。或は又舊名修多羅、和銅の昔、行基此所に三尊の聖軀を造つて安置云々。水蔭考ふるに、修多羅とは、呪陀羅尼の誤記か。或は陀羅尼を修すの意か。かゝる考證は水蔭不得意。

茲に諫早町會議員にして諫早自動車會社長其他關係の西山賢三郎氏、獵遊から數々登山。その森林の原始的なる、その溪谷の神秘的なる、隠れたる瀑布多く、知られざる岩窟少からぬを、度毎に發見。加之山嶺の大觀は、雲仙よりも亦別天地を綜合。これを洽く天下に知らしめたいと、郷土愛に出發し、私財を散じて宣傳に他意あらず。

その愛郷の誠意から、自分の登山につきては、有らゆる準備を整へた。其一例を挙げれば、自動車の背後に棚を假設し、新調の山駕を載せて待たれた。車の行ける處まで行き、それからは駕で、山上へ是非とも擔ぎ上げるといふ意氣。雲仙で命賭の登山に懲りてゐるが、騎虎の勢、記念撮影の後、四臺の自動車を聯ねて出發。（中川氏は殘留）

然るに、その道路たるや、自動車の處女地帯、行く可らざるを行くので、猛烈に上下動して、身の軽い老行脚は、さながら蟹江翁發明の紙風船遊戯の有様。盲腸舊患部にズシン／＼と響きて、辻

もく耐え難し。

「この道路は、今に良くなりませんが、今度は沿道の有志が、特に先生の御通過と聽いて、應急修繕をしたわけです」と西山氏の説明。それに對して、我慢に我慢を重ねて、遂に自動車の手臺の方が我慢の出来ぬ地點にまで達した。四本松と云ひ、高原無人の地。松四本、山の有志數名、出迎へられてゐた。これからいよいよ駕と成つた。その駕擔ぎの志願者が多いので、抽籤で来て、光榮として待つてゐるといふ。いよいよ恐縮。既に十一時を過ぎてゐた。

扱て前途は、と見ると、遙かに遠く山岳が連つてゐて（寫眞参照）そこまで行くには夜に入るのは一目瞭然。それから下山しては湯江と諫早との講演が丸潰れ。分り切つた時間の問題を、全然超越して、唯只老行脚を、山上へ擔ぎ上げさへすればよいといふプログラム。愛山の至誠からしても、それでは一方に相濟まぬ。

そればかりでもなく、天候も不良に向ひ、持病も勃發の虞れあり。斷然御免蒙る事にして、諸氏には藤森氏より中止を發表。自分も謝罪的挨拶。遺憾がられる記者團及び有志諸氏とは、此所でお別れした。但し、この四本松からして、東西に兩灣を振分けの展望、その壯觀には接し得た。

次第不同——米倉圓通氏（島原毎日）前川和治氏（大毎）内田一穂氏（諫早）溝口直樹氏（長崎）川副末松氏（日本曙）等。西山氏令弟北村文四郎氏先頭に立つて登山。

こちらは記念撮影の後（挿畫参照）西山藤森二氏と共に下山。諫早町新橋側の水月樓に入った。諫早名所眼鏡橋の架る（長崎のより時代は若い、大きい）本明川に枕み、立派な建築で、用材も間取も、九州的の堂々さが見え、設備も亦行届いてゐた。此所で中食（此所までにして昭和八年十二



多羅嶽と探勝隊

月三十一日午後五時書き納む

（昭和九年一月元旦午前四時書き始める）
後日、西山北村二氏よりの報告に従ふと、登山隊は峠を一つ越すと、全溪全山火焰の如き紅葉の盛りに感嘆せめて此所まで来てほしかつたと、惜しまぬ人無く、更に片木の山村に入つて（平家の落武者の隠棲した處で、ヘイケが今は轉訛してヘキと成り、片木の字を用ゆ）更に驚嘆。それは全村の人が（と云つても十六戸）盛装して出迎へ、新築の家に一行を招待。然るに水陰來らずと知りて、失望落膽。昨日非常報知の太鼓を打ち、村の軍人青年二會員の他に、老人も、婦人も、少年少女まで狩集めて、東京の文士が此土地を紹介してくれる爲に、考體ながら、わざ／＼

来て下さる。それに就て皆歓迎の準備をせよと、それ／＼手分け、道普籍をして、自動車を通すのは勿論、山上まで駕で行くのには、萱や芒の穂で、路をふさぎ、駕が通れぬと不都合と、鎌を手に／＼草刈りまでした。今日は山中とて、別に御馳走もないが、家鶏を割き、山芋を煮て、御老人に精氣を付けて頂くつもり。床の間に御神酒を供へ、最初に東京の先生様に献じ、その盃のお流れを、村中で頂戴する手筈までしてゐた。それが見えぬとは何んたら早や残念など云つた調子。實に純朴の情は太古に似てゐる。先方では水蔭を神様扱ひにして待つたのだが、水蔭としては村の人々が皆神様。それ位なら、責めて片木まで行つたものと悔ゐた。恐らく水蔭一生の逸話と思ふ。難有し、難有し。

出来得るならば、湯江村講演の前、そちらの登山口から多良嶽の途中まで自動車、更に駕で、轟の瀧のあたりまでは行つて貰ひたしと、西山氏の懇望。それをも断はり切れず、水月樓を發して、自動車を湯江村に飛ばした。既に雨が降つてゐた。道路は良好（鐵道も近く開通の準備中）長田、深海、小江と、有明灣を右に、多良山麓を左に疾走。湯江着。小學校にて休憩。校長川浪猶三氏から聞くに、村長田島三八氏は、村の有力家数名と共に、山上まで出迎へに行かれたといふ。喰ひ違ひて相濟まず。臨時駕かき人夫を集め、自動車二臺に米倉氏其他有志と、新道路を、山中に向つて進む。溪流を高所より見つゝ九十九折を行く。此邊既に凡景に非ず。いよ／＼下車。駕に乗るに、屋根覆ひ無し。道行の上に夏外套、其上に頭から毛布を冠つて、それで洋傘をさした。連も珍妙な圖。

山時雨屋根無し駕の恨みかな

西山氏命名の龍飛峽といふのに入つた。石から石へ飛んで、溪流を越す人々、徒歩なればこそ好けれ。こちらは息杖の用意さへなき臨時駕かき殿、それを越す足下の危さ。但し、瀬淺ければ、落ちても命に別條無しとして、唯、濡鼠の冷めたさを思へば、戦々兢兢たらざるを得ず。坂と云ひても岩と岩との重なり合ふなり。路とても有りや無しや。風に委せた山葡萄の蔓に行手を横切られ、雨に垂れる枯尾花の穂に、兩側から埋められて、それを押分けてゆく先棒の苦心も一方ならず。山駕の底は岩頭の苔を擦り剥がし、洋傘の尖は倒樹の枝に引き懸り、其爲に行進遅々。併し一木一石都會人の目を驚かさざるは無し。斷崖絶壁、老茂樹に包まれ、包み切れぬ處の岩石は奇形怪狀。巨溪細谷、處女林を以て充填されて、岩隈、樹間、處々の楓紅葉。その色の鮮かなる、未だ曾て見ぬ色彩濃厚。難路駕で行くの安樂さで、之を悠々観て過ぐるは、勿體無きに相違なけれど、何分にも雨は益々降り連り、洋傘の柄を漏り、毛布の襟から濡れ、二重の外套も覺束なし。

見越しの瀧といふを見越して、猶溪谷の奥深く、次第々々に登つて行つた。段々暗く成る氣がした。寒さは肌に迫つた。山谷川の水の出の迅速さを知れば、歸路を絶たれる用意も考へなければ成らぬ。景色は深入りするほど佳くなるが、暮色はそれだけ又迫つて来る。それを先頭の西山氏は、成るべく奥まで深入りさせ様と急ぎゆけど、駕それに伴はず。

やがて轟の瀧に到達した。正面岩壁に懸る大幅の白布は、深潭に落下して忽ち綠青に染め變り、點々紅葉の模様を浮べてゐる。これが晴天ならば、これが夏期ならば、これが急がぬ旅ならば、嘸や。けれども既に湯江には講演來聴者の集合があるのを、餘りに待たせて相濟まず。夜に入つては松明無しで、駕の下山の危険さも考へざる可らず。最少し上までといふ西山氏に叛き。

未見未聞時雨轟く瀧の下

自分としては近來の佳吟。これを遺して下山。途中より既に暗し。小學校に戻つて六時より講演。聴衆は一二里先からも集まつて、三時間も待つてゐるといふ。其熱心さに對して感謝。

僅かに其片鱗を見たゞけで、龍飛峽の美を説く資格は無いけれど、諸君が對象として野馬溪を相手にするならば、それは自からを卑しめるもの。若しそれ山嶺の大觀に至つては、雲仙に譲らざるものあらむ。か、なれど、設備完成に至らずして、空宣傳で早く觀覽客を呼ばうとするのは、採らぬ。急がず、焦らず、實力本位で、徐々に開發を計られたい。

之を前提として、いつもの持論。それも既に諫早の方から、電話で急かれてゐるので、遺憾ながら短か、切上げた。(後にての評を北村氏聴きての報告に——三四時間も待つたゞけの甲斐のあつた堂々たる講演だつた。併し、どうも短かつたといふのと、能くわからなかつたといふのと、二説有つたとか)

直ぐ自動車を飛ばさうとしたが、二階の控室に荷物があり、電燈無き爲、取りに行つた人、暗中を探つて手間取つたのも惜しまれた。それ程にして諫早へ疾走。既に八時、小學校講堂には入場者二三百待つてゐた。(満員に至らず)町と教育會と小學校との主催。中川代議士待つてゐられた。町長土橋瀧平氏、中學校長坂井春彦氏、女學校長梅田廣治氏、小學校長長島重治氏等に名刺を頂く。(他は得ず)

夕食を攝る間もなし。空腹は勿論なれど、生玉子一箇服みたくても、その用意もなし。ペコ／＼にて登壇。主催者側の発表には『時局に對する國民の覺悟』といふ様な酷く難かしい題であつた。

これでは——常識本位で平凡の眞理を、通俗的に説く趣味講演。笑つて頂いて其間に何物かを——といふ自分の特殊の技術を了解無く、普通一般の思想善導屋流の講師達と、同格に取扱はれたので、或は光榮かも知れないが、困る。と云つて本格の講演だつて出来ない譯でもないで、最初には眞劍に時局にも觸れてから、それから得意の國技談。その爲に長講二時間に近く、降壇したら目が眩んで、倒れさうにまで成つた。曉起、孤島を發し、雨中登嶽、既に一講して夜間長驅。夕飯を喫せずして二時間の長講。これが一日の仕事であつた。この捨身の荒行に成功して、實に愉快であつた。去年の夏、佐渡海濱寺の、あんな坂で泣いたのから考へると、健康も恢復し、又順境にも向つた所爲か。それも各後援者のお蔭だ。全集々々、好材料が取れ過ぎたと、自から慰めて水月樓。漸く十時近くに夕食。中川代議士は歸瓊。藤森氏と共に一泊。按摩。

島原に泊りて

二日、晴。午前、大村より岡崎正氏來り、今日より藤森氏に代りて、縣人會を代表し、島原から大村までを受持つて、世話下さるのであつた。氏は別して親切。能く注意行届く。但し岡山言葉を丸出しに用ゐるので、自分も釣り込まれた。北村氏來訪。昨夜下山。湯江を経て歸られたので、いろ／＼報告。(前項参照)

十時三十分、諫早驛發。藤森氏とは此所でお別れした。長崎から雲仙、小濱、すべて後援の繁務に當られて、感激の至り。深謝した。

途中、有明灣の干瀉に、半圓形の小石垣が、幾ヶ所にもあり。これは「すくひ」と稱する極めて

原始的漁場の由。潮の干満の差の極度なるを利用して、海中に石垣、そこだけ海水の遺溜してゐる中に、魚族が引き残されてゐるのを、手網で掬つて取るのだとは、珍らし。主に、ボラ、スマキの類といふ。島原驛零時二十分に着。島原中學校長牧秀賢氏、島原商業學校長大久保源一氏、島原町助役松本義兼氏、西山賢三郎氏（島鐵へ毎日諫早から通勤）岡山縣人會よりは醫學博士岡本秀次氏齒科醫學士福武敬止氏、其他出迎はれてゐた。

直ちに自動車にて島原高等女學校に行き、早速晝餐の御厄介に成つた。それより講演。大久保校長が自分を紹介の前に、生徒に對する森嚴な態度は、自から襟を正された。校内、女生徒の手に掛けた菊花の陳列は、ゆかしかつた。この校は島原古城趾の濠端に接してゐた。それにつゞきて小學校、その又つゞきが中學校、近いので徒歩にて中學校。稀に見るモダン建築であつた。校長牧氏が中川氏の紹介で、島原方面の後援萬事御配慮。難有し。此所には元代議士にして今は島原鐵道會社社長たる植木元太郎翁が、同社の運輸課長原口千春氏と共に來聽された。小學校高等生を率ゐて、校長林銑吉氏も同様。終つて四階上の露臺に立ち、眉山、雲仙を背面に、有明灣を前面に、然うして林小學校長から島原城の地理的説明を受けた。

更に自動車にて、牧、林二校長の東道。町の北方鐵道線路に近き、沖田畷の古戰場に向つた。それは天正十二年三月二十四日、龍造寺隆信、鍋島直茂等五萬七千餘騎と、島津家久、有馬晴信等八千餘騎との大會戰の有つた處。

大兵を擁しながら、地の理を得なかつた龍造寺方に對し、寡兵を以て決死の奇襲に、島津方が大勝を博した。その亂軍中に隆信は戰死。この遺跡が畑の中に、二本木様と稱する宮と成

つて存してゐる。そこへ導かれて、林氏から委しく、當時の戰況の説明を得た。

いきなり隆信の足を斬つた某に對し、汝、大將と一騎討の禮を知るやと、隆信が一喝したとか。以後某の家には、代々足部に祟られるといふ。近年三百五十年祭を舉行した時に、その某の遺族が來て、素より迷信の非なるは知るが、偶然にもせよ、事實に於て、今猶足部に故障が生じるので、この年祭を劃して、どうか祟られぬ様に願ひたいと、參拜に來た云々。

遇然と云へば、その二本木の宮の前で、蟻螂の力なく這ふのを見出して。

古戰場に猶蟻螂の圖志かな

それより引返して、元の森岳にある島原古城趾に登つた。（元和四年松倉重政が、江戸城に模して築く。日暮しの城とも云つた。例の天草一揆、島原之亂當時、當城は原城に對して、重要な位置を占めた事は、説くまでもない。當時禁制切支丹教徒に對して、鑿殺的嚴罰に處したのが、餘りに度を越した事は認めるが、又一方に於て、國禁に反抗の徒の、餘りに極端であつたのを、決して賞賛は成し得られぬ。それを今日に於ても、切支丹迫害云々の文字で往々記載。自分として取らぬ。迫害ではない、所刑である、討伐である。外人のキリスト教徒側から云へば、迫害かも知れぬが、當時の事情から見れば當然の行動である。苟くも日本人として、日本の國法に従はなかつた罪人方に、同情を寄せ過ぎるのは、面白く無いと思ふ。（但し、所刑過酷といふ點に、同情を寄せるのは別問題）

内城の石垣は、立派に保存されてゐた。が、之は私人數名の所有なので、何時分割破壊されるか分らぬといふ。今にして何とか成らぬものか。

此所から白土の湖水（寛政噴火に生じた泉池）それから流出する音無川など一見。靈丘公園脇の南風樓に入った。和風新建築で、設備完全、樓上の眺望絶佳。豫て噂には聞いてゐたが、悉く承認された。

東方有明灣を越して、金峯山、二の岳、三の岳を遠望。その先が熊本方面とか。佐渡赤泊から、越後の彌彦角田二山を望むのと、共通の點が見出された。加之それよりも此方が佳景に富み、右手寄りの磯近く、九十九島的一端が見えるやら、夜に入つて湊口の灯が海に映じるなど、小技巧さへ添えられてゐる。

この夜、此所で歓迎會。それまで時間があるので、宿の若主人に案内を乞ひ、自動車で古道具屋廻り（切支丹關係物は、贋物の逆輸入が多く、先づ買はぬが好し）駄鏝を十數枚の他に、臺附燈明皿の奇形（當地では普通であらうが）二箇を求めた。

満月が對岸三の岳の肩からセリ上つて、有明灣は忽ち金波銀波。折しも満潮。

島原の南風樓は満點や

満潮満月更に満足

（以上、元日午後五時までに）

別席大廣間にて歓迎宴は開かれた。御芳志に感謝。

（次第不同）原口千秋。牧秀賢。林銑吉。大久保源一。猪原辰十郎。松本義兼。山本千里。

富谷公民。松田吉之助。柴田七太郎。福武敬止。岡本秀次諸氏。

牧校長の歡迎辭の最後に——粗酒粗肴の他に、顔は醜いが心の美しい島原藝妓が、お酌の爲に席

へ侍ります——然るに現はれた若駒、小妻の二妓。心の中はわからぬが、顔も美しく、動作もしとやかにて、これも満點。自分は御挨拶に次ぎて相撲漫談。

數々の御馳走の中にて、此家の誇りとしてゐる鯛の兜蒸し結構。天ぶらも鰾が新らしくて好し。（鰾は東京へ盛んに輸出。併し氷詰では味が違ふ）モズコも名産の由。

勿論禁酒の爲、早く退席。入浴。満月満潮に寝て就寝。

三日、晴。未だ有明の月と見しは日の出。この壯觀も亦南風樓なればこそ。朝湯に入る。朝食後揮毫。昨夜の諸氏の他に、植木社長、原口氏等來訪。植木翁は本年喜壽。その銅壽像は、先年靈丘公園に建立。目出度き事なり。不折畫伯の東方朔の半折を示され、それに對して、自分にも壽老人の繪を、と乞はれて、不折さんは畫家でありながら、餘技の書道でも氣を吐いてゐられる。その虚を突いて、こちらも餘技の繪で對するも妙か。壽老人は幸にも、先年別府で實演してゐるので、形も知了。大膽にも揮毫。

受持の女中、揮毫の手傳ひ、何彼と能く心づく。漫遊の文墨家を取扱ひ馴れてゐるらし。名を一枝と聽き。

渡り鳥皆一ト枝に縫りけり

牧校長、松田氏等、御配慮にて、意外に申込者多し。深く謝して。

圖らずも島原の秋に老行脚

中食に、多比良蟹、美味。品川のより大きく、但し身はやわらか。

三時出發。植木邸に伺ふ。丘陵上の御靜居。仙家の門に入る心地。時間を急ぎ、一寸御挨拶を述

べて、辭去。大手跡に廻りて菊花大會の陳列を見る。それより鳥鐵本社にて休憩。

日本に於ける鐵道最初の汽關車、イの一號、東京横濱間を最初に往復。それを最近まで使用してゐたとか。今は鐵道局に納まつて、貴重なる参考品と成つてゐる筈。

見送りを得たのは、牧、大久保、山本、松田、福武、岡本、林、原口の諸氏。三時五十二分發。愛野驛通過の際、同地安藤七五氏に、心の中にて敬意を表した。同氏は新聞を見て、わざ／＼長崎まで揮毫の申込をされたのであつた。本諫早驛下車、五時二十八分、西山北村二氏の他に、米倉氏湯江村長田島三八氏等出迎はれた。直ちに西山邸に入つた。

揮毫の中に「金泉寺」と大字で横額、その下に細字で書き入れて。

金色の泉や寺の初日影

更に多良嶽に題して。

稀に見る國の多加良の奇勝かな

郷土の名産を主とした珍味揃ひの御馳走が出た。

◆小鳥賊の煮つけ。◆打牡蠣酢の物。◆鮎鱈。◆鯛の櫻干し。◆剥き鰯。◆あみ鹽辛。◆芋と雉子の薩摩汁。◆茸と豆腐と雉子の汁——その他、諫早おこし、白飴、蜂蜜等。

夫人の行届きたる御饗應に感激。(湯江村長には、講演の短縮を謝罪)厚く御禮申して辭去。自動車を備ひ、大村まで飛ばせる。(汽車あれど、待つがつらし)

湯江村後援者は、山崎宙之。山崎誠八。原口利雄。三角鐵四郎。中濱兵右衛門。川浪猶三。宮本増一。蘆塚末太郎。平山警部補諸氏。及び湯江役場。同小學校。

八時三十分出發。運轉手の細君か、幼兒を抱き助手臺に便乗。途中踏切の度に運轉手注意深く停車。最近遭難頻々につき警戒といふ。或る踏切では、婦人を下車させて、見張りまでさせた。念入りは至極結構。夜の大村町を通り過ぎて、郊外に孤立の常盤館といふ鑛泉宿に着。時に九時十分。岡崎氏は直ちに歸宅。

自分入浴、各地にて芳志を得て、懐中膨脹、それに唯一人寝るので、聊か不安。隣室遅く男の客が來たので、警戒。然るに又後から女が來たので、これで安心はしながらも、喃々の聲に眠れぬなど、神經過敏さ。あさましくも笑止。

大村と佐世保

四日、曇、雨。短時間に大激戦、退校時間までに五校を巡講といふ日程。一ツ狂へば滅茶々々。六時に起床、準備の處へ、六十一歳といふ女將來りて、滔々と能く辯じ、切れ目無し。八時半に岡崎氏、大村中學校教諭志田一夫氏と共に、自動車にて迎へに來られて、大村中學校。校長唐仁原景盛氏。舊著「天津乙女」を記憶さる。難有し。九時に講演。それより大村高等女學校。校長黒田清三郎氏。十時より講演。今度は十一時半より師範學校(老校長にて名刺頂けず)

中食を學生と共に食べよと云はれ、喜んで待つたが、賄方が了解を缺き、御馳走をせねばわるいとでも思つてか、今、魚を買ひに行つてゐるで、ダァー。逆も待つてゐられず。空腹を抱へて、徒歩。附屬小學校で零時半より一席。徒歩、大村小學校と高等國民學校と合併に又一席。こゝで漸く食事。兎に角晝飯抜きで五回の講演。これもレコード。更にレコードは揮毫申込一人も無し。

出羽海親方歸省中と聴き、前以て岡崎氏電話。然るに使の青年來りて、今朝早く釣に出て不在。何か御用があるなら承はりたし云々。別に用は無い。來たから來たと傳へしのみ。よろしくと云つて別れた。雨に自動車を呼び驛へ。

諫早の北村氏、先日からカケ違ひ、未だ一回も自分の講演を聴き得ず。それでわざ／＼大村まで來て、各校を後から／＼追ひかけて、間に合はず。漸く小學校で半分聴いたとあり。熱心家なり、その好意に對して。

嬉しさのそれも涙や村時雨

北村氏に別れ、午後三時五十八分發、岡崎氏と同車。早岐にて下車、タクシーにて佐世保。池月旅館、元の鄙屋。岡崎氏は之にて、自分の任務は終了とて立去られた。誠意に満ちた御案内、感謝。夕食後、足立氏來訪。同氏は、備州藩武家氣質の美點側を、其儘繼がれてゐる人格者で、自分幼時に接した叔父さん達の面影あり。殊に親しまれた。同氏は、さも氣の毒さうに、明日の平戸行成立せず。案内者悉く差支へと語られた。それなら再び入佐の用なかりし也。角田氏の請に應じて瀬戸町へ行くのであつた。これでは「鶴渡越大觀」起稿の件も覺束無しと豫感。

五日、曇。九時過ぎまで熟睡。比良町の福山邸を訪問、不在。理髮。福山氏來訪「大觀」は、書けたら其上で送金する云々。海上から九十九島も、平戸をも見ずして、書け様も無し。揮毫も高橋氏不在にて纏め得ざるも、少々書いて置いて行けとあり。つく／＼人様に御厄介を掛ける事の、心苦しさを感させられた。先方様も亦御迷惑重々。(眞の理解を得ざる土地に乗込むは、止めたいと思つた)

鶴は越せよ雁の亂れは通すまじ

軍港の月方圓の器に寫る

前者は鶴渡越追加吟。後者は軍港のドックを見立たのだ。茶代の心にて宿にも揮毫。然るに主人、池田萬龜男氏、袴を着けて、慇懃に禮に來られて、恐縮。

放浪囊、漂泊板、到る處評判悪く、それに荷も大分軽く成つたので、東京へ先送の荷造り。番頭君に頼み、今は漫遊袋一ツとなつた。四時三十八分發に乗る。見送り無し。

武雄から佐賀へ

大牟田方面は、八重津博士の御紹介で、玉眞重章國手が肝煎ある筈。それは七日よりの日程。その間を自然休養。旅藝人の符牒でトヤにつく也。幸にして御難には非ず。それには武雄温泉にて悠悠入浴と極めて、早岐乗替へ、武雄着。池月よりの電話にて、東洋館より出迎へ自動車。新築にて入口より既に感じ好し。いきなり三階に案内されて、若主婦早速挨拶。

「文士方で、未だ御來泊の御縁が有りません處、よくぞ。こちらが一番眺望がよろしいので」それがどうも足の不自由、願下げにして二階に移つた。(以上二日早曉起稿。夕刻拙筆) 又しても禁酒破り、佐賀の酒にて「窓の梅」といふ由。一寸口當り好けれど、料理之に伴はず。此家まづきに非ずして、今までのが美味過ぎたのか。女中みわ子。これは三勇士の一人北川の隣人にて、同勇士が出征前、每晚入浴を兼ねて、遊びに來てゐたが、十一時を打つとキチンと歸宅したので「十一時米さん」と綽名を付けてゐた云々。味有る話なり。持合せの繪ハガキ、自分が三勇士の俳畫(久留

の三勇士記念館へ、拙畫を寄贈したのを、八重津博士篤志にて複製されたもの（を與えた處、涙を零して喜んだ。然うして北川勇士の出征を見送りに行つたが、同型の兵士多數で、遂に見分け得なかつたと、今猶且つ名残惜し氣。ローマンスも有り氣に聽かれて、老行脚の胸も痛んだ。

秋の夜に語るや湯女も三勇士

女按摩を呼ぶ。年増にて、多少教育あり。男増りの性質。滔々と能く辯じ、交際とあらば敢て辭せず。料理屋へでも、カフェーへでも、どこへでも行つて散財すると大氣焔。

六日、雨、曇。朝、老主婦挨拶に来て、これが又能く辯じる。お茶の水高女の初期卒業生とか。迎も滔々たる者にて、恐縮（誰でも客は恐縮とか）大村常盤館老女將といひ、此所のといひ、昨夜の女按摩といひ、全く恐縮。此邊の婦人は皆おシャベリか。重ねて恐縮。

宿より街路を隔ちて、幾々たる岩山。櫻山公園と云ふ。今は紅葉の盛り。色彩鮮紅にして見事。

山紅葉燃えて沸きけむ湯の武雄

近くに共同大浴場。殿堂式の建築。内湯もあれど、是に行つて見る。二錢、五錢、十五錢と區別。その他に家庭風呂。一日座敷を借りて、それでイクラといふのもありとか。十五錢に入つた。鍍金を沸かすのであつた。

湯場下駄に舗装道路や秋の雨

中食後、出發。茶代廢止であつた。玄關には家人誰も居らず。女中のみ見送つて、驛まで來た。途中にて宅ヘデンカワ。午後一時四十八分發。佐賀驛下車。先づ探偵に松原町大記堂にタクシー、窓飾りの中に珍鐔が一二見えてゐても、主人不在にて要領を得ず。遺憾。引返して唐人町に菊池老

を訪ひ、夫人の配慮を辭退して、うどんを乞ひ、中食。無遠慮に午睡さして貰ひ、再訪を約し（唐津方面の紹介を依頼）六時二十五分、汽車。鳥栖乗替へにつき下車。八重津博士ガソリンカーにて出張の福岡より引返され、今夜又大牟田まで送られる。實に難有しとも難有し。七時十三分發、いろ／＼車中にて報告。久留米通過、大牟田着、八時十九分。驛には玉眞重章國手御夫婦、白仁政吉氏他一名出迎はれた。直ちに有明町の有明館に入つた。空室三間あり。御覽の上、どこでもとて、最初に案内されたのが、奥の下座敷。他は二階といふ。見るに及ばずして此所に極めた。

玉眞國手は、立志傳中の人にして、又傳奇小説中の主人公にも擬せられる人。佛學に通じ、禪門に入り、既に得度とも聽く。故竹貫佳水（直人）の義弟に當るので、特に自分の僞行脚にも後援を快諾。蓋し雲水は國手の方が本物である也。明日よりの課程を聽き、講演はなかなかの激戦。勇躍。八重津博士は十時の汽車にて久留米へ。

大牟田の寒さ

七日、曇。昨夜、寒くて眠れず。今朝いよ／＼寒し（珍らしい變調とか）此室暗く、陽光に接せず。それでも二階を上下するより好し。眞綿を求めて前のと重ねて着ても猶寒し。午前十時、中座劇場にて、大牟田十三校、五年生以上を三回に分ちて講演。第一回は二千百餘名。定刻に遅れた校あり、待つ。又しても此所で「先年巖谷先生の時は、どうもお聲が云々」と脅かされた。佐世保で経験があるので、驚かず。舞臺背景裏に貧弱な火鉢一ツ、寒し。第二小學校長笠間祐嘉氏、それだけから名刺を頂いたきり。他の校長連、一寸挨拶位には來たが、それも二三人に過ぎず。別に有志

として、平島貞治、川口勝太郎二氏より刺を通じられた。斯くて登壇。蟻聲で、一席を終る。後は一時よりなり。其間を白仁氏に導かれて徒歩、大正町二丁目玉眞醫院に一寸挨拶。歸宿。中食。再び中座。今度は二千三百人。定刻に又しても遅れた校あり。背景一ツ隔ちて、舞臺裏に唯一人、消え掛る火鉢で股火をして待つてゐると、客席の方はまるで群雀の囀に入る如き騒音、それを幾百倍も擴聲した如く、或は又、大瀑布の直下に立つ如くに、耳も聾した。

然うだ。瀧の下に喘ぐ落鮎は自分だ。此所まで来た仲間の鱒や鯉や、皆瀧の上に登つたのだ。最近には小波も登つた。更に龍化して天上したのだ。自分だけ未だ瀧壺の渦巻に巻込まれて今に岩角へ鼻面を打付けて死ぬのだ。然ういふ感じがつくつくした。

茶一椀此所には無かつた。賣店へ行き、五十錢出して、茶を持つて来てくれと頼んで置いた。やがて、賣店の女が、茶道具を持つて来て、金を返しながら。

「又やるですか。キツカ御座んすの」と云つて去つた。

二回目は花道から舞臺まで兒童は詰つた。三回目は三時からのので、筋向側の理髮店に行き、髻剃り。今度は高等科二千二百名。數は前二回より少ないが、體格が大きいので、超満員。舞臺の背景が弾切れさうにまで詰つて、登壇の道が無いのに困つた。ハネてからの劇場外の光景には驚かれた。少年少女の大潮流が街頭に澎湃として、電車も留り、普通人の通行も一時遮断された。これだけの人が能く場内に詰つてゐた。若もそれが皆自分の話を聴いてゐてくれたのだと思ふと、幼稚な誇りと共に感激した。(左側勵行が極度に實現されてゐた)

これで兎に角十三校六千七八百の兒童に講演を終了。(大牟田市は、海に於て潮の干満の差が激し

い如く、陸に於て貧富の隔絶が甚だしく、従つて小學校の地理的關係で、生徒の優良不良、これが著しいと聞いた)宿へ、市の書記、梶原好太郎原秀實二人來訪。

夜は市主催、一般聴衆への講演。四たび中座に通つた。市視學織田百坪氏開會辭。聴衆は知識階級多く、夫人令嬢連も少からず。それに青年訓練所の若者達を合せて四百内外。趣味とか、文藝とか、然ういふ方面に缺陷のある物質都市大牟田としては、先づ盛會の部。

玉眞白仁二氏、それに三池中學教諭立花徳氏と、徒歩歸宿。玉眞夫人來訪。産み立ての玉子と、自庭の柿と、林檎とを、盆に載せて贈られた。色の配合美し。

今より九年前に、三井坑山に大争議が生じた。その渦中に自然投入した玉眞國手が、某々方面から挾撃的に、手強い壓迫を受けたのを隠忍。今日では意志疎通したが、一時は三井王國の觀ある大牟田市中に孤立して、可成り苦戦であつたといふ事を、他から漏れ聴いた。

元來この大牟田は寂しい漁村から發達して、今日の市を成したので、それは云ふまでもなく三井經營炭坑の恩澤。近年では工業發達の餘惠なので、總てが物質本位、營利主義、機械的思想、どの人の頭腦にも石炭粉が混入せざるはなし。併し之は惡口ではない、當然の事實に當然の批評だ。市には、三井關係の直轄労働者が一萬一千人。臨時供給人夫が一萬二千人。その一家族を三名と見て六萬九千人。それに三井系職員が一千二百名。この家族四名平均とすれば四千八百人。合計七萬三千八百人で、それを市民總數の九萬人から差引くと、三井に無關係者は、僅かに一萬六千二百人だけしか無いのであるが、それとても、間接に三井のお蔭に浴してゐるのが多いのである。斯ういふ土地には、殊更趣味教育が必要。油を刺さずに

機械を酷使したら、能率は却つて上らぬものぞ。
有明館の女中、いづれも皆忠實。中にお令さんといふあり。麗質稀に見る處。但し、破鏡嘆後か。この家の親戚といふ。能く氣が着く。此頃各地一般的に、女中サアビス親切に成りし様なり。或は自分が年を取つたので、老をいたわられるのかも知れず。
八日、晴、寒いも寒い、迎もふるえた。火鉢に布巾敷を冠せて急製手焙り式炬燵。此地初霜とか。八時半、玉眞國手同行、大牟田高等女學校。校長不在、教頭某氏紹介辭。歸宿して揮毫。玉眞夫人も御來授。最初玉眞國手の報告にては、揮毫見込薄とありしも、お蔭にて相當加入者もあり、難有し。

中食後、三池中學校、立花教諭自動車にて迎へに來られた。校は草木ヶ岡といふにあり。校長不在、千餘名の學生に武勇談。立花氏送り來る。久留米の津留崎新氏來訪。駛馬村の平山仙六氏より來狀。留守宅より飛行便にて、姫路石野米次郎氏の書簡轉送、氏は九州行を知らず、東京宛に、小波追悼會の爲に來遊を勧誘して來たのだ。即ち歸途立寄る旨打電。

夕食後、萬田坑山行。勞務課の某氏、自動車にて迎へに來られた。未だ若く卒直に物云ふ人にて愉快。實は貴君の著作は何も讀んでおませんとハツキリ。それは當然で、少しも驚かぬ。萬田坑へは三十分を要した。途中三河町といふエロ街あり。イヤハヤ盛んなモーシヨン。自動車なればこそ無事に通過。然らば老行脚も引張られ可き也。此邊熊本縣と福岡縣との境といふ。

萬田坑講堂、三百の坑夫諸君に講演。規律正しく、靜座式に着席。難かしい修養講座に對するらしき態度なので、膝でも崩してユツクリ聽いて下さいと先づ口を切つた。地下の勞働に、血色が悪



四ツ山講堂に立つ著者

るからうと想像したのは脱れて、皆元氣一パイ。但し、年齢より皆古けて見えた。これは自分のみの誤認ではないさうだ。

九日、晴、少し寒さを減じた。十時から四ツ山坑、勞務課の渡邊徳次氏が自動車で迎へに來られた。十五分を要した。海岸に近き處。昨夜の萬田坑は夜間なので、外景は何も見えなかつたが、今日は明るく能く見えた。構内の一廊に坑夫長屋、と云つても二階建て、五十四棟。一棟十戸或は七戸。この構内には女學校もあり、幼稚園もある。その中に立派な講堂。男女合せて三百五十餘名に講演（挿畫参照）聴講の態度の嚴肅なる、萬田坑同様。それを笑はせるのに骨が折れた。

講演後、同構内の菊花壇を見物。これは坑夫達の競培といふが、實に見事の出來。鑛業所でも獎勵の由。石炭掘りと菊作り、

明暗の反映妙。坑内より出で、先づ菊花に對す。この風流有りてこそ、健全なる勞務が運ばれるので、一段の明るさを受取られた。

又となき機會なので、坑内一見を乞ひ、勞務主任板垣義巳氏の案内で、豪上の事務所に行き、更に四ツ山坑主任河原崎始太郎氏の案内を得て、ゴム引の帽子や上張りを借り、天に宙する高槽の下まで行き、石炭運出用の昇降機に乗つて、一千三百五十尺の地底に直降。約一分。暗黒裡に唯清水の滴る音。冷氣肌に迫つて、氣味悪く、地獄入りの感。途中では却つて昇天の氣持さへ生じた。

入坑や裾に搦まる秋の風

併し、考へて見れば、三越白木等のエレベーターも同じ理屈。地下に達して見ると、大トンネルの内部に均しく、別に變つた感想もなし。電燈點々、縦横にレールが布かれて、トロツクが通る。それだけの事。勿論發掘の現場まで行つて見ねば、坑内に入つた資格は無いのであらうが、そこまでは行きたくも無し。横に一哩半、海の方に五千尺も延びてゐると聞いたゞけで、もう澤山也。

又昇降機で出坑。天上天下獨尊の感。

出山の唯我の影や秋日和

歸宿、中食。白仁氏來訪。主として講演の御紹介を煩はした同氏は、過日養ひ子に先立たれて、その遺骨が一日到着、その爲無沙汰と初めて打明けられて、何とも申上げ様無し。同じ悲哀の身の上。御心中察するに餘り有り。その中を何彼と御奔走、恐縮の極。氏は元育英に従ふ。今仔細有りて浪人の由。大牟田に此人格者あり。貴とし。

石炭の黒きばかりか霜白き

氏に又煙霞の癖あり。登山の長者。健脚美むべし。

揮毫追加、十三校に一枚宛半折をとあり。

先づ禮を學べ御慶の始めより

句意説明を省く。又市の頭腦部にゐる某氏、義理一片、短冊一葉の加入。それは難有けれど、自作の和歌らしき物を示し、それを書してとの注文。いくら即興俳人でも、これは御免蒙りて、別にその意味の句を遣はした。玉眞國手には。

煤煙を破りて高し冬の月

大牟田に唯一の名物、カステラ饅頭といふがある。有明町三友堂が(堂主菰田一之氏)その本家。東京其他へ進出(類品あれど比較に成らず)是非賞味されよと、人毎に勧められて、實は迷惑千萬『行脚志願』で宣言してゐる通り、禁酒、禁間食(禁酒は時々破つても)併し餘りに薦められるので、長崎でカステラを食べたのと同じ意味で、一筒を半分に分けて、その一片を口に入れて見た處が、無類の甘味、逆も一片では足りず。残りの一片、更に又一筒、又更に一筒、一度に三筒を平げた。それは好いが、定めし胃を害する事と後悔。然るに、何の障りも無し。珍らしき名菓。(一ヶ月以上も不變の味を保つ事、後に實驗)

雪月花三友寄せし製法に

日本一之カステラ饅頭

他に大牟田の名物は、煤煙なりといふは、酷か。

この夜、三井三池染料工業所に行き講演の筈。古賀好道氏自動車にて迎へらる。宛然西洋の古城

廓の如き、鐵筋混合土の大建築。息苦しきまでに薬品の香が満ちてゐた。鍋田偉太郎氏、有馬祐憲氏等にお目に掛つた。七時三十分より大講堂にて講演。殆ど立錫の餘地なく、千餘名。隨意聴講の制ゆゑ、時としては少數。それが斯くの如きは珍らしとか。一般智識慾も高しと聞いた。他と同じく行儀良し。

講演終了後に、同所在勤の西芳藏氏同鶴江夫人に奇遇。故西芳菫先生の御令嬢が鶴江夫人で、自分分は西先生には杉浦先生を通じて御愛顧を得た者。その先生の御逸話を、長崎で講演して間もなく此所で圖らずその御遺族に逢ふ。因縁深し。歸宿後、立花氏他一名來訪。

十日、晴。矢張り寒し。揮毫追加。三井工業學校より高野保氏、自動車にて迎へらる。同校は殊に嚴格なる校規、學生も剛健、コチ／＼に凝固く成つてゐて、迎も笑はぬ。加之、國民精神作興週間に、それに相當の講演をといふ注意が他からあつた。頼母しき事である。校長川崎壽男氏。前校長中山岩吉氏等にお目に掛つた。

それには『杉浦先生と其家塾』適當。それから引いて、洋式運動亡國論、相撲禮讚に及んで、終了。然るに、この日、この校にて、秋期運動大會が開かれると後に聽いて、苦笑。

宿を引擧げて、玉眞邸に入り、日當りの好き室にて、白仁氏を加へて快談。總て清算を頂き、感謝。他の後援者は、宮本、船越、隈本、南條、清水、廣木、井上、吉富、坂口、角、諸氏。同邸より御夫婦及び白仁氏に送られて驛。西鶴江夫人も御見送り下された。西先生遺稿『芳菲達磨』を頂いた。

皆様の御好意を深謝して、十一時五十三分發車、久留米に向つた。いろ／＼の意味に於て、大牟

田には、深き印象を留めた。物質文化都市の隆盛を趣味の上にも祈る。

久留米の半日

途中所見、句材多くして却つて困る——柿と櫨は眞紅よ稻は黄金色——稻刈のまゝ晝めしや一家族——櫨並木其夕映に通じたり——餘りに實感句に過ぎて物に成らず。

矢部川、船小屋、羽犬塚、皆曾遊の地、なつかし。此邊櫨紅葉未だ早けれど、森林を成して、蜿蜒長く續き、盛時の想像に難からず。その美觀、關東にては得難かるべし。

久留米驛零時五十四分着。八重津博士、出迎はれて。

『これから直ぐ九州一の菊花壇を御案内します。京阪は勿論、東京からも注文が有る位です』自動車には寫眞技師が乗つて待つてゐた。やがて赤司廣樂園に入つた。雨障子、葎簀垣、青竹欄干、お誂へ通りの道具立。その廣い區域に、鉢植の菊花何千種か陳列。實に目を驚かした。素人には最も出来の好さは分る。黄、白、紫、紅、名の知れぬ色もあり、大輪には最も大なるあり、長身には最も長きあり。『咲いたわ／＼』と鬼一を氣取りたし。記念撮影（口畫参照）

この夏、空前の成功を見た久留米市。往來のどの人を見ても可慕しく思はれた。晝餐にと橋原町の華香園に導かれた（久留米一の料亭）

後庭の離れ座敷へ廊下傳ひ。そこから北方の眺望、自分の腦裡を去らぬ野州國分寺のそれに異らず。それは十四歳の時の印象が未だに去らず、時々思ひ出して、再遊を欲してゐた、それを圖らず久留米で得た。

亭前、芝山をなだらかに下る處、泉水あり。老松、雪見燈籠、石橋、各々位置を得てゐる。其向ふ岸は木立。生垣を越しては、十里の稻田連なり、遠く右寄りに寶満山霞み、福岡、太宰府の方位も亦、幽玄の霧に包まれて、九千部山、背振山の一脈に濃氣稍薄し。それにつゞく雷山は、庭の梢に隠れて見えす。近くは九州醫學専門學校の大建築、畫中に入り、稻田には群雀飛び、空中には太刀洗近きを示す飛行機の旋回。靜中動あり。動中靜あり。忙中又閑あり。

「凱旋氣分で、ゆつくり御休養を」と博士。こちらからは、未だしみ／＼御禮も述べずして、好眺望に恍惚としてゐた。その失禮も八重津さんは、必ず寛容して下さると獨極め。それ程氣がゆつたりして來たのだ。

華香園の料理は實に結構。

◇吸物(鴨葛打、松茸、かいわれ) ◇刺身(鯛松皮造り、白髪大根、蓼) ◇甘煮(南京、切出し) ◇小井(ハツ頭芋、そぼろ掛け) ◇酢の物(焼松茸、生姜醬油) ◇小皿(小鳥鱈甲焼、青とん) ◇中付(茸生へ) ◇蒸し物(車海老、絹豆腐蒸し)

酒は久留米銘酒、富の壽。これだけ並べられて禁酒と書いたら、今までの實感紀行の看板を剥ぎ取られる。それにお酌として花香、お染の二妓(第一流は皆、門司の温習會へ、今日自分の乗つて來た上り列車で出發後で、この二人は、二流或は三流と、當人達を前に置いて、八重津さんは戯れられた。當人達は、今は二三流でも、今に一流だと、大氣焔。いづれも則か)

博士は純粹の下口。それに自分は無遠慮に頂き、興に乗じて(それは前遊に放火魔騒ぎがあり、消防が嚴重に警戒したのを思ひ出して)えんかいな節を作つた。

有馬火消の昔より
久留米消防模範的

それに消されぬ物一ツ
燃えるは愛國心かいな

これを久々で自から唄つた。講演に蠻聲連發後とて、持前の美音は(失禮)出なかつた。更に之を式紙に揮毫して、未見の老行脚に好意を表せる妓多しと聞く新券へ贈るべく、八重津先生にお願ひした。(然るに後日、八重津さんから、左の如き報告を頂いた)

——前略——翌々日、檢番のおやちども二人が、袴を着けて拙宅へ挨拶にまゐりました。この袴がうれしいうちやありませんか。花柳の別世界でも、久留米の檢番は、これだけの禮儀を知つてゐます。旅先の老文士にロハ書きを強ふる地方の有力者、老文士を遇するの道を辨えぬ輕薄な讀書子は、恐らくは超重大事でなければ着けぬであらう處のおやち等の袴に對して恥ぢ入るべきだと思ひます。私は彼等の眞摯なる口上に、眼頭の熱くなるを禁じ得ませんでした。

以上を掲げるのは、博士の御迷惑かも知れぬが、自分としては極度の感激に、無斷にて發表、多罪。

博士は、三味線及び撥の蒐集の他に、明治文士の原稿をも心がけてゐられて、最近入手の分として、前田香雪、武田鶯塘、幸田露伴、諸氏の他に、堀紫山翁の『讀賣』雜報の原稿で『伊皿子の候爵邸賣物と成る』伊藤博文侯が瀟浪の舊閣を賣り、又此邸を捨て、更に美屋を造らんとするを

難じ。

さても移り氣の多きお方や。如今春風城に満ち、櫻海棠色爛たらんとす。知らず露の光菊如何の状ぞ。あはれ籬下秋風を恨ましむる勿れ。

この金玉の名文章を、今解し得る新聞讀者、果して幾人ありや。(光菊とは侯の愛妓で、當時評判) やがて八重津さん獨習の爪弾きに、花香唄ひ、お染立つて舞ふ。斯くの如き雅宴、東京では一寸成立せず。

秋風を餘所に開くや舞扇

この家にも、女中達にも、それ／＼書き與へて、興盡きず、併し、唐津方面の如何なるや、佐賀に行く必用に迫られて、宴を撤し、武藤直治氏の女學校長に就任を祝し旁々、先度各位の御芳情に對して、武藤先生を代表者に据えて、御禮を述べたく、御迷惑ながら來園を仰ぎ、いろ／＼語る間に、約束の自動車來。それで佐賀へ飛ぶ事にした。

博士の即吟に。

秋風は筑紫野を吹き燭を吹き

別れ難かる杯を吹く

自分は狂歌にて之に和して。

秋風に吹きおくらるゝ老の身も

春のくるめに齡かへして

佐賀から福岡へ

自動車が久留米の町を通り抜けるまで、難有し／＼と獨語をつゞけた。前回にも経験したが、佐賀縣の道路悪さに、幾度となく身を踊らせられて、盲腸患部ヒヤ／＼。途中の暗闇街道。明るい部落に入つたかと思ふと、又暗闇。突然空畑に村芝居の小屋掛けアセチリン燈の輝くのを見出して、嬉し。東京の名優のは見厭きてゐる。此邊どんな珍藝をやるのか、急がぬ時なら見たかつた。

佐賀市に入つて、例の鐺を求む。主人在宅、二十八枚、安價の割に珍品あり。掘出し物してホクホク。唐人町に菊池氏を訪へば、唐津方面、日曜に掛りて明日は具合悪しとあり。後遊を約し、福岡へ飛ぶ爲、急いで辭去、自動車無し。愛鐺なればこそ、重いのも厭はず、驛によるけ込む。肩が痛かつた。榮屋に打電。八時三十七分發、福岡十時零六分着。タクシー、榮屋、一も二もなく三階へ引揚げらる。この上下の足加減から測定すると、健康は數年前より、良好に恢復の模様。相變らずお千代さん、親切。到る處の女中さん老行脚に親切ながら、一番古馴染だけに、お千代さんが又一番親切、併しつかれ切つてゐるので、入浴、直ちに就眠。

十一日、晴。寢坊して九時過起床。九州を日出度く打上げて、今日は全く用無し。歸途中國一二ヶ所、翌日朝尾道に入れば好いわけで、先づゆる／＼と朝風呂。朝食。榮屋主婦さん、挨拶に見えた。主人倉成久米吉氏は上京。いづれお宅をも訪問と云はれたが、恐らく未だ數日歸宅出來ぬので、駆け違ひ逢ひ得ざるべく、遺憾。

榮屋筋向ふに新たに古物店。入りて鐺一枚。高價なり。それより電車にて、西公園入口の古物店。

此所でも、十三枚ばかり鐺を求めた。理髪。歸りて、零時三十八分博多驛發に乗つた。若い番頭君送り來る。鰻井で中食。不味。

まるで痴呆症の如く茫然としてゐた。疲勞が極度に達したのだ。そればかりでなく、成功に安心したのだ。然うして、諸氏の御好意を幾度となく感謝して、自分の今は全く幸福である。何等不平不満は無い。それにつけても小波の事、生存してゐれば、どんなに喜んでくれたらう。いや今度の成功も、小波が天國から應援してくれたのだらう、然うして梅子も亦小波と共に、健康を守つてくれたのだらうと思ひ出してからは、極端に又神經過敏に復元して、矢張り泣虫行脚。(昭和八年十二月二十三日。皇太子殿下御生誕の朝起稿。昭和九年一月五日午前六時脱稿)

奉祝 億兆の師走に拜す初日の出

中國歸途日記

尾道 瀬戸内海 松永 本郷 今津 福山
一ノ宮 金丸 大石峽 姫路

尾道の村田四郎氏曰く。まるで昔の飛脚の様に、土地を唯通過する程度では、地方人は満足せず。落着いて名所舊跡を見て頂き、又郷土獨特の行樂も試みて貰はねば、我々は氣が濟まず。歸路には静養を兼ねて、何日にも滞在ありたし。其間には、輛の桑田さんと相謀りて松永や福山方面と、連絡を取り置くべしとあり。息子に親爺が叱られた氣持で、喜んで之に従つた。

河豚は食ひたし

門司へは午後二時四十分着。放浪囊が無い代りに、鐺の重いのを持ち、渡船場の連絡船で、下關龜山宮近くに着。徒歩、直ちに赤間町の伊四鈴師匠を訪ふ(第四卷参照)生憎、老母同伴にて、辨天座の婦人會主催の演藝會に出演。少女一人留守してゐるのでは、如何とも仕難し。

自分は此夜十一時五十分發、それまで此地で休養。師匠の案内で常富樓へ行き、同家の女支配人の磯部たつ子さんに、先年家内が世話にもなり、自分も後援を受けた、その禮を述べ、序でに河豚で當り祝に一杯といふ腹。河豚で當るとは縁起がわるいが、子供の時から祖父の啖酌に侍し、祖父の象牙の箸の先から、度々自分の口へ河豚チリを押込められて、無事に成長した者である。別して下關、殊に常富なら、安心して食べられる。一方義理を達して、一方食道樂。然ういふ計畫が脱れたのだ。

已むなく荷物だけ預けて置き、洋傘一本を杖にして、目的もなく立出たが、扱て困つた。行く先が浮ばぬのだ。それも併し放浪氣分だ。これが行脚で失敗したのだと、深刻味があるのだが、お蔭で大成功。留守宅へは度々デンカワ。未だ懷中は膨らんでゐるので——併し、これが失敗で、歸途の旅費も無いといふ時に、目的の人が不在と來て、悄然として歩くのだと、どんなに悲觀するだらうかと、そんな考へも持ちながら、足に委せて龜山宮の一の鳥居から、新設の陸橋を(下は市場)渡り、龜山宮。先づ參拜。石の玉垣の邊から、海峽眺望。今の新裝風景よりも、昔の港の面影を想ひ浮べて、時の過ぐるを知らず。空茶屋の床几に、洋服ルンペンが横はつてゐるのを見て、自分もそれと同じ形で、暫時寝ても見た。

然うだ。明治三十九年の春だつた。朝鮮へ捕鯨行。會社の招待で阿彌陀寺町の岡崎といふのに泊つて、河豚を食つた。其家が未だ有るならば、たとへその時の老主婦が死んでゐても、何となく可慕しいから、そこへ行つて河豚を食はうと、探し／＼行つて見たが、元の海岸を埋立ての、新道路が通じてゐて、見當が附け難し。途中、新築の料亭數軒。「ふく」の招牌が遊士の魂を咬り立て、入

らうか、入るまいか、迷ひ／＼過ぎて、いつしか赤間宮の前まで來た。即ち參拜。この記事其時手帳に左の如し。

秋の陽は西海に釣瓶落し。赤間社域、平家一門の墓に面して、老行脚一人立ち、句有らんとして得ず。(平家と硯友社、盛衰克似)退いて石燈籠の臺石に腰を掛け、再考猶未だ得ず。眼を轉すれば、拜殿の金幣束、錆びたり。社後の常磐樹の間に、楓葉の唐紅、少し見ゆる却つて貴とし。

此所に、幾代昔より來り訪ひし、古文人の事を可懐しむ間に、硯友社の一門は皆死にき。それに及びて、又泣きつ。(常にこんな文章で日記は附けぬ。半符號で、人には讀めぬ。それも時々、本格のも書く。それはよく／＼閑暇の時だ)

未だ河豚の解決は着かなかつた。食はうか、食ふまいか。萬一中毒したら、後援者諸君に相濟まぬ——イヤ、減多に中るものではない。今は好季節、一杯やりたいな——イヤ／＼、そんな贅澤な事をしては相濟まぬ。鐺を買ふのは一種の貯金と信じながら、それをすらも、無駄遣ひと思はれぬかと、小心翼翼氣兼ねしてゐるのだ。誰も知らぬからとて、コツソリ河豚チリ、それでコロリは、申譯が立たぬ——併し、食ひたいな——イヤ止める——だが食ひたい——ごちや／＼の頭腦で歩き出した水蔭を、今度は客觀し得る様に至つたのが、急轉向で愉快に成つて、斷然河豚を止して、其代りに小人島と大熊との相撲の見世物を見るべく、小屋の前に立つた。

『お生憎様、もう終演で。夜の部に來て下さい』と木戸番に跳付けられて、いよ／＼面白く成つて來た。成程、もう夕方だつた。

その前が門司行の渡船場。フラ〜と渡船に乗った。

小人島と女護島

一一六

門司驛樓上のミカド食堂で洋食、一酌。此所へは全集後援者の一人、小倉市の川崎英一氏が、家族を連れて能く來るとの便りを得てゐた。氏一家の爲にも祝盃。又渡船で下關へ歸つた。今度は木戸番が「入らツしやい〜」と呼び込んでくれた。木戸は十錢、中で五錢、殆ど満員。但し子供七分、後の三分に、自分以上の老人もゐず、自分以上の智識階級も見えなかつた。逆も面白かつた。漫畫の不自然な人物が、此所では生きてゐる人間として、活躍するのだ。漫畫活人劇團として、東京へ乗り出して、大劇場で、高切符で興行したら、一回だけは必らず大當りだらうと、興行師魂性にも成つて見た。

一人は三十餘歳の男。普通人の腰から下で、それが又身體均等に發達。小さいなりに完備してゐた。

一人は二十二歳の男。更に前者より小さいが、頭部と顔面とだけが、法外に發達して大きく。頭が五貫で、身が四貫だと洒落れてゐた。

一人は十八九歳の女。顔立醜からず。最初には、普通の娘が坐つてゐるのか、と思ひの他、それで立つてゐるので、腰から下が極端に短かいのだ。

この他に、手が鶏で、足が牛といふ、四肢奇形の娘と若者。

これに一人、普通の娘。不具者でないのが却つて不幸らしい様子に見えた。

不具者を見世物にして怪しからぬとも思つたが、當人達は如何にも愉快さうに、然うして自分の演技を誇りともしてゐるらしく見えるので、別に不快の感も起らなかつた。

演技中にも拘らず、外部の木戸番は客寄せの爲に、突然シャガレ聲を振絞つて。

「××子さん、あなたの歳は」
すると演技中の鶏娘が、甲走つた聲で。

「十八歳」「お父さんの名は」「何んの何某」「お母さんは」「お何」等々。

これが如何にも怪奇的で、泉鏡花の小説にでも有りさうであつた。

喜劇の理髮屋が振つてゐた。小さな椅子を持出して、それに大頭の小人島を掛けさして、完全に小さい方が、木製の太鋏や大櫛を持出して、理髮。正に活きた漫畫だ。この他、熊との角力、拳闘、柔道、鶏娘や牛男の足藝等、逆も名優の芝居より面白かつた。これを老行脚が、うツとりとして見入つてゐるのを、誰か知る人が密かに見てゐたとして、その批評が聞きたいもの。(この記事はイカモノ通の森曉紅さんに捧ぐ)

師匠の家へ行つて見たが、未だ歸らず。少女一人淋しさう。即ち置手紙をして、バスで驛前。未だ發車まで二時間もあるので、オリエント食堂といふのに入つた。小人島から女護島へ渡つたのだ。女給が二三人集つて來た。食べたくもない物二皿ばかり、酒も既に飲めぬながら、取つたが、女給を相手に餘計な口を利くのが蒼細く、立出て驛待合室。未だ大分時間があるので、包から鐺を出して、ゴシ〜磨いてゐると、突然背後で「金だ」といふ叫び。「おう、金だ」と鸚鵡返し。吃驚して振向いて見ると、若い労働者風の朝鮮人が數名、覗き込んでゐたのであつた。鐺の中の鍍金の閃く

のを、純金だと誤認したのだ。然うしてオツシリ置かれた鐔の包を、皆金塊とでも睨んだらしい。絞殺されては大變だと、恐ろしく成つて中止。そこへ、バタ／＼で伊四鈴師匠、白襟紋附で、今辨天座から歸宅、置手紙を見て直ぐ駈付けたと、セイ／＼。

十一時五十分發車。空いてゐるのを見越して、寢臺券を買はず。

尾道の拳骨和尚

十二日、晴。食堂車にて朝食。廣島にて二等下車客多く、他には唯一人。西條を過ぎる時、小波發病の地とて、感慨深し。此邊より河内へ掛けての沿道、紅葉好し。九時零分、尾道驛着。村田氏平木老と出迎へらる。お馴染の三階に打くつろぎ、無遠慮に假睡さして頂く。壽子夫人、お子さん御病氣にて、岡山に入院。その看護中を、わざわざ歸來を煩はして恐縮。宅より冬外套、縮入及下着、ネル襦袢等届いてゐた。早速着替へた。晝飯を頂き、村田氏御夫妻に令息二人、小倉義一郎氏、益田つね女史とにて、俗稱ゲンコツ和尚の、物外禪師の遺跡調査にハイヤにて出發。

拳骨和尚の強力逸話は、講談や大衆小説で、冷く紹介されてゐるが、誤報が多い。明治四十四年再版の『物外和尚逸傳』増外道人編纂、それを参考として、村田氏調査の材料に従ひて記せば、次の如し。

和尚の先祖は武田信玄で、父は三木兵太信茂と云ひ、伊豫松山侯に仕へた。和尚は信玄から九代目に當るのだが、生年月不明。殿の落胤説もある。併し遷化したのが慶應三年十一月二十五日、七十三歳とあり。それは勤王の故を以て、幕府側から毒殺されたとの説もあるとか。

濟法寺に住して、不遷と號す。武藝諸般に秀で、二百五十人力と稱せらる。門下三千人。書畫は脱俗、詩句は非凡、代表句としては。

雲の上も君か御國そ不二の山

木額に書いて、落款には、拳骨を捺すので有名。曾て力士御用木と争ひ、彼に拳骨を食はせんとした時、仲裁者がありて止む。その餘憤晴らしに、尾道海徳寺の門柱に、拳骨を打込んだ痕が、明治まで遺つてゐて、村田氏は確實に見た。惜しいかな、その寺は焼けて、今無し。拳骨の痕のある碁盤、その他遺墨遺品に富む大興山濟法寺を（曹洞宗）市外栗原町三軒家に訪うので、途中下車（平木老、令息馨氏と先着）坂路を登り、最後に石段を上り切ると、既に寺内。その右手に自然石の大々的手洗鉢（高さ三尺三寸、幅廣き處四尺、長さ拾尺——村田氏實測）これに就ての逸話は。

物外和尚の強力を聽いて、力くらべでもする氣の武者修行訪問。和尚折柄この手洗鉢の側で掃除をしてゐた。武者修行は和尚の在否を問ふに、和尚面倒臭しと、不在なりと云ひ捨て、片手を手洗鉢の先へ掛けてヒョイトと持上げて、その下の落葉を片手の箒で掃いたので、弟子坊主でさへ之だから、和尚は、どの位力があるか知れぬと、武者修行逃げ出した云々。

その手洗鉢なのだ（口畫参照）水蔭、手を掛けて見たが、逆も動かぬ。けれども後世には、少し位持上げたと傳はるかも知れぬ。物外和尚のが既に信を措き得られぬのだ。それ程大きな石なのだから。

落葉かく僧今何處手洗鉢 草臥

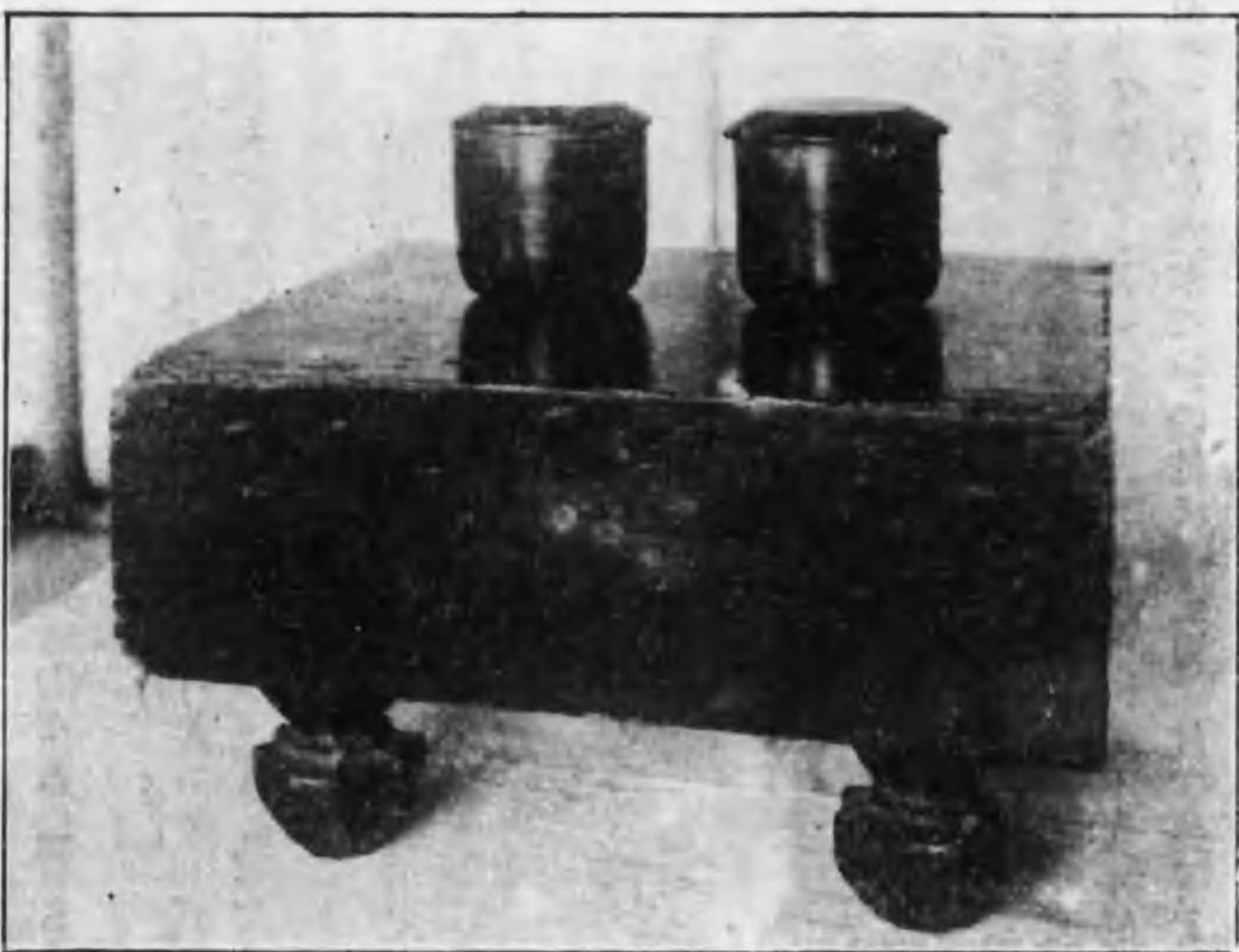
この方は信用出来るのに、本堂左脇藤棚下の立石がある。高サ四尺八寸、幅二尺、厚サ九寸（村田氏實測）これを山後から、六七人で運ばんとして得なかつたのを、和尚一人で軽々と背負つて来た。その實見者は、十四五年前まで生存してゐた直助といふ老寺男で、それから、村田氏は直接聞いたとある。（この背負石と並んで、物外記念碑がある）

物外は、永平寺の梵鐘を一人で脱したとか。雨請の爲に七百斤からの釣鐘を一人で背負つて吉和の沖へ漬けに行つたとか。釣鐘傳説が二ツもあれど、如何にや。

客殿に招じられて、現任職村上金龍師より、數々の遺墨遺品を示されたが、先づ有名な碁盤より記す（挿畫参照）

木材は柁。古く、虫蝕ひ。側面に歴然と三ヶ所ゲンコツの痕あり。これは握り拳の先でなく、元の方で（甲に接した部分）打込んだと、金龍師が代々の傳聞を説明。この碁盤を求めるときに、手付けとして打込んだとも、圍碁に敗けて、口惜し紛れにとも、説紛々。併し「物外和尚逸傳」に従ふと、然う容易ではなく、かゝる場合には、玉襷を掛け、全力を拳に籠め、恐るべき面相を以て、氣合と共に打込むのだと、實見者の談として載せてある。この方が人間物外で、手洗鉢に至つては、講談的英雄に墮す。

床の間には如意寶珠の畫に「如意寶珠より生根玉」と贊して「救 物外」とあり。（これと同筆、村田家にも秘藏せらる。和尚得意のものか）他の一幅には、簡單に太刀を畫き、それに「人もなし我影もなし太刀一つ」とあり。これが不遷流劍道の極意らし。和尚武道門下の「入門人名録」をも見せて頂いたが、劍の他に、薙刀、杖、鎌等を教授。薙刀には婦人の名が數人見えた。（他に「柔術



物外和尚拳骨の碁盤
（白き丸の三點がそれ）
平木熊吉氏撮影

門人記名録」有る由なれど、見ず）

和尚の句稿も一見。俳人の俳句を超越した和尚一流の名句を以て満たされてゐて、自分の如き俳人ならぬ即興俳人としては、溜らなく結構に頂けるのが多かつたけれど、一々書き留める心の餘裕を持合せなかつた。（不二の山の吟が「逸傳」採録には多かつた。）

この他、大佛殿文武館、敕額依頼の掛の者よりの書面。青蓮院二品親王より、指貫許可の免狀。栗田御用の大札等。

斯くの如く和尚の遺物は豊富である。尾道の名勝として、この濟法寺を逸する事は出来ぬ。市外と云つても町つゞきで近い。觀光客は是非訪ふべきだ。

勤王の僧弔ふや菊日和 草臥
小倉氏は、明日會議所用にて東京へ出張とあり、失望。明日こそは先生の釣竿武勇

傳、海上のゲンコツ和尚、魚族に對する二百五十人力を拜見出來ると楽しみにしてゐたのが、是非なし。

村田家の店員にして、勤続四十年の井手口氏。三十年の濱本三阪二氏。二十年二人。十五年一人。十年以上四人。(悉く日蓮信者)合計十人を有せられると聞き、諸氏の忠誠に感激すると共に、如何に村田家が、使用人に對して、温情であるかゞ惚ばれて、敬服。人情輕浮、モダン氣分澎湃たる現代に、かゝる美談を聴き得るも、偏に行脚の徳。難有し。進んで揮毫、諸氏に贈呈。夜に入つて樋野月亭老、竹中修竹堂氏來談。それに未見の全集後援者、竹中尙三氏も加はり、初めてお目に掛つた。月亭老からは、小波最後の會見談など聴き、共に故人を悼んだ。

釣り船の一日

今日は瀬戸内海に釣りの快遊。十三日、晴。午前八時十分、村田氏御夫婦、樋野月亭、平木熊吉二老。それに船頭さん一人。漁船にモーター付きにて出發。前回大三島行とは航路左に寄り、向島と岩子島との間、牛ヶ瀬戸を通過。左方の海中に孤立の岩礁が、牛に似てゐるので其名あり。釣天狗(失禮)釣の大先達小倉氏の同乗なきを物淋しとしたが、どうして釣天狗(又失禮)釣大先達は、自分を除きて皆然りで、今までの竿先の功名手柄話續出。戰場に向はぬ間が花か。(自分は全く釣に於て兜を脱ぐ)

島と島と、岬と岬と、相對抗して、彼出れば此入り、彼引けば此進む。船はその間を縫うて行く、襟を分けて海の懐に入るの觀。やがて因ノ島、その蛇ヶ城の古跡が、入江の奥に見ゆ。海賊衆村上

一族の根據地とか。

やがて因ノ島の鏡浦といふに碇を投じて、釣に掛つた。自分がかゝる海釣は最初で、小棒に巻いた糸を海中に投げ込む。先には錘と鈎は二本。餌は松永沖で採れるムシといふ小虫。蚯蚓とゴカイとの中間の如し。船頭さんに一々刺して貰つた。

眞先に平木老が、鯨に似たアマテを釣り、それからボツ／＼他の方にも釣れたが、口切の平木老は、最初一番釣だけで、其後は手ごたえ無し。壽子夫人も釣られたが、自分には一向。

弦月淡く細々と島の上に消え懸る。その島には、紅葉、黄葉、疊岩茂樹の間に見えて甚だ美し。

月の鈎紅葉の餌に釣る島や

島紅葉薄ら懸れり晝の月 月亭

句は引懸つても、魚は更に上らなかつた。

生憎、風強く、その爲の不漁とあり。弓削島まで遠征との雄圖を中止して、椋ノ浦に轉戦した。

鯊釣りや沖へ出るほど風有りて 月亭

此所で最初に自分は、河豚を一尾釣上げた。それが甚だ小さかつた。(後に又三尾。鰻一尾)河豚は福に通ず、縁起好しと云つた處で、釣道の方では、河豚は魚獲の數の中に加へぬといふ。オヤ／＼。わが釣りし河豚には毒の無いらしき

大漁や實は小河豚の數多く

この、數多く、と吟じたのは、諸氏のを合してである。村田氏は、鰻二尾、タナゴ一尾、鰻三尾、ペラ三尾。夫人は、ギザミ一尾、タナゴ一尾、鰻一尾、アマテ一尾、河豚一尾。月亭老は、ア

マテ二尾、ギザミ一尾、ハゼ一尾。平木老は、アマテ二尾、ギザミ一尾。船頭さん二本釣りにて、稍多し。小倉氏が同乗しても、今日の此風では、恐らく是以上は如何にや。

食慾や自から釣りし河豚を見て

船中にて御飯を炊く間、海岸の岩礁に上る。岩角に野菊しほらしく咲き盛る。人々手折りて船中に持込み、或は帽子に挿した。持参のお菜を開き、炊き立ての御飯、船のは鹽氣ありて殊に美味し。平木老獨酌。

島の秋たゝへつ舟の飯の味 月亭

此所より引返して、向島の餘崎の沖に、ハエ繩を投げ込み、標識を遺して去り、高見山下の立花村に上陸した。白砂青松の間、漁家點々、町家も少しづつき、小學校も見えた。此磯近くに村田氏の別荘、夏期には此所に避暑海浴。人情純朴にして、誠に理想境といふ。一見してそれと點頭れた。

此所からは、因ノ島、弓削島、四坂島等を右手に。正面、孤立の百貫島。それより左手に當木島横島など見えて、眺望に飽く事を知らず。この上陸の状を、小映畫機にて村田氏撮影。

この邊明日は、鎮守妙見様のお祭といふ。村田夫人の訪はれたる家の老婆、遺憾がりて、例年なら今頃餅を搗いてゐるのに、今年は遅れて、折角の珍客に呈し得ずとて、菊花の枝と大根とを船に投げ込まれた。人情の美しさに涙含まれた。

鎮守の森の山つゞき、巨木繁茂、村の者は落葉すらも採らず。すべて不淨人を入れぬ古來の風習、近親に不幸の人達は、祭時、境外にて酒宴するとか。

ハエ繩を上げるまで又釣る。(口畫参照) 又しても自分は小河豚を釣り上げたが、それを能く見ると、實は鉤が横腹に引懸つたのであつた。釣る者の下手さ加減は論外ながら、それに引懸る河豚も亦河豚だと大笑ひ。

いよ／＼ハエ繩を(東京でいふ、流し繩)引上げるに、途中より切れて、標識無く、全部損失かと落膽。船頭さん心得て、探りを入れ、經驗の力で端緒を得た。先づお客様からと有りて、自分一番に手繰り始めた。幼時、紙鳶を揚げし感じを手先に覺えた。又しても河豚。それからメバル。くたびれて、人々に代つて頂き、又手繰る。何が懸つてゐるか、その楽しみ。海中の福引、否、河豚引とぞ申すなる。先は大漁として打切り、四時十分發、今度は東廻りで歸る事と成つた。

これにて瀬戸の釣も實驗した。東京の釣黨に好き土産。之も老行脚を喜ばしたしとの、すべて村田氏御夫妻の御芳情、難有き限りである。

向島で一番高い、その高見山を中心にして、周邊を一廻りするわけだ。山形の變化を見ながら舟は疾走。餘崎の鼻を廻つて、左手に干汐の海水浴場。廣島文理科大學臨海實驗所の建築など見える。長汀あり、曲浦あり、飽かず。唯風の寒きを覺えたが、村田夫人は自分に向ひ、風邪を引かぬ様にと、度々注意を加へられて、御親切難有し。やがて歌の浦を過ぎると、もう向地は尾道。浄土寺山よ、千光寺山よ、舊知の瀬戸を行く。船の往來漸く繁し。この河流の如き水道の正面、限られたる西方の空中に夕陽の餘光が盛り込まれて、何とも形容の出來ぬ美しさ。海峽兩岸の山々は、既に暮色に包まれかけてゐる、その狭間の天の一部のみが、眞紅の玻璃板で張り詰められて、電氣の側光を掛けた如き明るさは、此地形に於て、此舟行に依て、初めて見るを得る偉觀。もし八景を公平に、

日本全土から選定せよとなら、自分は尾道水道の夕照を先づ挙げたい。然ういふ感じを受取つた。その癖自分に句無くして、月亭老に名吟あり。

海や秋燃えんばかりの夕茜 月亭

五時十分、出發點に歸着。村田家老刀自、お曾孫さん達と岸頭に出迎へてゐられた。

海に冷えた身もお風呂を頂きて温まる。夕食の團欒に、樋野月亭老の他に、小川笠林堂氏加はり、それに足利へ出張中の村田辰五郎氏歸來、例の大々テーブルを圍みて、賑やかに談笑。小川氏は河豚通、先年中毒したが、口邊が瘻れて、手が慄えた位、恐るゝに足らず。お好みなら同行と勧められて閉口。

東京で河豚を食べる、その價の三分の一で下關では食べられるが、その下關の三分の一で、尾道では食べられて、加之美味し。過日、東京相撲の年寄某が来たので、天ぶらで一杯出した時、その年寄、河豚を極度に恐怖。岡山で知らずに河豚の味噌汁を食はされて、後でそれと知つて急に嘔き氣を催したと語つたので。イヤ此天ぶらは、河豚だと教へた處が、忽ち顔色を變へたので、ナニ心配無用、家傳の心臓藥を服めば大丈夫だと云つたと、賣藥の宣傳。拔目無し。併し、事實、小川心臓藥は、効能如神といふ。按摩を呼んで頂き、恐縮した。老人にて上手。

十四日、晴。土堂小學校。近し。村田氏と共に徒歩。得意の土泥一席。記念に校長藤野象一氏、主席井上伊策氏と撮影。當校は高臺にて、眺望好く、兒童健康の爲に、又精神上にも、好影響あるべし。歸途、古道具屋、意外にも珠數鐲を發見。その他、古泉模様の其阿彌鐲、刀匠物、正阿彌物、

肥後物、若芝の鶏、革鐲等、掘出し多く、大喜び。村田氏も鐲黨に左祖との事。

ほんの静養の意で立寄りしに、圖らず村田氏より種々御配慮を頂き、恐縮。此所でいよく荷物を減少する爲、夏外套其他を荷造り御依頼して、先送。此日より冬外套と成つた。午後一時零一分發にて松永に向ふ。村田さん同行。夫人も岡山行とて同車。辰五郎氏、樋野氏、平木老、其他見送られて難有し。

趣味に富む松永

松永（今津町本郷村を含む——家つゞき也）には、鞆の金原利道宮司の御紹介にて、青むしろ社の諸君が御後援下さる事に成つてゐた。同社からは「青むしろ」といふ雑誌發刊、趣味人の一團に依つて維持されてゐるので、地方には稀に見る風雅團體。有らゆる方面の趣味家を綜合して、斯道の權威が蘊蓄を發表。會員も多數に及んでゐる。かゝる社の諒解を得た事は、老行脚として最も光榮。一時十六分着。出迎を忝くしたのは、金原俊郎氏、山内三三氏、梶田改三氏、矢野光治氏、及び「中國新聞」記者渡邊則敏氏等。

自動車にて直ちに本郷小學校（校長廣安金三郎氏）二時半より、兒童及び一般聽衆に講演。此所へ鞆より桑田勝三氏來援。それより下土井醫院に、院主石井兵一國手（號逸足）丹精の菊花拜見。主に懸帷造り或は盆石風にして、實に見事。一行なか／＼賞め上手、別して桑田氏のは、正鵠を得てゐるらしかつた。

『菊も良く出來たが、賞め方も巧い』とつい口走つて、それが皮肉らしく響いて恐縮。

菊咲くや千手觀世音懸け佛

花壇より御座敷に通されて、此所では御手製の陶器を拜見。桑田氏は又此方の素人名工、話が能く合して盡きず。

夕紅葉よりも映あり窯の火

此所より松永の大吉樓に入った。新築の奥座敷に通されたが、迎も東京では見られぬ餘裕のある間取りで、更に庭の造りも好く、居心地自から豊かと成つた。

此所を出迎へ諸氏に、矢野寛治郎氏を（町會議員）加へて、別室で雅宴。渡邊氏の記者體驗談にて賑はひ、興盡きず。扱て村田氏は、此所より尾道、桑田氏は朝へ、それ／＼に歸られるので、同車、驛まで見送つた。更に自分は金原氏同車、神村の縣社今伊勢宮に向つた。松永の町より少し離れた小山の中腹で、そこに新築の社務所に入った。社掌岩森喜多治氏に迎へられた。（金原氏は當社の社員）

誠に靈域の静かさ、今宵は能く眠れると思ひの他、つい山麓が鐵道線路で、何回となく目を覺させられた。

木枯の夢や横切る汽車の音

十五日、雨。朝湯を頂く。朝飯の時に、岩森老が、白衣青袴、神官姿にて、恭しく御給仕に恐縮。朝より金原利道宮司、桑田氏も昨夜福山に一泊、前後して來會。神村小學校長本多積氏に初對面。十一時頃まで揮毫、それより自動車にて、酒造家北村森之助氏の、東籬園菊花壇を拜見。石井氏とは又別箇の文人造りとかにて、結構。幸に賞め方専門家として桑田氏の來援あり。

酒造る家や重ねて菊造る

渡邊氏待受けられて記念撮影、厚く謝して辭去。再び大吉樓に入り、一行に西川正名氏を加へて中食。それより今津小學校に向つたが、此日祭禮、若衆連は神輿を擔ぎ、子供達は車樂を引き、その爲に聴講者少なし。集まる間を、陰陽石神社の參拜に廻つた。中國街道の右手にあり。昔、大名達通過の際は、幕を張つて隠したけれど、却つてその爲に注意を引いて、大概は參拜されたといふ（近頃では小屋を造りて隠し、鏡前を掛けてある）

逢ふやいつ別るやいつといさ知らぬ

石のちぎりの言の葉の世に 寂明

と刻んだ石標が立つてゐる。先づ拜殿に一禮すれば、小波の句が額として納まつてゐた。

靈石に和合を契る清水かな 小波

病氣平癒、商賣繁昌、良縁安産等、すべて芽の出るといふ御神符を頂いた。（男女性病は勿論）

神官の好意で、小屋の扉は開かれたが、これは他に類例を見ぬ珍形式の陰陽石で、清水を湛へた約一坪の池の底に、兩石が平面的に安置されてゐるので、可成り偉大。他國の如く立體的ではなかつた。この點長崎諏訪神社の敷石と均し。（池は五尺に一間、小屋の無き時には、池の上に小祠があつたとか）

秋風や吹かぬ和合の石圍る

不思議なのは、月に一回、約一週間ほど、水が赤く變色。これはエンカカルシユームの作用で、その證據には水の味が澁辛いと金原俊郎氏が説明された。土俗宗教學の研究として注意すべきであ

る。願掛に五色の紙の小職が、何百本となく奉納されてゐた。

斯くて再び小學校。處女會員が多數。それに一般聴衆も加はつて、大分頭数が殖えたので、午後二時より、矢野寛治郎氏開會辭、講演約二時間、熱心に傾聴されたので感激。出發の途次、一寸、山内齒科醫院に立寄りて挨拶、それより驛着。驛長室にて休憩。諸氏の見送りを忝くして、五時三十分出發。

青むしろ社の御後援にて得たる贊助芳名は（次第不同）

石井清一。丸山茂助。渡邊豊市。金井金藏。西川正名。岡田昇一。岡本織之助。石井英雄。富士谷政雄。吉川縫之助。大村三郎。宮善一。村上桂藏。藤井源治郎。平橋又策。矢野茂。栗村七兵衛。杉原一二。鈴木宏道。小林正一。矢野寛治郎。立神正夫。北村次郎。石井紋次郎。嶋田亭一郎。石井登一。石井兵一。藤野喜一。石田重右衛門の諸氏。他に本郷村役場。東藏坊。妙皇寺。

天下之腐僧玄達

福山驛に着いたのは五時四十八分。強雨。この地にては桑田氏の紹介で、濱本鶴賓、後藤景雲二氏が肝煎の筈。それに村田氏の紹介で、日滿ゴム會社の有永艶一氏が世話下さる筈。然るに誰も出迎ひ無し。即ち桑田氏は米屋町の山丈といふ料亭に案内された。女將、桑田氏の入來に恐縮して、急に床の間の生花を取りかへる騒ぎ。却つて此方で恐縮。やがて濱本後藤二氏來訪。有永氏も、此日會社の重役會議中にも拘らず、馳參じられて、お氣の毒。氏は村田さんの人格に衷心より敬服。

その紹介に對して、誠意の限りを自分に盡された。年齢未だ若けれど、苦勞人にて、能く注意行届く。いづれも酒豪。こちらは禁酒。諸氏に送られて、米屋町の旅館坂田清賞館。二階の室。敷蒲團を四枚も重ねて、下は充分。懸け蒲團却つて薄く、寒し。按摩。

十六日、晴。朝、湯呑に梅干入りの番茶を出したのが、舊式にて嬉し。此家には四十七年勤続の老女中（七十近し）忠實に今も働き、能く行届く。珍らしき事なり。桑田氏來る。同氏の案内にて胡町に鐘探し。主人不在にて要領を得ず。後藤氏來り、揮毫勸誘の爲直ちに去る。濱本氏來る。（氏は曾て新聞記者たり。今は市史に關係を有す。翰墨會の牛耳を執る）

福山の松林禪寺に、文久の頃、玄達といふ奇僧が住してゐた。天下之腐僧といふ印を用ゐた。でも一端は知れてゐる。詩文に長じ、國防の策として、奇抜な議論をも發表してゐるが、この人の前身は、肥後細川侯の家臣。それが故有つて剃髮。幕末の劍豪森要藏翁とは、特別の關係が有つたと見えて、翁の『劍法擊刺論』には、跋文を寄せてゐる。それ以外が一切不明。

曾て自分は、野間清治氏の囑に依つて、森要藏翁の一生を調査したが、この玄達の何者かを知る必用に迫られて、わざ／＼來福してもよいとまで思つてゐた。それが圖らず諸氏の御好意で、今日訪問の機に達したので。

臨濟の巨利弘宗寺の末寺として、本庄町に延壽山松林寺といふのである。元和六年に熊ヶ峯の寒松寺といふのを移したので、開山は松住禪師。それが火災に罹つたので、七八十年前に、大安藤家の書院を持つて來て再建。現在のそれがそれだといふ。タクシーにて桑田有永濱本三氏と共に、本庄町

に走つた。すると向ふから一老僧が、頭巾を冠つて遣つて來た。それが松林寺の住職らしいといふ濱本氏の注意で、停車。果して然りで、併し、檀家に迎へられて誦經に行く。遅刻してゐるので、急ぐとあつた。

それなら此自動車で、先まで送つて上げるからとて、強て歸山を乞ひ、こちらも下車。横町に入つて、松林寺を訪うた。住職は三谷綱洲師、六十四歳。明治二十六年に入寺、先住は藤井謙道と云ひ、蘆品郡加茂村字粟根の出生、學識高かりし。

錫振上げて松林寺

何んにも云はずに

ズーツとズーツと

といふ俚言が遣つてゐる。これは謙道師が、本堂再建の託鉢に巡錫の時の事だといふ説。現住職はこの謙道老師や、檀家の稻毛重治氏（大正十五年七十三歳にて死去）からも傳聞したとて、玄達に就て左の如く語られた。

玄達といふ僧は、住職ではなかつた。九州の浪人で、美男子、身長スラリとしてゐた。人妻と關係があつた爲に、退藩とか「達チャン〜」と人が呼んだ。學問あり。武道にも秀れてゐた。刀痕がドコかにあつたともいふ。三四年在寺。それからは行方不明。近年、突然、岡山の某氏より、玄達に就て問合せがあつたといふ。或は岡山にて入寂したのか。同地臨濟派の寺院を調べたらば、何か得る處あらん云々。

以上の他、得る處無し、けれども、人妻、美男子、刀痕、行方不明、悉く傳奇的で、却つて文藝

味が豊か。

備後一之宮

坊さんを途中まで送つて、一行の自動車は備後一之宮に向つた。市を出たのは十一時四十分頃。（兩備電鐵あり）

途中、穴海盆地を過ぐ。蘆田川の氾濫さへ無ければ、豊穰の稻田。日本武尊、惡神御退治の他にいろ〜面白き傳説。それを濱本氏から聞いた。十二時十五分に備後網引村宮内に着。石の大鳥居の前にて下車。

國幣小社、吉備津神社は、御祭神大吉備津彦命。當社の御創立は、大同元年で、今を去る一千百有餘年。社殿は元弘に、櫻山茲俊の兵燹に罹り、明德に再營、永和に改築。慶安に水野勝成が改造。それが今日に傳はつてゐる。

鳥居を入りて少しく行くと、神門がある。それを入ると、境内廣々として、右側には人家あれど左側は大芝生。そこに孤立の大公孫樹。「大日本老樹名木」の石標が立てられてゐるほどで、實に見事なるもの。風に連れて黄金色の落葉、空に翻々、地に翻々。舞上る金色の蝶群、舞下る金色の蝶群、相打ち、相搦み、相重なり合ひ、一部渦巻を成して又空に昇り、一部潮流と化して又地に落つ。既にして風止めば、金蝶は銀杏に復元し、巨木一本唯見る黄金の奇峯。地上一面の黄金波。我等一行は、知らず〜黄金の旋風に巻き込まれて、袖を舞はし、裾を踊らせしが、風納まると共に、期せずして〜と黄金甍の上に身を横へて、互ひに奇觀を驚嘆するのみ。誠に神威に觸れしかの

感。
正面石段近き左側に、相生の松あり。又オガタマの木といふのもあり。石段を登りて、左方に、杉肌の櫻、杉肌の楓など、珍らしき寄生木を見た。又寒櫻といふもあり。境内老杉多く、漆紅葉も美し。

石段を上ると随神門、及び舞殿。右方には社務所、左方には神池。再び石段右方に別れて、いづれを登りても可。上には額堂（前殿）又小石段、左右備前焼の唐獅子貴とく、正面丹塗拜殿の建築壯嚴。左方に乳房神として祀られたる大公孫樹の枯木、元弘の兵燹に罹つたのが、再び芽を出せしとか。眞に芽出し。

われも亦芽を吹きたしと大いてふ

枯枝の如き手にて撫でにき

参拜して境内逍遙、老樹、古碑、あちら、こちら。祖神社といふあたり、紅葉目覺むるばかり。社後を虎眼山といふ。洞窟が有る筈。

櫻山四郎入道茲俊の居城と目せられる丘陵は、社殿に面して左方にある。今は社殿の石段に面して右方に、櫻山神社が建立されてあるので、それに参拜。南朝忠臣の靈に多大の敬意を表し、一族二十餘名と自刃の當時を偲ぶ。

櫻山や年々紅葉鮮やかに

鳥居前の街道を横切つて、神池を見る。石橋は高くて長くて珍らし。その橋杭まで石柱にて、水中より高々と突抜けたる、他で餘り見掛けず。記念に撮影。（口畫参照）池畔に料亭富久武の別荘あ

り、虎水庵といふ。入りて晝食。併し、酒豪揃ひとて、自分を除きて晝飲也。有永氏は當地の出身とて、特に注文を發し、菊料理。烏賊と菊花の酢の物、菊の葉の天ぷらなど結構。お替りまで取つた。すべて今日の攝待は、有永氏持にて、難有し。

此所から又奥に進みて、金丸村精興園の觀菊にと案内された。此所へは園特發のパスさへあり。福山驛より五里の北に當るが、片道六拾錢である。わざ／＼の見物、絶え間無し。二十餘年前から年一年と種子を撰擇、優秀より優秀へと向上進化。大菊の實生だけでも、實に拾五萬株。二町歩、全部が菊畑とは、他に類無し。されば全國は勿論、支那、滿鮮、その他よりも注文殺到。主人は山手義則氏。正に造菊王である。

園の入口の花壇先づ人目を驚かすが、それを入りてからの段々畑は、菊又菊、菊又菊。唯一輪の花すらも貴きもの、それが二町歩十五萬株。太物、細物、間、針、厚走り、大、小、長、短。菊の畑は菊の海。菊の海は菊の浪。菊から菊へ、菊から菊への菊から又菊。菊の天、菊の地、どこまで行つても菊ばかりで、菊の中に人間が埋まるは愚か。菊の中に家屋さへ埋まつてゐて、これを二ツの眼しか持たぬ者の見るのは、到底及び難し。

一つ園や十五萬株千代見草

一山や家を埋めて菊の花

これを誇張の形容と見られては、園主も不服、句主としても不服。濱本氏の國風、以て證とすべし。

あらかねの土地ある限り目もあやに

菊咲きほこる里やこの里

鶴賓

見ゆる限り菊の花かも金丸の

里は御國のいろに匂へる 同

長さ一丈餘のもあり。御紋章にあやかるともあり。この他、ダリヤ、朝顔にも富むといふ。主人の需に應じて、即興句を遺し、切り花を澤山頂きて上車、又奥に進み入つて、大石峽の奇觀を探らんとしたが、既に日没に近し。入口だけでも覗かんと、行ける處まで行く。大石峽は神谷川の上流で、藤尾谷ともいふ。猿ヶ嶽、犬塚などに、傳説あり。昔、猿多く、里の女に危害を加ふる爲、領主、犬を集めて山を包圍した。猿も退治したが、犬も討死が多く。その塚今も存すとか。

先年、濱本氏は、此邊で、大鷲が蛇を攫んで飛ぶのを眼前に見たと。箱谷美は奥に入るに従つて、佳なるべきも、時間無し。四時四十三分に引返して、福山には五時五十分着。清賞館にて、二階より下座敷に移り、又しても酒。能く呑む人達で、聊か迷惑。幸、散會は早かつた。

十七日、晴。朝、後藤氏来る。揮毫少し有り。桑田氏、昨夜、輜に歸り、自分の爲に家藏の鐔を探し出し、數枚を携へて惠與に來られた。一枚は藝州信家らしく、松笠松葉毛彫り阿彌陀鑑にて、角耳に籠目の金布目象嵌（堀井磊先生に柘本にて御鑑定を乞ひしに——正作中の放れ銘か、或はその模造か——とあり）別に達磨牛肉象嵌、これは庄内物か。其他にも珍品あり。難有し。鐔のお土産なれば、いくら重くても結構。

南小學校に行き、武勇童話。校長高橋政吉氏。自分が童話をやるとは知らなかつたとあり。ラチオを聴かれぬのか。歸りて中食。福山病院長、世良豊彦氏來訪。又福山市長、中野有光氏も一寸顔を出された。同じ宿に、縣の内務部長が泊つたので、そこへの序でとあつたが、いづれにしても、

此方から伺ひもせぬのに、恐縮。

有永氏其他濱本後藤二氏の御好意、感謝。殊に桑田氏には、老を案じて、連日來摺。嬉し。驛には輜より後藤証留氏も見えて、撮影。（挿畫参照）午後一時三十六分發車。（福山の古城を眼前にしなから、登り得ず、遺憾）

姫路こども會



福山驛の前著者

。石井山が見えたので、もう溜らなくなつた。先年老妻と共に梅子を連れて歸省募參。自分の埋骨の道を教へて來た時に、この汽車道を共に下瞰した。それを今逆に見上げるのだ。涙無くしてゐられるものか。

いや、亡女の事を思ふからイカン。

石井山麓では、武野藤介氏が生れたのだ。わが親愛なる武野藤介發祥の地に敬意を表すれば、愉快でゐられる。武野君よ、藤介さんよ、ゴッツブ王よ、「作品主義」よ、無理にそればかり考へてゐる間に、もう石井山の見えぬ岡山驛構内に列車は入つた。が、手にしてゐる鐔の上に、涙の痕のあるのを見出して、急いで拭いた。臉よりも先きに鐔を拭いたのだ。

姫路驛には五時三十九分着。石野米次郎氏が出迎はれてゐた。

同氏は多年兒童教育に盡碎。殊に童話に於ては關西の第一人者。小波でも、武彦でも、雉彦でも、季雄でも、姫路へ來れば皆氏を訪ひ、敬意を表せざる無し。自らは併し童話家に成り切れぬ吾儘者。初めて世話に成る譯で、今回氏等は、姫路こども會を創立。小波追悼會を催す。これに招かれたのだ。矢張り小波の紹介と思へば難有し。

自動車にて銀冶町の同氏邸に入つた。つね子夫人、令女米子輝子二嬢、令息禎彦氏。氣の置けぬ様に仕向けられて、何よりも嬉し。一族悉く趣味に生き、藝術に活く。幸福の家なり。隣家の親戚石野伊三郎氏も見えて、小波追憶談。

夕食を頂きてより、事務馴れてゐる石野氏の注文に委せ、揮毫。加入數、可成り多し。置炬燵を入れて頂き快眠。

十八日、晴。朝又揮毫。午前中、船場小學校幼年生に講演。場所は都合で、東別院の（本徳寺）本堂。伊藤脩氏紹介辭。石野氏閉會辭。

終つて、近き本龍寺會館の樓上に行き、中食。館主衣笠惠陵氏、行脚に理解深く、假睡の爲に毛布枕などいろ／＼御配慮。午後再び別院に行き、三年以上に講演。紹介者、兒島隆氏の他に、伊藤秀雄氏童話。閉會後、再び本龍寺會館にて揮毫。こども會員諸氏の他に、揮毫後援者として池田直躬氏。それから豊岡清治氏來訪。氏は親戚の親戚といふ關係にて、青年時代に來宅。奇遇であつた。

夕食を諸氏と共にして、この夜當館で通俗講演會。小波の寫眞を壇上に飾られた。會場はモダン造りで、聴衆二三百を容れ得るべく、趣味講演には適當。時として葬儀も営まれるので、此方は極樂。然るに向ふ横町にはカフエー有りて、盛んに蓄音機でヂヤズる也。極樂と地獄

と相對立は愉快。今回の旅行で、到る處惱まされたのは「東京音頭」のヨイ／＼であつた。

石野氏、開會辭。それから米子輝子二嬢指導、姫路家庭舞踊會員の、可愛らしいお嬢さん達の新舞踊數番（口畫參照）この第一部を終つて、第二部として自分の講演であつたが、こどもの會と大人の會との境目が不分明で、甚だ辯じ難くかつた。此夜、珍らしく雷雨。

十九日、晴。朝の間に、石野氏に導かれて、惣社裏門に鏢探し。數枚を求めた。それより城南小學校（校長高谷一次氏が、故長田秋濤氏を能く知つてゐられた）紹介、小西七郎氏。童話、魚橋參夫高島雄二の二氏に次ぎ一席。自動車にて東小學校に行き、中食。中野秀次、兒島隆二氏の童話中を、宿直室で假睡さして頂いた。魚橋氏親切に、電氣行火を仕掛けられて、嬉しかつた。

午後二時よりは、高島氏紹介、小西七郎、沼田藤次二氏童話に次ぎ又一席。それで石野邸へ會員諸氏と共に引擧げて、夕食を共にした。輝子嬢は、寶塚にて、白鷺光子として知られてゐる。前途を祝して。

鶴は舞 白鷺は新舞踊かな

午後六時よりは、日出紡織會社自彊婦人會（紹介戸田人事主任）講堂廣けれど發聲には樂。石野氏得意の一席に次ぎ、自分も一席。こども會員諸氏、石野家の人々等に見送られて、姫路驛を八時二十一分發。食堂車。寢臺車。名古屋で下車せよ、小鳥網を見せると、牧野氏から度々九州へ手紙。併し歸心眞に箭の如し、失禮して通過。朝の食堂に行き、水谷竹紫氏の同乗を知つた。同氏は國府津で下車。品川へは九時四十九分着。三十七日目だ。併し青森に比すれば全く樂行脚で、敢て疲勞を感じなかつた。全く後援各位のお蔭であつた。（昭和九年一月五日午後起稿——途中三日間栃木行——同十二日午前七時、風邪に苦しみなから脱稿）

江見といふ男は、人の世話に成る時ばかり、大層喜んだ顔を見せるが、時が過ぎると、丸で忘れてゐるやうだ。行脚から歸宅しても、禮狀もよこさない。——或は又、江見といふ男は、手紙を出しても返事なくれない。名産を送つても禮狀を送つて來ぬ。——或は、物を依頼しても、逃げてばかりゐる。——或は、事の問合せに答へが冷淡だ。等々、々々、々々。

私の短所を遺憾なく、指摘されて、恐縮ながら、餘りに御後援者が多数なので、實際は一々手が廻らないのです。——手は廻りませんが、頭の中は能く廻轉して、相済まぬ相済まぬと、常に恐縮。恩を知らぬと罵倒されるのが、私としては一番ツライのです。

唯只その謝恩の表現としては『水蔭行脚全集』を一生懸命に書く——これを長文の私信と見て、どうか御海容を願ひます。甚だ勝手千萬ながら、悪しからず。

實 感 實 記
自 著 自 版

打 明 け ば な し

先づ新年の御慶を此欄で申し上げます。昨年亡女の服喪といふわけでもなかつたのですが、全然元氣なく、どちらへも賀状を呈せず。本年は又、行脚に追はれ、その紀行執筆に驅られて、大晦日は勿論、元旦早朝からベンを走らせ、その上に風邪、又しても御慶を申し上げ得ず。然るに皆様からは却つて御鄭重なる御祝詞を頂き、恐縮の他無し。

併し、年末年初を無考慮に、唯一心、全集を書き進んだといふ著作精神にのみ生きて行く者の勝手氣儘、それは必ず御見ゆるし下さる事と、そんな風に考へて、全集後援者に對する私の甘え氣味を、どうかお咎め下さいますな。

お蔭で、自著自版は大成功で、今回も全集第五巻を發行し得るに至りました。それは偏に皆様の御芳情、感激又感激。實は最少し早く出版の心組が、昨年は行脚大當りで、手よりも足の方が餘計働きまして、順送りに遅れたわけです。『朝鮮行脚』や『上總行脚』や『白河西郷太田原』や、又しても採録し得ず。約束を反古にして、何とも申譯が御座いません。のみならず、當卷には『北國行脚記』や『芳賀めぐり』や、その他『過去の旅路』や『行脚可笑記』等、多量に編入の心組。それまで抜くに至りまして、いよ／＼汗顔。

『過去の旅路』には、明治二十二年の近畿に於ける難行苦行を發表の苦でしたが、それに至らず、『可笑記』では、熱海紅葉祭の奇談、それも載せ得ず。どうか次巻まで御勘辨。『北國行脚』には、雅俗兩極端の珍記事を滿載、是非お楽しみ願ひます。

本巻は頁數を殖やして、いろ／＼書きたいのでありましたが、風邪が頑質で、今、斯うしてペンを走らせるのも、發熱中でツライのです。已むを得ず打切りと致しました。『最近身邊抄録』でも、種々書きたいので。たとへば、小波の死の前後に就て、或はその感想、いろ／＼有るのですが、それは後日に譲るの他有りません。訪問客に就て、到來品に就て、著作上に、行脚上に、多々報告が有るのですけれど……併し、今度は、追掛けに、第六巻を發行。三月中旬には御手元に送りたいと意氣込んでゐます。

前巻に限り、署名捺印を怠りましたのは、小波の最期に連關して、多忙を極めたからで、全部省略。一冊たりとも署名はしませんでした。それを誤解して、愛知縣海部郡の某氏から手厳しい書面と共に返品して來ました——前金が切れてゐるので、署名をしないのだらう。署名無き書冊は、必用が無いから返す云々——何んといふ淺猿しい考へ方でしたらう。癪に觸つたので、痛罵してやりました。

事務上に就て申上げておきますが、現金引替郵便で注文が有つて、それに従つて手續きをしたのに對して、引替期限内に届へ拂込み無き爲、その儘局から返品に成つたのが、二三口有りました。損害は金銭上のみでなく、手數上甚だ迷惑——現金引替郵便は斷然御免蒙ります。(中には、わざわざ、直接御買上げに來られたのがあり、感激)

私が、ラヂオ放送の原稿、或は講演の速記、それが澤山溜りましたから、『水蔭趣味講演集』として、時々出版して見たいと計畫中です。第一巻として『明治文壇篇』定價五十錢位(假綴)いづれ確定次第、御案内申上げます。どうか御購讀を願ひます。

飛行機に載せて、空中行脚をさせると申込んだ人が、昨年末に有りました。私も乘氣に成つてゐたのでしたが、企畫だけでボシヤりました。能く先方の人物を見究めてからでない、危いといふ事を、遅延ながら覺りました。

『實話雜誌』の懇望で『實說金色夜叉』といふのを、約一ヶ年に亘つて連載。既に第一回は發表。これは一名を『硯友戀愛史』としても好いと思ひます。いづれ一冊に纏めて、江水社から出版したいとも考へてゐます。

年の暮の忙しい最中『現代』の座談會に引出されました。十二月二十六日、築地八百善、會する者、武内桂舟、暹羅麗水、前田曙山、村上浪六、本田美禪、田口抑汀諸氏。『明治文壇の思出話』いづれ同誌三月號で發表でせうが、私は此種材料、既に幾度か執筆や講演の後にて、餘り多くを語りませんでした。(改選社から『日本文學講座』として『硯友社研究』をといふ注文。研究される者が、研究するのも變ながら、人手に掛つて弄り殺しにされるよりはと『硯友社と紅葉』から抄録して渡しました)

白木屋五階で——相撲展覽會に出品をと乞はれて、力士の手形足形を貸しました。この他、相撲シーズンとかで、談話拜聴に來た新聞雜誌、いづれもお断りしました。種切れなんです。

「實業之世界」から「千九百三十四年型」に就て何か答へろとあり。又『京濱』からも同じ意味で問ひ合せて来ましたから、双方とも猛烈に——三四年といふ様な軽浮な紀元を用ゐる人種を極度に忌避云々——と答へて置きましたが、一向感じません。そのまゝ諸家の答案と一緒に出してゐました。

發熱に浮かされて、ついウカ／＼と愚にもつかぬ事まで打明けて、相済みません。とてもものに、最後に一ツお願。それは全集發行の最初に、資本金御貸與の意味で、前金にて數回分御拂込の御方が多く、大變助かりましたが、その内で五卷分のが、これで切れますから、どうか又宜しく……（既に二三から御送附のも有りました。感謝します）

老眼耆視

今回の活版組方は、前回までのとは雲泥の相違、初校から親切なので、安心して原稿が出せましたが、それでも私の頭がわるいので、校了後にチヨイ／＼、失敗を見出しました。○第七頁——岩手山は岩木山○第八頁——八戸は野邊地○二十一頁——長崎醫師會長は、醫師會長老。その他多かるべし。御免下さい。

實感實記 水蔭行脚全集

——自著自版——
自著自版の意味を御諒解下さらぬのが多く、一體江水社といふのは、どうした本屋ですか、なんて、問はれて悲觀。ドコの本屋でも、私の様な老文士の物を顧みませんので、已むを得ず自分で出版してゐるので、眞の御同情に生きてゐるので。
——全集と云つても、単行本同様です。御關係の土地々々の部分に御注文下さつて結構です。御申込次第の本が、併し、振替口座を御利用が一番簡単です。
——私の苦しい經濟を既に御推察の各位なので、有してゐます。これが特色です。強味です。
——巻中に芳名を記載させて頂き、行脚御後援を永遠に感謝する。それだけの温味に對して、せめて一冊位お求め下さるといふのですが、それが必ずしも然ら行かぬは、苦笑。
——書店へ賣捌は絶體に委託しませんから、直接御申込を願ひたい。廣告も新聞へは出しません。
——圖書館とか、新聞社とか、雑誌社とか、或は有力な團體には寄贈してゐますから、部數の少數の割には廣く讀まれてゐます。
——行脚の時に、いろ／＼世話をしてやつたのだから、本は口で寄越せといふお考へは、勘辨して下さい。
——部數に限りがあるので、お考へは、ツライのです。
——現在の讀者は、私の愚かさを能く知つてゐられて、成すがまじにさせて下さるので、感謝してゐます。もうこの讀者だけに、澤山、諒解無き方には、強てお願ひせずとも發行がつけられさうです。

定價金壹圓（送料不要）

昭和九年一月二十日印刷
昭和九年一月廿三日發行
著者 水蔭 江見忠功
發行所 倉野清雄
印刷所 大島豊作
東京市品川區南品川一ノ二五二
福井町一ノ二七
印刷所 太英社印刷所
同 上
發行所 振替口座 江水社
東京二九二三〇番

—後世に世界的珍本として遺ります—
 —將來に日本産文學として輝きます—
 —ですが今では時代逆行の古物作品—
 —讀者と御一緒に旅行してゐる気分—

佐渡へ佐渡へ (再版) 紙數百一十二頁
 信濃よ越後よ (既刊) 紙數百六十七頁
 九州と北海道 (既刊) 紙數百六十八頁
 十縣飛々行脚 (既刊) 紙數百六十八頁
 樂行脚苦行脚 (新刊) 紙數百六十八頁
 北國よ關東よ (假定) 紙數百六十八頁
 以上各壹冊壹圓宛 (送料不要)

一字一涙の記録

一世一代の傑作

水蔭の娘 (再版)

紙數五十九頁
 寫眞版九面
 定價三十五錢
 送料不要

發行所 江 水 社
 東京市品川南品川一

◇ 江水社の新事業 ◇

水蔭趣味講演集 (定價五錢位)

ラヂオ放送の原稿や、講演會の速記や、それが澤山溜りました。これは著述品として、別の香味が有る様に、自分では買冠つてゐます。これを部類分けにして、一卷に十五種位を盛り込んで、江水社一流の粗製本で高價に發賣したいと思ひます。

- ◎ 明治文壇篇
- ◎ 明治世相篇
- ◎ 地理本位篇
- ◎ 人物本位篇
- ◎ 歴史餘談篇
- ◎ 日本國技篇

こんな風に、
 分けたいと思
 ひますが、ど
 うなりますか

「明治文壇篇」には、佐渡と紅葉山人。紅葉と佐渡。紅葉と越後。明治文豪と佐渡。尾崎紅葉の事ども。明治文壇秘話。文士劇の今昔。明治の新聞挿畫に就て。嗚呼巖谷小波、等。明治の新聞挿畫に古い珍しい寫眞や、ラヂオ放送の寫眞やを入れたいと思つてゐます。

終

